

# 越ヶ谷御殿跡発掘調査報告書Ⅰ

—サンリットタウン越谷A・サンリットタウン越谷B  
新築工事に係る埋蔵文化財発掘調査報告書—

2017

越谷市教育委員会



越ヶ谷御殿跡出土遺物 集合写真

# 序

埼玉県東部は関東平野の中心的な位置を占め、数多くの河川が集中する全国有数の地域として知られています。越谷市は元荒川や古利根川をはじめとする中川水系の諸河川に囲まれ、高次の都市機能と交通利便性を備えつつも、これらの河川が育んだ豊かな自然に恵まれています。本市においても「水と緑と太陽に恵まれた人と地域が支える安全・安心・快適都市」を将来像に掲げ、実現に向けて取り組んでいるところです。

このたび、御殿町地内において遺跡の存在が明らかとなり、関係者からの多大なる理解と協力を得ながら、越谷市教育委員会で発掘調査を実施いたしました。

御殿町は元荒川流域の自然堤防上に立地し、その立地の良さなどから中世には土豪・会田出羽氏の陣屋が構えられていましたが、徳川家康の求めに応じてその地を差し上げ、越ヶ谷御殿が設置されたと伝えられています。明暦の大火による江戸城焼失の復興のため、越ヶ谷御殿は解体され、現在、越ヶ谷御殿が御殿町のうちのどこに存在していたかは明らかではありませんが、その名残として、御殿町の地名が今に残されています。

今回の発掘調査では、越ヶ谷御殿の中核が設置されていた場所の発見につながる成果は得られませんでした。中世の板碑や陶磁器等が発見され、越ヶ谷御殿が設置される以前の状況を知る手がかりが得られました。

本書は、これらの発掘調査成果をまとめたものです。埋蔵文化財の保護および普及・啓発の資料として、また、学術研究の基礎資料として広く活用していただければ幸いです。

結びに、発掘調査・本書の刊行にあたり特段のご理解とご協力を賜りました土地所有者、地域の多くの方々並びに関係者の皆様に対し、深く感謝申し上げます。

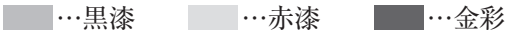


平成29年2月

越谷市教育委員会  
教育長 吉田 茂

# 例 言

- 1 本書は、埼玉県越谷市大字御殿町に所在する越ヶ谷御殿跡の発掘調査報告書である。
- 2 埼玉県埋蔵文化財包蔵地台帳における県遺跡番号と調査・整理時の略号は以下のとおりである。  
越ヶ谷御殿跡 (No.78 - 008)、略号GTN
- 3 本調査は、集合住宅新築工事に伴う事前記録保存のための発掘調査であり、越谷市教育委員会が調査主体者となり実施した。
- 4 発掘作業から発掘調査報告書作成・刊行に係る費用は工事主体者である個人が負担した。
- 5 発掘作業、整理等作業、報告書作成・刊行は第I章3に示した組織により実施した。  
発掘作業は平成28年1月14日から平成28年2月26日まで実施した。整理等作業、報告書作成・刊行は、平成28年3月1日から平成29年2月28日まで実施した。
- 6 発掘及び整理等作業、本報告書の編集及び執筆は菟原（越谷市教育委員会）が担当した。また、遺物の実測及びトレースは鬼塚・安井が、遺構及び遺物の写真撮影は菟原が行った。
- 7 本書にかかる記録類及び出土遺物等は、越谷市教育委員会が保管している。
- 8 発掘調査に係る基準点測量・水準測量・平板測量（トータルステーションを用いた平面図作成）は株式会社中野技術が行った。
- 9 本報告書については、発掘調査成果の周知と活用又は学術研究、教育等を目的とする場合は、越谷市教育委員会の承諾なく無償で複製して利用できる。
- 10 発掘調査の実施にあたり、下記の方々から御教示、御協力を賜った。記して感謝申し上げます。  
調査参加者（敬称略、五十音順）  
奥角 惇 鬼塚千花 坂本信男 田村英毅 高岡資明 高橋興四郎 高橋隆夫 浜屋富男  
原田文雄 宮下 勇 安井陽子 渡辺博道  
整理作業員（敬称略、五十音順）  
鬼塚千花 新岡秀章 藤田和江 三上由佳 安井陽子 山岸明美
- 11 本書の作成にあたり、下記の方々から御教示、御協力を賜った。記して感謝申し上げます。  
（敬称略、五十音順）  
青柳圭治 浅野良治 池尻 篤 奥野麦生 鬼塚知典 折原 覚 河井伸一 小沼幸雄  
小宮雪晴 篠田泰輔 嶋村英之 杉山和徳 関 絵美 土屋和慶 長島正弘 林 宏一  
晝間芳樹 広瀬 純 守谷健吾 諸岡 勝 山崎功二 油布憲昭 横川貴男  
越谷市郷土研究会 御殿町自治会 大東建託株式会社越谷支店 東部地区文化財担当者会

# 凡 例

- 1 本報告書における X・Y の座標値は、世界測地系（新測地系）である。
- 2 各挿図に記した方位は、全て座標北を指す。
- 3 調査で使用した大グリッドは、国土標準平面直角座標に基づく 10 m × 10 m の範囲とし、この中を 2 m × 2 m の 25 小グリッドに細分した。
- 4 大グリッドの名称は、北西を基点とし、北から南方向にアルファベット（A・B・C・・・）、西から東方向に数字（1・2・3・・・）を付し、アルファベットと数字を組み合わせて呼称した。  
大グリッドはおおむね越谷市御殿町地内を網羅するよう設定し、A 1 グリッド北西隅の座標を X = - 11350.000、Y = - 4400.000 とした。
- 5 小グリッドの名称は北西側を 1 とし、東に向かって 1～5、2 段目は 6～10、以下同様にして続き、5 段目で 21～25 とした。
- 6 遺構断面図に記した水準数値は、海拔標高（単位 m）を表す。
- 7 本書の本文・挿図・表・写真図版に記した遺構の略号は、以下のとおりである。なお、遺構一覧表の計測値は m 単位とし、（）は残存値を示す。  
S D・・・溝    S K・・・土坑    S E・・・井戸    P・・・ピット
- 8 遺物観察表の表記方法は以下のとおりである。
  - ・遺物計測値は大きさを cm、重さを g 単位とした。
  - ・計測値の（）は残存値を示す。
- 9 土層観察と遺物における色調の判定は、『新版標準土色帖』（小山正忠・竹原秀雄編著日本色研事業株式会社）を使用した。
- 10 「主軸」は長軸を主軸とみなした。「主軸方向」は主軸が座標北からみて、どの方向にどれだけ振れているかを角度で表示した。（例 N - 10° - E、N - 10° - W）
- 11 木製品実測図のトーンは以下のとおりである。  
・・・黒漆    ・・・赤漆    ・・・金彩

# 目 次

巻頭写真

序

例言

凡例

目次（挿図目次・挿表目次・写真図版目次）

I	発掘調査の概要	1
1.	発掘調査に至る経過	1
2.	発掘作業、整理等作業、報告書作成・刊行の組織	2
	（1）発掘作業	
	（2）整理等作業及び報告書作成・刊行	
II	遺跡の位置と環境	3
1.	地理的環境	3
2.	歴史的環境	4
III	調査の方法と成果	7
1.	調査の概要	7
2.	基本層序	7
3.	遺構	8
4.	遺物	23
	（1）土器・陶磁器等	
	（2）木製品	
IV	総括	41

写真図版（遺構・遺物）

## 挿図目次

第1図	越谷市の位置	1
第2図	埼玉県の地形	3
第3図	越谷市の地形	5
第4図	御殿町区域図	6
第5図	調査区位置図	6
第6図	グリッド配置図	7
第7図	調査区全体図	12
第8図	調査区分割図1	13
第9図	調査区分割図2	14
第10図	遺構図（S K 02）	15
第11図	遺構図（S K 03）	16
第12図	遺構図（S K・S E）	17
第13図	遺構図（S D）	19
第14図	S D内遺物出土位置	21
第15図	出土遺物1（土器・陶磁器等）	27
第16図	出土遺物2（土器・陶磁器等）	28
第17図	出土遺物3（土器・陶磁器等）	29
第18図	出土遺物4（土器・陶磁器等）	30
第19図	出土遺物5（土器・陶磁器等）	31
第20図	出土遺物6（土器・陶磁器等）	32
第21図	出土遺物7（木製品）	33
第22図	出土遺物8（木製品）	34
第23図	出土遺物9（木製品）	35
第24図	出土遺物10（木製品）	36
第25図	越ヶ谷宿町割図	42
第26図	越ヶ谷本町周辺白図	42
第27図	町割図と白図の合成図	42
第28図	越ヶ谷御殿跡推定地	43

## 挿表目次

第1表	市内遺跡一覧	5
第2表	遺構一覧表	22
第3表	遺物観察表（土器・陶磁器等）	37
第4表	遺物観察表（土製品等）	39
第5表	遺物観察表（石製品等）	39
第6表	遺物観察表（金属製品）	40
第7表	遺物観察表（木製品）	40

## 写真図版目次

写真図版1	写真1 S D 01・S D 02完掘状況（南東から）	写真29 S D 01～S D 05 a - a' 土層断面（南西から）
	写真2 S D 04・S D 05完掘状況（南東から）	写真30 S D 01・S D 02切り合い（南から）
写真図版2	写真3 S D 07完掘状況（南東から）	写真31 S D 01・S D 04・S D 07切り合い（南から）
	写真4 S D 08・S D 09完掘状況（南西から）	写真32 S D 04・S D 07・S D 02切り合い（南から）
写真図版3	写真5 S K 02土層断面（南西から）	写真33 S D 07・S D 02・S D 05切り合い（南から）
	写真6 S K 02遺物出土状況（南西から）	写真34 S D 02・S D 05・切り合い（南から）
	写真7 S K 02完掘状況（南西から）	写真35 S D 08 h - h' 土層断面（北から）
	写真8 S K 03土層断面（南西から）	写真36 S D 08 g - g' 土層断面（南から）
	写真9 S K 03板碑（42）出土状況（北から）	写真図版7
	写真10 S K 03板碑（42）出土状況（北から）	S K 02出土遺物（1）
	写真11 S K 03木製品出土状況（北から）	写真図版8
	写真12 S K 03板碑（43）出土状況（南西から）	S K 02出土遺物（2）
写真図版4	写真13 S K 03板碑（43）出土状況（南西から）	写真図版9
	写真14 S K 04土層断面（南から）	S K 03・S K 04出土遺物
	写真15 S K 04遺物出土状況（西から）	写真図版10
	写真16 S K 05土層断面（南から）	S K 03・S K 04・S D 04出土板碑
	写真17 S K 06・S K 07土層断面（南西から）	写真図版11
	写真18 S K 08遺物（68）出土状況（南西から）	S K 05・S K 06出土遺物
	写真19 S K 08木製品（147）出土状況（南から）	写真図版12
	写真20 S K 09土層断面（南から）	S K 07・S K 08・S K 09・S K 11出土遺物
写真図版5	写真21 S K 10土層断面（南から）	写真図版13
	写真22 S K 11土層断面（南東から）	S E 01・S D 01・S D 02・S D 04・S D 06・
	写真23 S K 11土層断面（南西から）	S D 07・グリッド出土遺物
	写真24 S E 01土層断面（南から）	写真図版14
	写真25 S D 01土層断面（南から）	S D 01・S K 02出土木製品
	写真26 S D 02土層断面（南から）	写真図版15
	写真27 S D 04土層断面（南から）	S K 02・S K 05・S K 11出土木製品
	写真28 S D 09土層断面（東から）	写真図版16
		S K 03・S K 08出土木製品



# I 発掘調査の概要

## 1. 発掘調査に至る経過

越谷市（第1図）には「御殿町」と呼ばれる町名がある。これは慶長9年（1604）に徳川家康が放鷹時の宿泊所などのために、現在の御殿町地内に御殿を設営したことによるとされている。

越谷市教育委員会では、昭和47年に御殿町一帯を「越ヶ谷御殿跡」として市の旧跡に指定し、昭和61年には埋蔵文化財包蔵地「越ヶ谷御殿跡」として周知し、保護を図ってきた。

平成27年10月19日、越谷市大字御殿町4414-1、4414-2の各一部における集合住宅新築工事に伴い、市指定文化財の現状変更許可申請書が原因者から提出された。このことを受け、越谷市教育委員会が原因者と協議を行った。

その結果、事業範囲には埋蔵文化財が存在する可能性があるため、開発行為に先立ち、越谷市教育委員会が試掘調査を実施して遺跡の有無を確認することとした。

平成27年11月4・6・10日の3日間で試掘調査を実施したところ、地表面下約90cmで溝、土坑等の遺構が確認され、中近世の陶磁器や板碑細片が出土した。

試掘調査の結果を受けて改めて原因者との協議を行い、開発行為と埋蔵文化財保護の調整を行ったところ、集合住宅新築の計画に変更はなく、また、新築される範囲については柱状改良工事が必須であり、それにより埋蔵文化財が破壊されるため、記録保存のための発掘調査が必要となった。そのため、越谷市教育委員会と原因者の間で、平成27年12月25日付けで協定書を取り交わし、越谷市教育委員会が調査主体者となって調査を実施し、原因者が費用を負担することとなった。

調査区の設定に際し、事業範囲には昭和40年代前半に建てられたと考えられる建物が存在しており、その基礎によって地表面下90cm以上の深さで既に埋蔵文化財に影響が及んでいたため、既存建物が存在する範囲については発掘調査の対象外とした。

また、集合住宅が新築される範囲以外については、駐車場として整備するためにアスファルト舗装がされるものの、埋蔵文化財との間に30cm以上の保護層を有し、遺跡が保護されるため、発掘調査の対象外とした。

なお、収録した発掘調査に係る届出・通知等の法的手続きの概要は以下のとおりである。

文化財保護法第93条第1項に基づく埋蔵文化財の発掘届

届出年月日：平成27年11月11日

上記届出に対する指示通知

通知者：埼玉県教育委員会教育長

通知年月日・番号：平成27年12月24日付教生文第4-1263号

文化財保護法第99条に基づく埋蔵文化財発掘調査の通知

通知者：越谷市教育委員会教育長

通知年月日・番号：平成28年1月7日付越教生743号

埋蔵物の文化財認定通知

通知者：越谷市教育委員会教育長

通知年月日・番号：平成28年3月8日付越教生862号



第1図 越谷市の位置

## 2. 発掘作業、整理等作業、報告書作成・刊行の組織

調査主体者 越谷市教育委員会

### (1) 発掘作業

平成27年度

教育長	吉田 茂	生涯学習課文化財担当主事	植木 雅博
教育総務部長	横川 清	生涯学習課文化財担当主事	菟原 雄大
教育総務部副部長	植田 春夫	越谷市市史専門委員	鬼塚 千花
生涯学習課長	福田 博	越谷市市史専門委員	安井 陽子
生涯学習課副課長	木村 和明		
生涯学習課副課長	前田 博志		

### (2) 整理等作業及び報告書作成・刊行

平成28年度

教育長	吉田 茂	生涯学習課文化財担当主任	植木 雅博
教育総務部長	横川 清	生涯学習課文化財担当主事	菟原 雄大
教育総務部副部長	矢部 新治	生涯学習課文化財担当主事	荒屋敷 舞
生涯学習課長	福田 博	越谷市市史専門委員	鬼塚 千花
生涯学習課調整幹	木村 和明	越谷市市史専門委員	安井 陽子
生涯学習課副課長	前田 博志		



試掘作業風景



試掘作業風景



発掘作業風景



現地説明会風景

## II 遺跡の立地と環境

### 1. 地理的環境

越谷市は埼玉県南東部に広く発達する中川低地のなかに位置している（第2図）。中川低地は埼玉県西南部に分布する荒川低地と川口市南部で合流し、東京の下町低地に続いている。市域は元荒川・古利根川・綾瀬川の顕著な曲流によって地形が形成され、その流域に沿って自然堤防の微高地が発達していることから、市域の土地形成にはこれらの河川が大きな役割をはたしていたことがうかがえる。

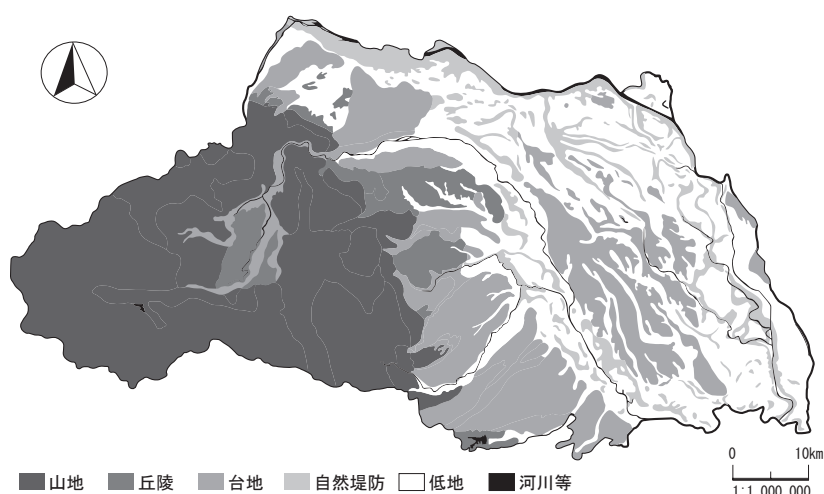
現在までに元荒川の曲流部分については直線化がなされているが、元荒川・古利根川の流路については比較的一定していたと考えられ、現在の流路に沿ったかたちで自然堤防が発達している。これに比べて綾瀬川の流路は自然堤防が分散しており、乱流して流路を変えていたことがうかがえる（第3図）。

越谷市域の標高は北部で6m前後、南部で4m前後を示し、平均傾斜1,000分の0.4程度の非常にゆるい傾斜をしている。市域の地形としては自然堤防と後背低湿地との微地形が顕著であり、高度差1m前後のゆるい起伏が見られるにすぎない。近年までは自然堤防の微高地に住宅が集まり集落が作られ、後背低湿地が水田として耕作されるという、地形に合わせた土地利用がなされていたが、現在では後背低湿地にも住宅等が建てられ、土地利用の様子が急激に変化している。

第3図は市域の地形に遺跡の位置を追加した図であるが、遺跡は全て自然堤防上に立地していることが分かる。現状では元荒川由来の自然堤防上に遺跡が多く存在しているようであるが、市域には未発見の遺跡も多く存在している可能性もあるため、詳細な分布は不明と言わざるを得ない。

越ヶ谷御殿跡は元荒川の右岸の自然堤防上に位置する。現在、すぐ北側は元荒川が流れるが、もともとの元荒川（荒川）の流れは第3図で見ると、北東側に大きく屈曲して流れていた。

これを慶長年間に瓦曾根溜井を構築する際、大きく屈曲した流路を直道に瀬替して瓦曾根溜井までの流路を円滑にし、旧流路は遊水地として残された。つまり越ヶ谷御殿は、地形的には天然の要害である荒川本流から脇にそれた地点に位置づけられ、荒川沿いかつ奥州街道筋で市場を持つという、流通面で利便性の高い位置に所在していたと言える。



第2図 埼玉県の地形

## 2. 歴史的環境

御殿町及び周辺一帯においてはこれまで発掘調査例がなく、歴史的な様相は判然としない。そのため、文献史料等からその様子を概観していく。

御殿町地内には現在、時代の最も遡れる資料として建長元年（1249）銘の板碑が存在している（第4図）。高さ155cm、幅56cmを測り、越谷市内で最古最大の板碑で、越谷市指定文化財に指定されている。板碑造立初期段階のものといえ、埼玉県東部地区でも最古段階のものである。このような板碑を造立できる勢力が存在していたことを示す資料といえる。

その後、御殿町一帯は越ヶ谷郷の土豪会田出羽の陣屋となった。越ヶ谷御殿はまだ当該地に存在せず、その前身となる離館が埼玉郡増林村（現在の越谷市増林）に設けられていた。離館については、設立年代や設置場所もはっきりしていない。設置場所については、以下、2つの説が唱えられている。

- ・増林のうち元荒川の古川沿いに存在する「城の上」という小字を離館の比定地とする説。
- ・古利根川沿いに位置する浄土宗林泉寺の周辺を離館の比定地とする説。林泉寺には徳川家康が馬の綱をつないだという「駒止めの槓」や、口をすすいで手を洗ったとされる「権現井戸」などの言い伝えが残されている。

これらを確定する資料はないが、ともかく、徳川実紀によると、「慶長九年是年 埼玉郡増林村の御離館を越谷驛にうつされ。濱野藤右衛門某に勤番を仰付らる。（この御殿は明暦三年の災後江戸城に移されかりやに用らる。今も御殿跡といふ地名あり）」と記されている。

越ヶ谷御殿の成立については、越ヶ谷会田出羽家系譜によると、「東照宮関東御入国之時度々越ヶ谷辺被為成之刻 資久初奉拜謁其後新方領増林村之内御茶屋御殿有之処 越ヶ谷御鷹野御成之節出羽屋敷林等被遊上覧 場所宜候ニ付地面差上可旨被仰付則奉指上 御殿并御賄屋敷共 出羽所持地之内被遊御建（以下略）」と記されており、徳川実紀と併せると、慶長九年（1604）増林村の離館を家康の求めにより会田出羽家屋敷に移したことが分かる。

御殿の終焉については、やはり、越ヶ谷会田出羽家系譜に「出羽奉差上候地面御座候 御殿、明暦三西年江戸大火之節越ヶ谷御殿并御道具共江戸城江被遊御取引、其後右場所不残作場と相成候（以下略）」とあり、明暦3年（1657）の江戸大火、いわゆる明暦の大火により江戸城が焼失した際、越ヶ谷御殿が将軍の居城として江戸城二の丸に移され、その跡地は全て作場（畑）に開発されたとされる。

これらのことから、御殿町地内には、会田出羽屋敷や越ヶ谷御殿の痕跡、御殿解体後の畑の痕跡が遺されている可能性があるといえる。ただし、御殿町は慶長年間の元荒川直線化や大正13年の元荒川改修（逆川と元荒川の合流地点から元荒川の右折部にかけて、御殿の礎石ともみられる6個の大きな角石が発掘されたといわれている）に際し、大規模な開削が行われていることから、越ヶ谷御殿の痕跡は失われてしまったという見解もある。

また、昭和35年には御殿町から瓦曾根溜井に至る葛西用水と元荒川の分離工事がはじまったが、その際、御殿町地域を東西に分けるように葛西用水の開削が行われた。昭和42年に竣工するが、その際に越ヶ谷御殿のみならず遺跡と認められるものが発見されたという記録はみられない。

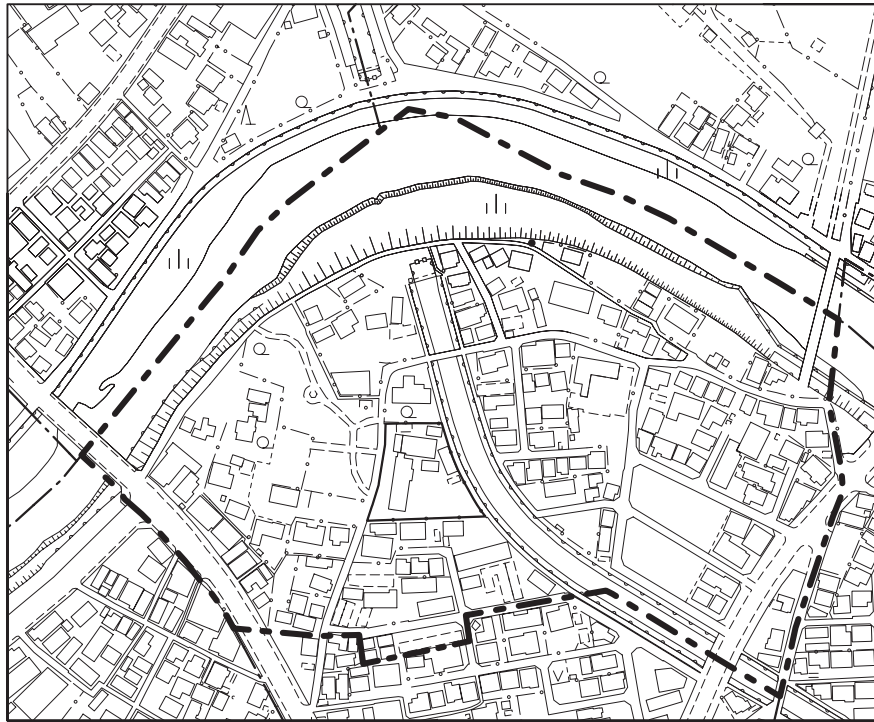
以上、御殿町地内に関して、現在得られる資料からその歴史を概観したが、御殿の位置については不明な点が多いと言わざるを得ない状況である。



第3図 越谷市の地形

第1表 市内遺跡一覧

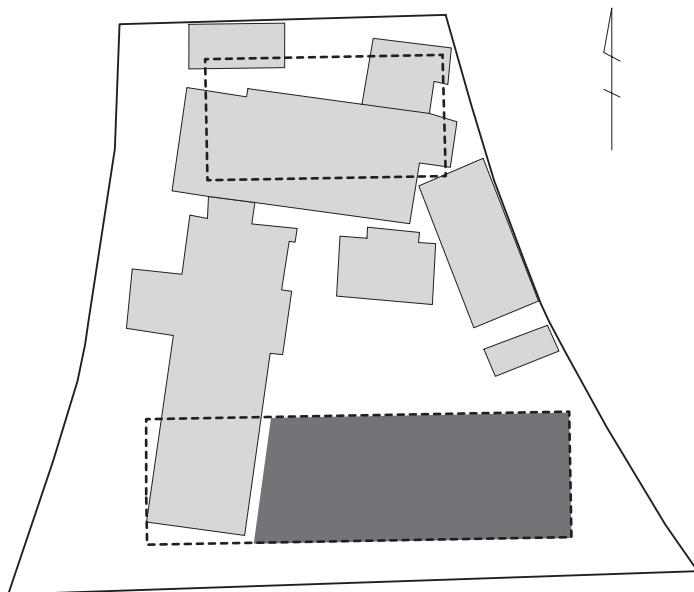
番号	県遺跡番号	遺跡名	時期
1	78-001	見田方遺跡	古墳
2	78-002	No.2 遺跡	奈良、平安
3	78-003	一番遺跡	室町、戦国
4	78-004	大相模次郎能高館跡	不明
5	78-005	会田出羽屋敷	近世
6	欠番	—	—
7	78-007	清浄院開山塚	鎌倉
8	78-008	越ヶ谷御殿跡	中世、近世
9	78-009	No.9 遺跡	奈良、平安
10	78-010	蒲生の一里塚	近世
11	78-011	大道第1 遺跡	平安、近世
12	78-012	大道第2 遺跡	平安、近世
13	78-013	No.13 遺跡	奈良、平安
14	78-014	No.14 遺跡	奈良、平安
15	78-015	No.15 遺跡	奈良、平安
16	78-016	No.16 遺跡	奈良、平安、近世
17	78-017	海道西遺跡	奈良、平安、近世



- 御殿町の区域
- 調査対象地
- 建長元年板碑所在場所

0 1:3000 90m

第4図 御殿町区域図



- 既存建物
- 集合住宅新築範囲
- 調査区

本図は既成図を改変して作成したものであり、建物の大きさや位置関係は実際とは若干異なっている。

0 1:700 20m

第5図 調査区位置図

# Ⅲ 調査の方法と成果

## 1. 調査の概要

本調査は、越ヶ谷御殿跡における初の本格的な発掘調査である。「Ⅱ 2. 歴史的環境」でも触れたように、御殿町一帯は文献資料等から中近世に至る遺跡が存在する可能性が指摘されてきたが、本調査でそのことを裏付けるように中近世の遺構・遺物が検出された。

遺物については江戸時代中期の近世陶磁器、瓦、土製品、木製品などが出土したほか中世の板碑、青磁、瓦質土器などが出土した。

遺構については、調査区の大部分が溝によって占められ、調査区東半分よりに南北方向の溝が6条、西半分よりに南北方向の溝が1条、東西方向の溝が1条確認された。切りあい関係から調査区西半分よりの溝が古相を呈するが、遺物の出土が無く時期の確定には至らなかった。

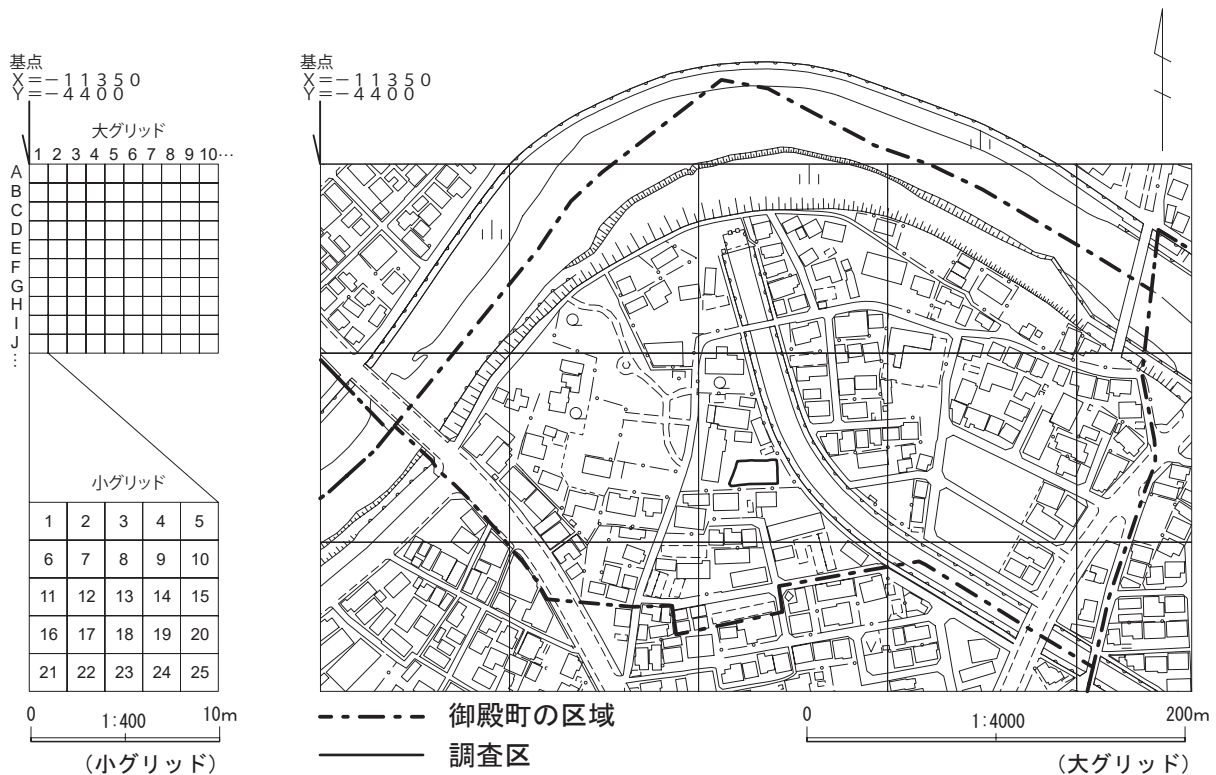
## 2. 基本層序

本調査区の基本層序は以下のとおりである。

表土・盛土層（厚さ約80cm）

遺物包含層（厚さ約10cm、7.5Y2/2オリーブ黒色シルト、幕末～近代遺物含む、しまり強い、粘性強い）

地山（2.5Y4/4オリーブ褐色シルト、しまり強い、粘性強い）



第6図 グリッド配置図

### 3. 遺構

#### SK02 (第10図)

遺構の大部分がQ24グリッドに位置する。直径約1.4mの円形を呈する井戸であり、SD01・SD06を掘り込んで構築されている。断面形状は二段掘りとなり、1段目は深くなるにつれてやや幅を減じた逆台形状を呈し、深さは約0.6mを測る。2段目は1段目の中心部分を楕円形に、深さ約1.5mほぼ垂直に掘り込む。

1段目の掘り方外周には、粘性の高い灰白色～黄灰色シルトを裏込め土としている。井戸を構築する際には二段掘りとしていたが、使用時にはうら込め土を充填することで、2段目の掘り方と同じ直径に合わせたものと推定される。

遺構を掘削した深さは2.1mを測る。掘削を止めた底面は砂層であり、そこが遺構の底面で、かつ湧水点と考えられるが、それ以上の掘削は危険が伴うため行っていない。出土遺物については出土状況図を作成し極力図面に描画したが、微細な遺物については点上げにて対応した。よって、第10図におけるドットの粗密は遺物の出土状況全てを反映しているわけではない。

遺物は近世陶磁器、木製品などが出土した。遺物の出土量と出土層位に顕著な差異は認められず、遺物を投棄しながら埋めたと考えられる。そのため、遺物の接合関係はほとんど無く、また、出土した遺物の大半は破損している。

出土した近世陶磁器は18世紀を主体とし、遺構も同時期に埋没したと考えられる。

#### SK03 (第11図)

Q24グリッドに位置する。不整円形を呈し、遺構の側面と平行して堆積する土層の立ち上がりが井戸枠の痕跡と考えれば、井戸として機能していたと考えられる。断面形状は逆台形状となり、底面は平坦である。SD07を掘り込んで構築されている。

遺構の検出面では、焙烙の底部と考えられる34が出土している。また、遺構底面から浮いた状態で板碑や木製品等が出土している。板碑は2点出土しており、元徳三年(1331年・遺物番号42)・長禄四年(1460年・遺物番号43)の紀年銘をもつ。42は完形で、表面を遺構内側に向け、遺構側面にもたれかかったような状態で出土した。その下からは、桶底や側板、タガの痕跡と考えられる木製品や標高2.69mの深さで桃や梅に類する種が一つ出土している。さらにその下からは、43が表面を下に向け、伏せた状態で出土した。

板碑には年代的な開きがあること、遺構底面から浮いた状態で出土したことから、途中まで埋め戻された井戸にこれらの遺物が廃棄され、ゴミ捨て場として利用されたものと考えられる。

このような板碑の廃棄の例は宮瀧氏によって埼玉県内の事例が紹介されており(宮瀧1992)、埋葬儀礼に伴うものであるとする一部の見解を否定し、板碑の片付け(廃棄)行為によるものとの想定がされている。さらに、その行為が板碑の紀年銘よりもはるかに後世のことと考えられると指摘されている。

#### SK04 (第12図)

Q23グリッドに位置する。隅丸長方形を呈する土坑であり、底面は平坦で、壁面の立ち上がりは緩



やかである。調査区の土坑の中では浅いもので、深さ0.22mを測る。遺物は近世陶磁器、土師器皿、焙烙、瓦、板碑が出土しており、18世紀を主体とする。

#### S K 05 (第12図)

Q 24グリッドに位置する。直径約0.8mの円形を呈する土坑であり、S D 02を掘り込んで構築されている。断面形状は方形で、遺構底面隅は丸みを帯びる。遺構底面より0.24m浮いた3層中より自然木(146)が出土している。

#### S K 06・S K 07 (第12図)

遺構の大部分がQ 24グリッドに位置する。S D 02・S D 05を掘り込んで構築され、S K 06がS K 07を切る。S K 07はほぼ円形を呈すると考えられ、S K 06は楕円形を呈する。断面形状は共にU字状を呈する。

S K 06の上面からは土師器皿が、少なくとも22個体まとまって出土しており、一括廃棄されたものと考えられる。大半が1層中からの出土で、一部2層中からも出土している。図示しえたのはそのうちの14個体(49～62)である。S K 07からは片口鉢(65)が出土している。

#### S K 08 (第12図)

Q 24グリッドに位置する。楕円形を呈する土坑であり、S D 04を掘り込んで構築されている。S D 04の検出を行ったところ、S K 08のプランがかすかに見えていたが、S D 04の埋土の一部と考えて掘削を始めたところ、はっきりとS K 08のプランが確認できた。その段階で半裁したため、遺構上部約10cmは図化できていない。断面形状は方形で、遺構底面隅は丸みを帯びる。土層の堆積は複雑で、一度埋没した土坑を掘り返しているようである。遺物は陶器碗(66)、焙烙(67)、桶樽類底板(147)が出土している。

#### S K 09 (第12図)

Q 24グリッドに位置する。円形を呈する土坑であり、S D 04を掘り込んで構築されている。S K 08と同様、S D 04の検出を行ったところ、S K 09のプランがかすかに見えていたが、S D 04の埋土の一部と考えて掘削を始めたところ、はっきりとS K 09のプランが確認できた。その段階で半裁したため、遺構上部約10cmは図化できていない。断面形状は方形で、遺構底面隅は丸みを帯びる。遺物は土師器皿(68)のみ出土している。

#### S K 10 (第12図)

Q 24グリッドに位置する。S D 04の底面を清掃中に検出した。隅丸長方形を呈する土坑であり、遺構上部の大部分はS D 04に切られていると考えられる。現存する深さは0.11mと浅い。遺物は出土しなかった。

#### S K 11 (第12図)

P 24グリッドに位置する。不整形を呈する土坑であり、遺構北側が調査区外に延びる。調査範囲内では深いところで約1mを測るが、播鉢状に落ち込んでいくため、調査区外ではさらに深くなると考えられる。出土した遺物のうち新相を示すものは16世紀後半から17世紀初頭を示すことから、遺構も同時期に埋没したと考えられる。

#### SE 01 (第12図)

Q 23グリッドに位置する。円形を呈し、遺構の側面と平行して堆積する4層や、3層東側も遺構側面と平行して落ち込む堆積を井戸枠の痕跡と考えれば、井戸としての機能をもっていたと考えられる。3層と5層の境からは鉢(80)が出土した。

#### SD 01 (第9・13・14図)

P 24、Q 24、Q 23グリッドにまたがって位置する。調査区の中央を南北に延びる溝で、両端は調査区外まで延びている。主軸方向はN-6°-Eである。断面形状はレンズ状を呈し、埋土はおおむね3層に別れ、他の溝と比べて一気に埋まったと考えられる。出土遺物は細片がほとんどである。

#### SD 02 (第9・13・14図)

P 24、Q 24グリッドにまたがって位置する。調査区の東寄りを南北に延びる溝で、両端は調査区外まで延びている。主軸方向はN-7°-Wである。断面形状はレンズ状を呈し、埋土はおおむね5層に細分できる。遺物は櫛(88)のみ出土している。

#### SD 03 (第9・13・14図)

Q 24・25グリッドに位置する。本調査区で検出した溝のうち唯一湾曲しており、また、調査区南東隅に構築され、そのほとんどが調査区外に延びていることから全容は不明である。深さは本調査区で0.14mと最も浅く、遺物の出土は無い。

#### SD 04 (第9・13・14図)

P 24、Q 24グリッドに位置する。SD 01の東側を南北に延びる溝で、溝の北側はSK 11に切られ、南端は調査区外まで延びている。断面形状はレンズ状を呈し、各埋土の厚さが比較的厚く、SD 01と同様、他の溝と比べて一気に埋まったと考えられる。遺物の出土量は少ないが、中世遺物を主体とする。

#### SD 05 (第9・13・14図)

P 24及びQ 24・25グリッドに位置する。本調査区で検出した溝のうち最も東に位置し、調査区の中央を南北に延びる溝であるが、大部分はSD 02に切られるため、肩の部分しか遺存していない。溝の北側は調査区外まで延び、南側はSD 02やSD 03に切られている。遺物の出土は無い。

#### SD 06 (第9・13・14図)

P 23・24及びQ 23・24グリッドに位置する。SD 01の西側を南北に延びる溝で、溝の北側はSK 01

(カクラン)に切られ、南端はQ 25 S 5 杭付近で不明瞭となる。遺物の出土量は少ない。

#### SD 07 (第9・13・14図)

P 24及びQ 24グリッドに位置する。溝の西側はSD 04に切られ、東側はSD 02に切られる。切り合い関係から、並行する他の溝 (SD 01・02・04・05・06) の中で最も古い溝である。また、北側はSK 11により切られ、南側は調査区外に延びる。

断面形状は溝両側が切られているため不明である。各埋土の厚さが比較的厚く、SD 01・SD 04と同様、他の溝と比べて一気に埋まったと考えられる。遺物の出土量は少ない。

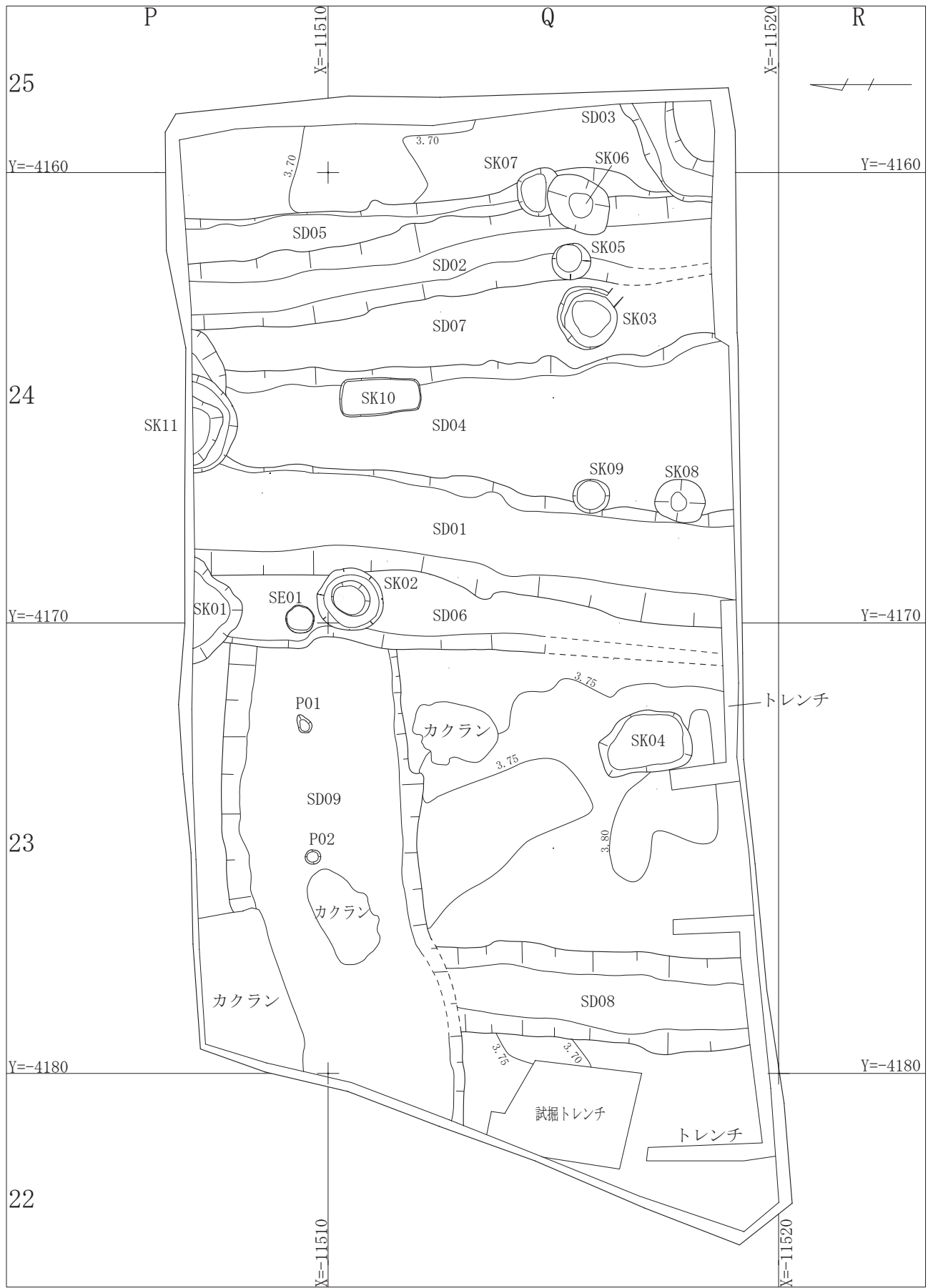
#### SD 08 (第8・13図)

Q 23グリッドに位置する。調査区の西寄りを南北に延びる溝である。溝の北側はSD 09に切られる。南側は調査区壁面でSD 08の立ち上がり<sup>きわ</sup>が確認できなかったことから、調査区の際に別の遺構が存在している可能性がある。しかし、本調査区では検出幅が狭く確認することはできなかった。

検出時の色調は地山と近似し、裁ち割りによって断面観察を行わなければ、遺構として認識できないほど検出が難しい。主軸方向はN - 3° - Eである。断面形状はレンズ状を呈し、埋土は比較的薄く堆積する。遺物は出土しなかったが、切り合いから調査区内でも古い段階の溝と考えられる。

#### SD 09 (第8・9・13図)

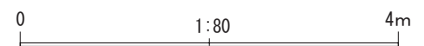
P 23及びQ 22・23グリッドに位置する。本調査区では唯一東西方向に延びる溝である。溝の東側は他の溝 (SD 01・02・04・05・06・07) に切られ、西側は調査区外に延びる。SD 08と同様、検出時の色調は地山と近似し、裁ち割りによって断面観察を行わなければ、遺構として認識できないほど検出が難しい。主軸方向はN - 85° - Eである。断面形状は2段掘り状となり、底面は平坦ではなく、凹凸が顕著で、地山と接する部分に特に多く炭化物を含む。遺物は出土しなかった。

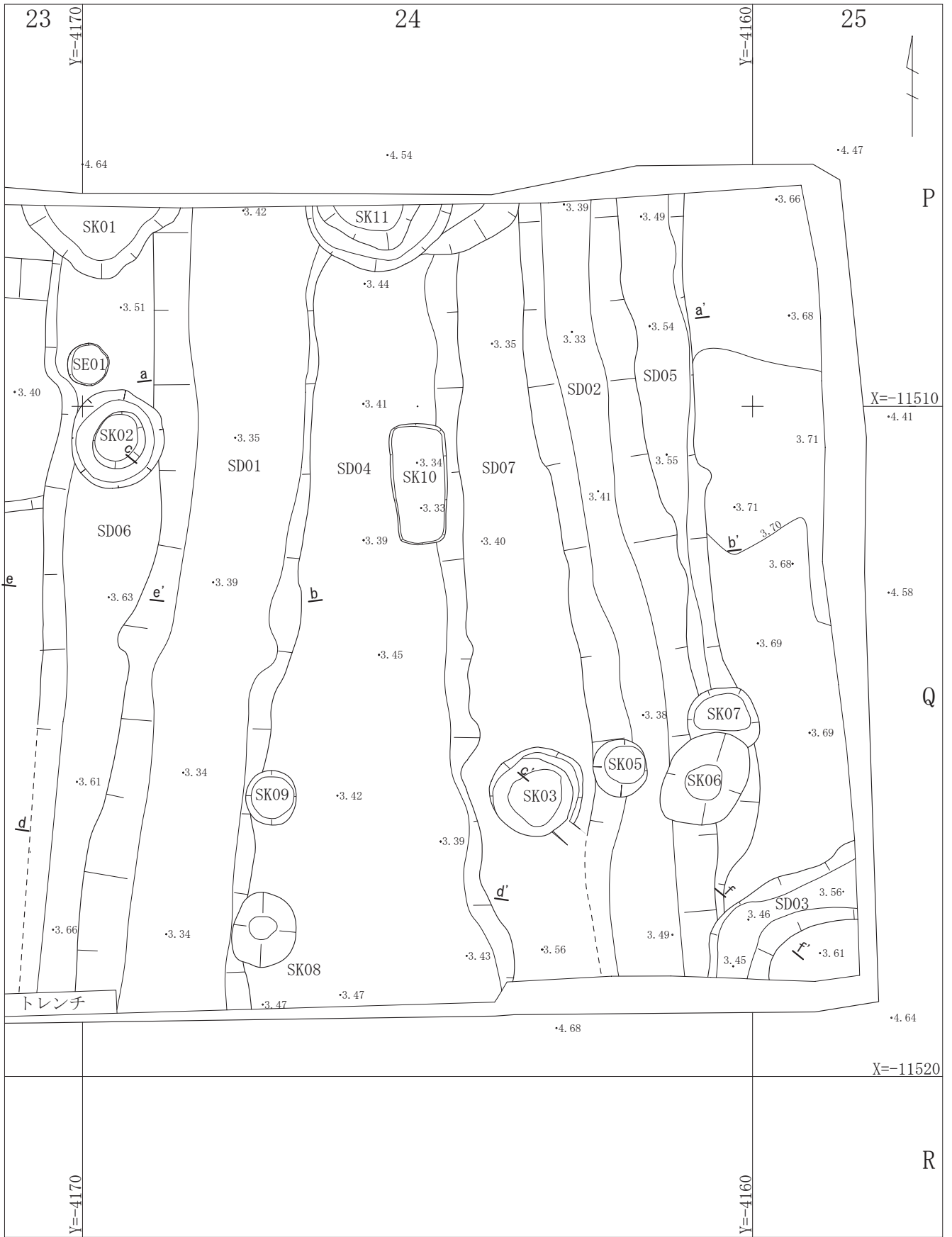


第7図 調査区全体図



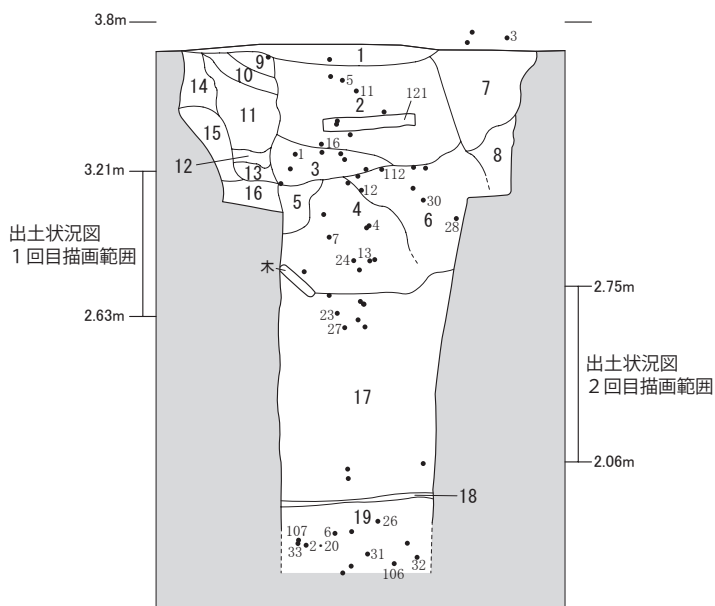
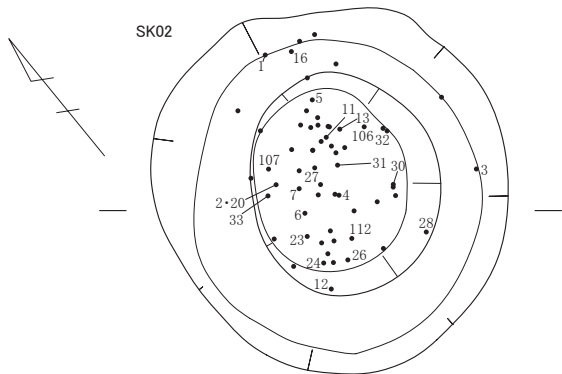
第8図 調査区分割図1



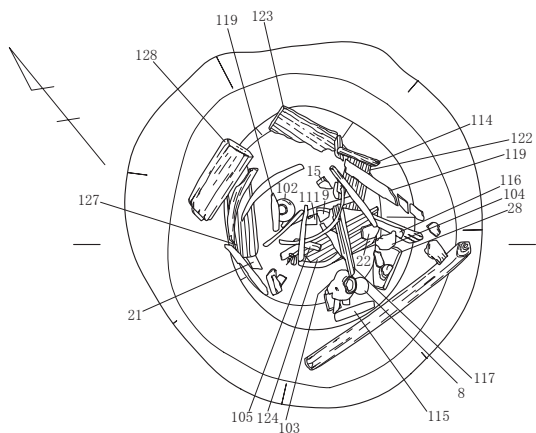


第9図 調査区分割図2

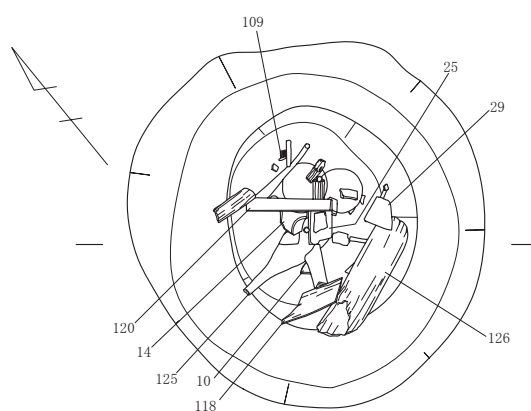
0 1:80 4m



- 1 2.5 Y 5/1 黄灰色シルト  
オリブ褐色シルトを30%含む 炭化物微量含む  
しまりやや弱い 粘性弱い
- 2 2.5 Y 4/1 黄灰色シルト  
暗灰黄色シルトを20%含む 炭化物微量含む  
しまりやや弱い 粘性弱い
- 3 2.5 Y 3/1 黒褐色シルト  
植物遺体を多く含む 炭化物微量含む しまり弱い  
粘性弱い
- 4 N 4/1 灰色シルト  
植物遺体が3・6層に比べ少ない しまり弱い  
粘性やや強い
- 5 2.5 Y 3/1 黒褐色シルト  
3層に比べやや緑がかかる 植物遺体やや少ない  
しまり弱い 粘性やや強い
- 6 2.5 Y 3/1 黒褐色シルト  
3層に比べやや緑がかかる 植物遺体多く含む  
しまり弱い 粘性弱い
- 7 2.5 Y 5/1 黄灰色シルト 灰白色粘土40%含む  
しまり強い 粘性強い
- 8 2.5 Y 7/1 灰白色シルト 黄灰色シルト・明黄褐色  
シルトを含む しまり強い 粘性強い
- 9 2.5 Y 7/1 灰白色シルト 黄灰色シルトを30%含む  
炭化物微量含む しまり強い 粘性強い
- 10 2.5 Y 7/1 灰白色シルト  
黄灰色シルトをわずかに含む 炭化物微量含む  
しまり強い 粘性強い
- 11 2.5 Y 4/1 黄灰色シルト  
明黄褐色土と灰白色シルトをまだらに40%含む  
しまり強い 粘性強い
- 12 2.5 Y 5/1 黄灰色シルト  
灰白色シルト微量含む しまり強い 粘性強い
- 13 2.5 Y 7/1 灰白色シルト  
黄灰色シルトを微量含む しまり強い 粘性強い
- 14 2.5 Y 4/1 黄灰色シルト  
11層に近いが混入する明黄褐色の割合が少ない  
しまり強い 粘性強い
- 15 2.5 Y 4/1 黄灰色シルト  
明黄褐色シルト微量含む 炭化物やや多く含む  
しまり強い 粘性強い
- 16 2.5 Y 3/1 黒褐色シルト 単一層  
しまりやや弱い 粘性強い
- 17 10 Y 3/1 オリブ黒色シルト しまり弱い 粘性  
強い 植物遺体多く含む
- 18 7.5 Y 5/2 灰オリブ色粘土 しまり弱い 粘性強  
い 黄色い印象を受ける土
- 19 10 Y 3/1 オリブ黒色シルト しまり弱い 粘性  
強い 17層より植物遺体少ない

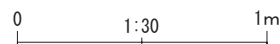


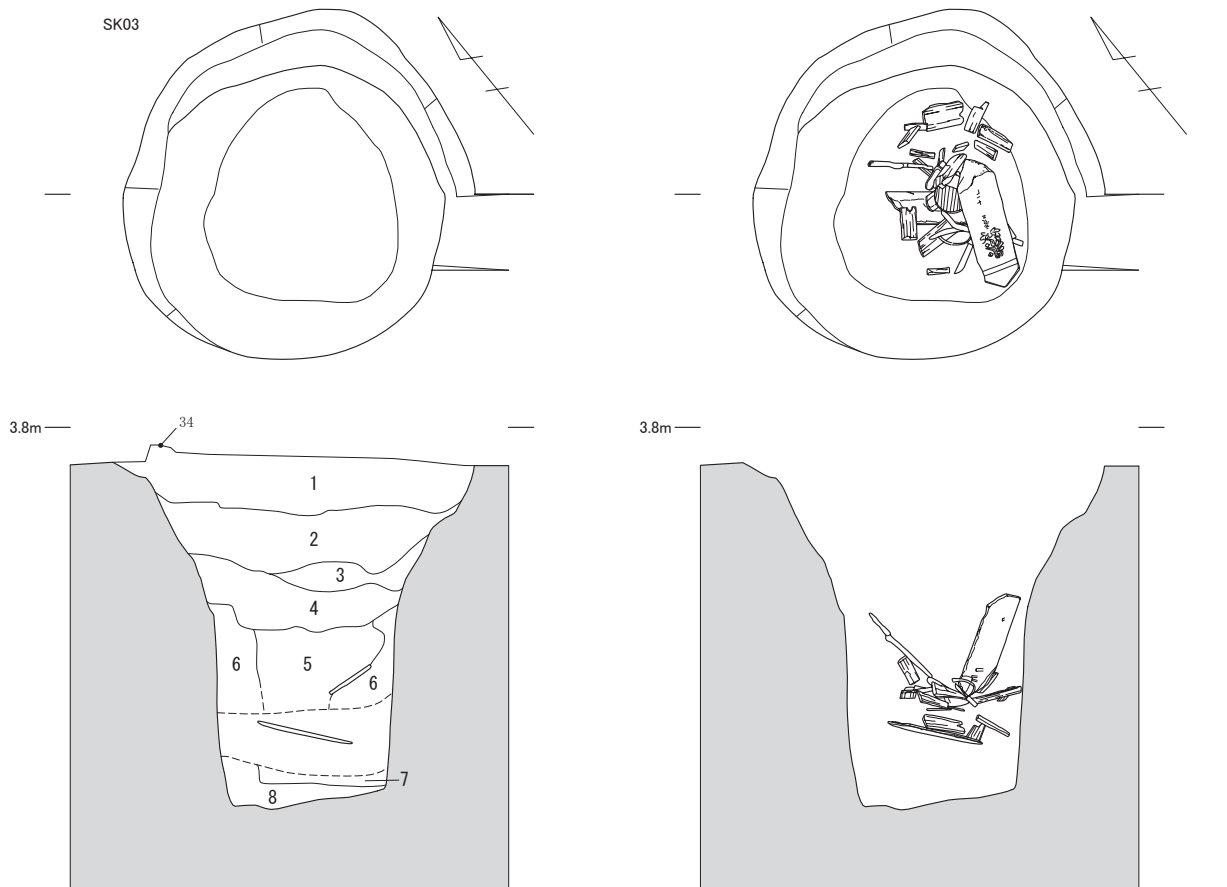
出土状況図 1 回目描画範囲



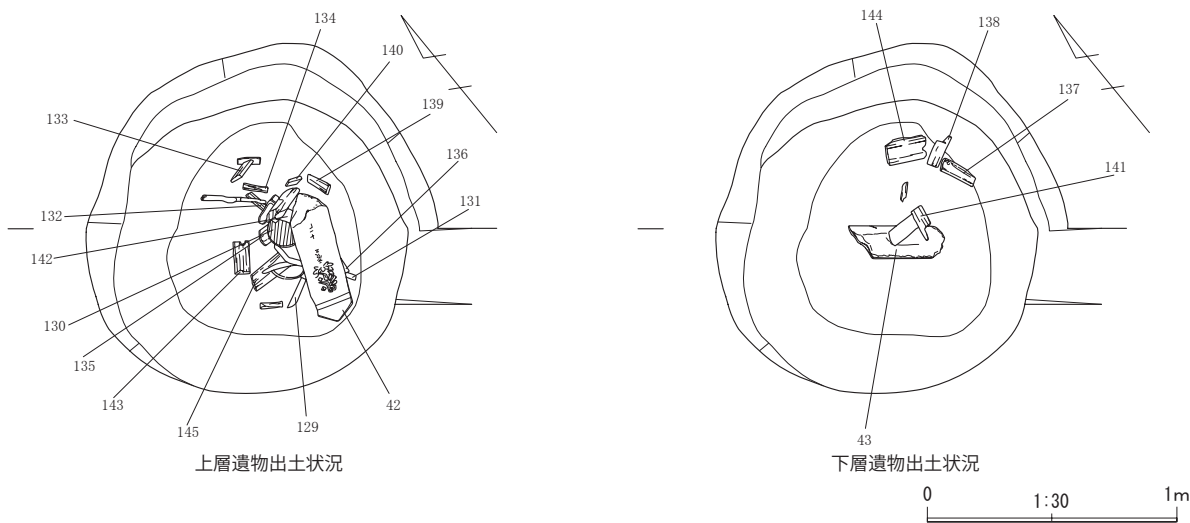
出土状況図 2 回目描画範囲

第10図 遺構図 (SK02)



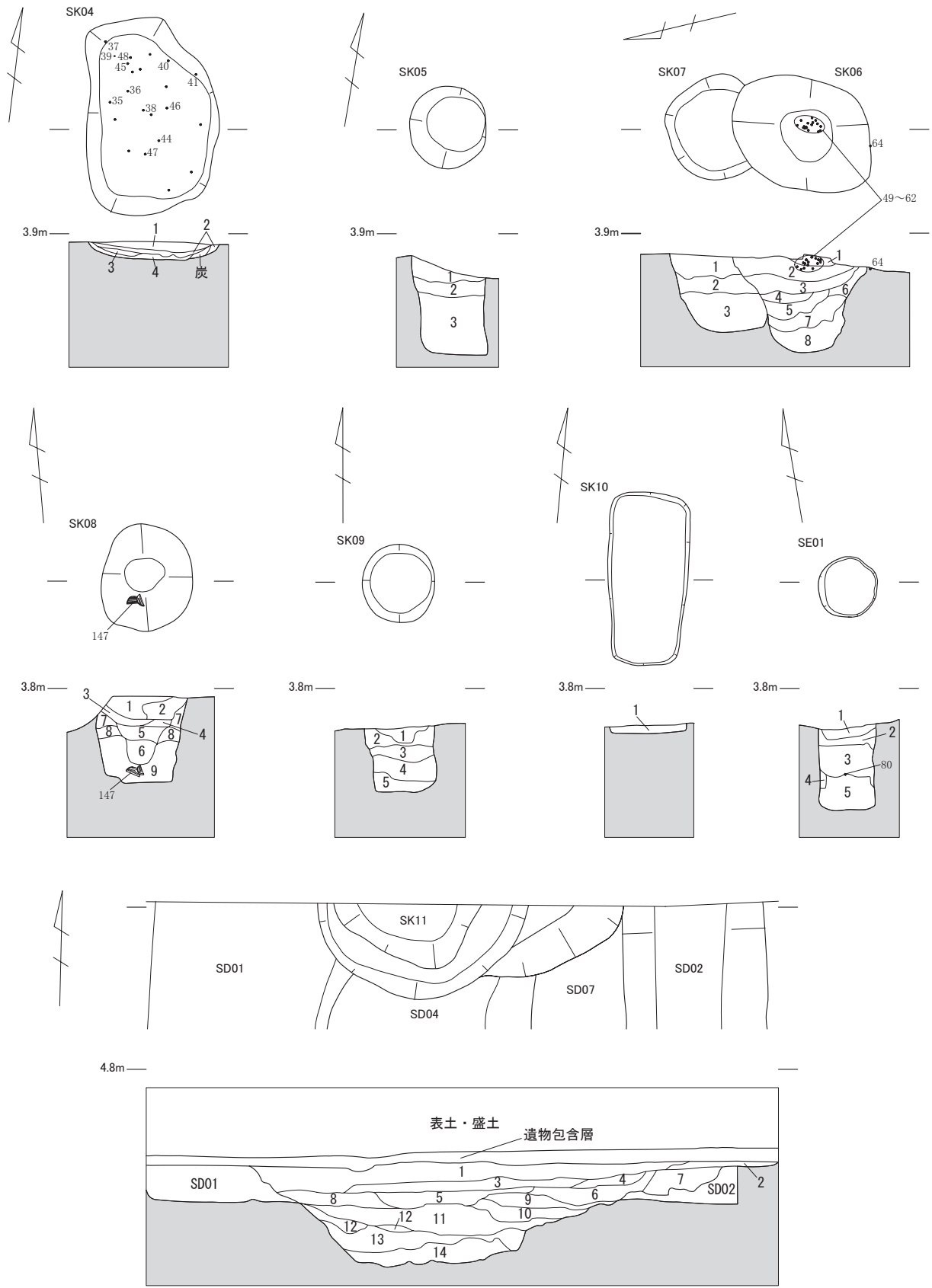


- 1 2.5 Y 6/3 にぶい黄色シルト オリーブ褐色シルトが全体的に混じる しまり強い 粘性ややあり
- 2 2.5 Y 5/2 暗灰黄色シルト 鉄分を含み全体的に明黄褐色土が混じる しまり強い 粘性ややあり
- 3 2.5 Y 5/1 黄灰色シルト しまり強い 粘性あり
- 4 2.5 Y 4/1 黄灰色シルト 単一層で植物遺体を含む 灰白色粘土わずかに含む しまり強い 粘性強い
- 5 2.5 Y 4/1 黄灰色シルト 4層より明るい 植物遺体を多く含む しまり強い 粘性強い
- 6 2.5 Y 4/1 黄灰色シルト しまり強い 粘性あり
- 7 2.5 G Y 2/1 黒色シルト 植物遺体多く含む しまり強い 粘性非常に強い
- 8 7.5 Y 4/2 灰オリーブ色シルト 植物遺体を多く含む しまり強い 粘性非常に強い



第11図 遺構図 (S K 03)





第12図 遺構図 (SK・SE)

## S K 04

- 1 2.5 Y 4/2 暗灰黄色シルト 黄灰色シルトを10%含む しまり強い 粘性弱い
- 2 2.5 Y 2/1 黒色シルト 炭化物やや多く含む しまり強い 粘性弱い
- 3 2.5 Y 4/2 暗灰黄色シルト 砂がち 炭化物微量含む
- 4 2.5 Y 4/1 黄灰色シルト 黄灰色シルト30%含む 炭化物微量含む しまりやや弱い 粘性やや強い

## S K 05

- 1 2.5 Y 5/2 暗灰黄色シルト 2層との境に鉄分がわずかに集積 炭化物微量含む しまりやや弱い 粘性強い
- 2 2.5 G Y 5/1 オリーブ灰色シルト 炭化物微量含む しまり弱い 粘性強い
- 3 N 4/1 灰色シルト ぼそぼそしている 炭化物や植物遺体微量含む しまり弱い 粘性強い

## S K 06

- 1 2.5 Y 5/2 暗灰黄色シルト 炭化物微量含む 土師器皿まとまって出土 しまり強い 粘性弱い
- 2 2.5 Y 5/2 暗灰黄色シルト 炭化物微量含む 3層との境に鉄分集積 しまり強い 粘性弱い
- 3 2.5 Y 4/1 黄灰色シルト 炭化物微量含む わずかに明黄褐色シルト含む しまり弱い 粘性強い
- 4 2.5 Y 4/1 黄灰色シルト 明黄褐色シルトを多く含む しまり弱い 粘性強い
- 5 2.5 Y 2/1 黒色シルト 植物遺体(腐食土)を多く含む しまり弱い 粘性強い
- 6 2.5 Y 4/1 黄灰色シルト 明黄褐色シルトをわずかに含む 炭化物微量含む しまり弱い 粘性強い
- 7 7.5 Y 4/1 灰色シルト 明黄褐色シルトを40%含む しまり弱い 粘性強い
- 8 N 3/1 暗灰色シルト 鉄分含み8層全体に集積 しまり弱い 粘性強い

## S K 07

- 1 2.5 Y 4/1 黄灰色シルト 全体的に暗褐色シルトを含み茶色い印象 しまりやや強い 粘性やや弱い
- 2 2.5 Y 3/2 黒褐色シルト 黄灰色シルト微量含む 炭化物微量含む 鉄分により全体的に黄褐色を呈する
- 3 N2/1 黒色シルト 鉄分によりわずかに黄褐色を呈する 炭化物やや多く含む しまり弱い 粘性強い

## S K 08

- 1 2.5 Y 5/2 暗灰黄色シルト 炭化物微量含む しまり強い 粘性弱い
- 2 2.5 Y 4/2 暗灰黄色シルト 炭化物微量含む しまり強い 粘性弱い 1層に近似するが壁立て時に掘削道具がすべる
- 3 2.5 Y 4/1 黄灰色シルト 炭化物微量含む しまりやや弱い 粘性強い
- 4 2.5 Y 5/2 暗灰黄色シルト しまりやや弱い 粘性強い
- 5 2.5 Y 5/4 黄褐色シルト 緑灰色シルトを30%含む しまりやや弱い 粘性強い
- 6 5 G 5/1 緑灰色シルト しまりやや弱い 粘性強い
- 7 2.5 Y 4/3 オリーブ褐色シルト 灰白色シルトを30%含む しまり強い 粘性弱い
- 8 2.5 Y 5/1 黄灰色シルト 鉄分含みまだらに黄褐色に変色 しまり強い 粘性やや弱い
- 9 5 G 5/1 緑灰色シルト 鉄分含みまだらに黄褐色に変色 しまりやや弱い 粘性強い

## S K 09

- 1 2.5 Y 3/1 黒褐色シルト 炭化物多く含む 灰オリーブ色シルトを10%含む しまり弱い 粘性強い
- 2 5 Y 5/2 灰オリーブ色シルト 暗灰黄色シルトを10%含む しまりやや強い 粘性強い
- 3 5 Y 4/1 灰色シルト 炭化物微量含む 下層との境に植物遺体が集積 しまりやや強い 粘性強い
- 4 5 Y 4/1 灰色シルト オリーブ色シルトを微量含む しまりやや強い 粘性強い
- 5 5 Y 4/1 灰色シルト オリーブ色シルトを20%含む しまりやや強い 粘性強い

## S K 10

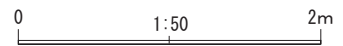
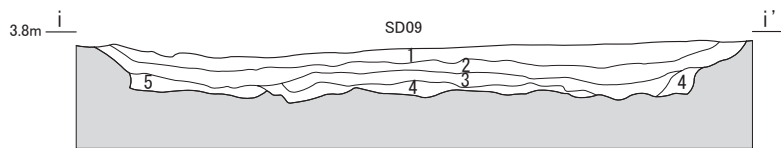
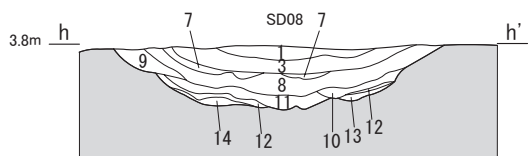
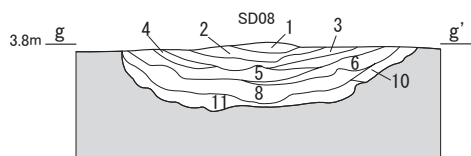
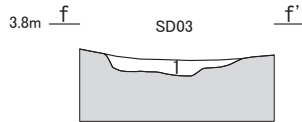
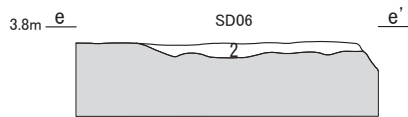
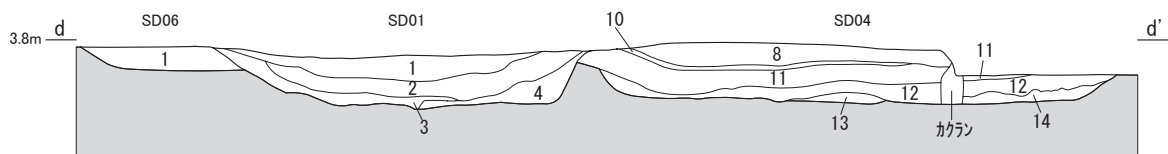
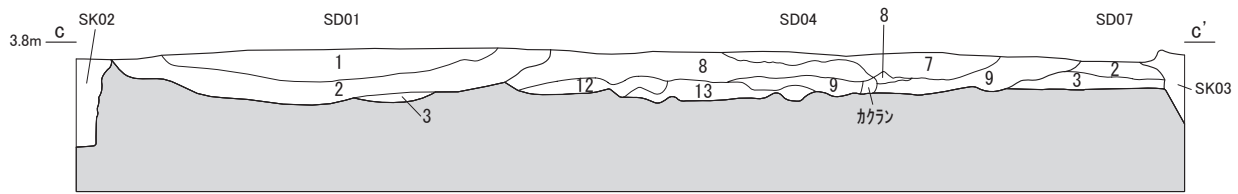
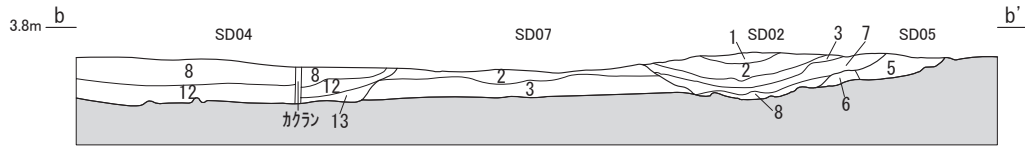
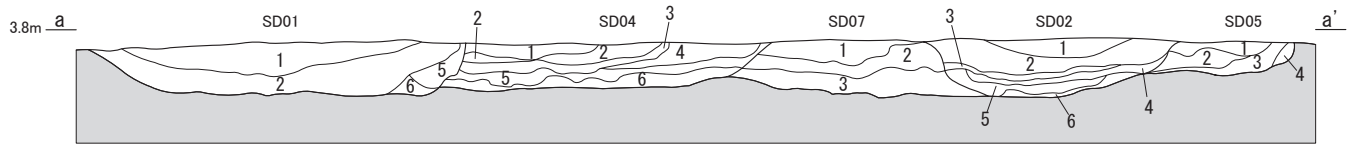
- 1 2.5 Y 5/2 暗灰黄色シルト 鉄分含み黄褐色に変色する箇所まだらにあり しまり強い 粘性強い

## S E 01

- 1 2.5 Y 6/2 灰黄色シルト 明黄褐色粒をやや多く含む しまりやや弱い 粘性弱い
- 2 2.5 Y 6/3 にぶい黄色シルト 明黄褐色粒を多く含む しまりあり 粘性あり
- 3 2.5 Y 5/2 暗灰黄色シルト 明黄褐色土を多く含む しまりあり 粘性あり
- 4 2.5 Y 6/3 にぶい黄色シルト 明黄褐色土を多く含む しまり弱い 粘性弱い
- 5 2.5 Y 4/2 暗灰黄色シルト 明黄褐色土を少量含む しまり強い 粘性強い

## S K 11

- 1 2.5 Y 4/1 黄灰色シルト 黄褐色シルトを微量含む 炭化物微量含む しまり強い 粘性弱い
- 2 2.5 Y 4/2 暗灰黄色シルト 鉄分含む しまり強い 粘性弱い
- 3 2.5 Y 5/1 黄灰色シルト 鉄分含む 炭化物微量含む しまり強い 粘性弱い
- 4 2.5 Y 4/3 オリーブ褐色シルト 暗オリーブ褐色シルト微量含む しまり強い 粘性弱い
- 5 2.5 Y 4/1 黄灰色シルト 黄褐色シルトを40%含む しまり強い 粘性弱い
- 6 2.5 Y 4/1 黄灰色シルト 黄褐色シルトを10%含む しまり強い 粘性弱い
- 7 2.5 Y 6/4 にぶい黄色シルト 黄褐色シルトを20%含む しまり強い 粘性弱い
- 8 2.5 Y 4/1 黄灰色シルト 炭化物微量含む 黄褐色シルトを20%含む しまり強い 粘性弱い
- 9 2.5 Y 3/1 黒褐色シルト 灰白色シルト微量含む 炭化物微量含む 黄褐色シルト微量含む しまり強い 粘性弱い
- 10 2.5 Y 4/1 黄灰色シルト 鉄分含み層全体的に黄褐色に変色 灰白色シルト10%含む しまり強い 粘性弱い
- 11 2.5 Y 4/1 黄灰色シルト 炭化物微量含む 植物遺体微量含む しまり強い 粘性やや強い
- 12 2.5 Y 4/1 黄灰色シルト 11層よりも明るい 炭化物微量含む しまり強い 粘性やや強い
- 13 7.5 Y 4/1 灰色シルト 炭化物微量含む 植物遺体微量含む しまり強い 粘性強い
- 14 2.5 G Y 4/1 暗オリーブ灰色シルト 明オリーブ灰色粘土をブロック状に含む 炭化物含む しまり強い 粘性強い



第13図 遺構図 (SD)

## SD 01

- 1 2.5 Y 5/3 黄褐色シルト 黄灰色シルトを20%含む しまりやや強い 粘性あまりなし
- 2 2.5 Y 5/1 黄灰色シルト 炭化物微量含む 遺物遺体をやや多く含む 黄褐色シルトを微量含む しまりやや弱い 粘性あり
- 3 2.5 Y 3/2 黒褐色シルト 植物遺体をやや多く含む 黄褐色シルト微量含む しまりやや弱い 粘性あり
- 4 2.5 Y 4/4 オリーブ褐色シルト 炭化物を微量含む しまりやや弱い 粘性やや弱い
- 5 2.5 Y 4/3 オリーブ褐色シルト 灰白色シルト微量含む しまりやや弱い 粘性弱い
- 6 2.5 Y 4/1 黄灰色シルト 黄褐色シルトを微量含む 炭化物微量含む 2層に近似 しまりやや弱い 粘性弱い

## SD 02

- 1 2.5 Y 6/4 にぶい黄色シルト 黒褐色シルトを40%含む しまり強い 粘性弱い
- 2 2.5 Y 5/1 黄灰色シルト 黄褐色シルトを30%含む しまり強い 粘性弱い
- 3 2.5 Y 4/1 黄灰色シルト 灰白色粘土と混じりながら堆積する 炭化物やや多く含む しまり強い 粘性強い
- 4 2.5 Y 4/1 黄灰色シルト 単一層 しまり強い 粘性やや弱い
- 5 2.5 Y 5/2 暗灰黄色シルト 単一層 しまり強い 粘性やや弱い
- 6 2.5 Y 4/1 黄灰色シルト 灰白色シルト微量含む しまり強い 粘性やや弱い
- 7 2.5 Y 5/1 黄灰色シルト 黄褐色シルトを30%含む しまりやや弱い 粘性やや強い
- 8 2.5 Y 4/1 黄灰色シルト 単一層 炭化物微量含む しまりやや弱い 粘性やや強い

## SD 03

- 1 2.5 Y 4/1 黄灰色シルト 明黄褐色シルト10%含む しまりやや弱い 粘性弱い

## SD 04

- 1 2.5 Y 4/2 暗灰黄色シルト 炭化物微量含む しまり強い 粘性弱い
- 2 2.5 Y 5/2 暗灰黄色シルト 黄褐色シルトを30%含む しまり強い 粘性弱い
- 3 2.5 Y 5/1 黄灰色シルト 層の中間に途切れながら灰白色シルトが堆積 しまり強い 粘性弱い
- 4 2.5 Y 5/2 暗灰黄色シルト 黄褐色シルトを30%含む 2層に近似 灰白色シルトブロックを一部含む しまり強い 粘性弱い
- 5 2.5 Y 5/1 黄灰色シルト 黒褐色シルトをまだらに含む 灰白色シルトをまだらに含む しまり強い 粘性弱い
- 6 2.5 Y 5/2 暗灰黄色シルト 黒褐色シルトを微量含む しまり強い 粘性弱い
- 7 2.5 Y 5/1 黄灰色シルト 炭化物粒1mm~5mmを多く含む しまり強い 粘性弱い ほぼ単一層
- 8 2.5 Y 6/4 にぶい黄色シルト 暗灰黄色シルトを30%含む しまり強い 粘性弱い
- 9 2.5 Y 5/1 黄灰色シルト 7層との境に鉄分が集積 灰白色シルトを20%含む しまり強い 粘性弱い
- 10 2.5 Y 6/2 灰黄色シルト しまりやや弱い 粘性強い
- 11 2.5 Y 6/4 にぶい黄色シルト 8層に近似 炭化物微量含む しまりやや弱い 粘性強い
- 12 2.5 Y 5/1 黄灰色シルト 黒褐色シルトを10%、灰白色シルトを10%含む しまり強い 粘性弱い
- 13 2.5 Y 4/1 黄灰色シルト 黒褐色シルトを20%含む・灰黄色シルトを10%含む しまり強い 粘性弱い
- 14 2.5 Y 5/1 黄灰色シルト 12層よりも黒褐色シルトの割合少なく、微量含む程度 しまりやや弱い 粘性強い

## SD 05

- 1 2.5 Y 5/4 黄褐色シルト 黒褐色シルト・灰黄色シルトを含む しまり強い 粘性弱い
- 2 2.5 Y 4/1 黄灰色シルト 黒褐色シルト 黄褐色シルトをまだらに含む しまり強い 粘性弱い
- 3 2.5 Y 3/1 黒褐色シルト 炭化物微量含む 灰黄色シルトを30%含む しまり強い 粘性やや強い
- 4 2.5 Y 4/1 黄灰色シルト やや砂がち しまり強い 粘性弱い
- 5 2.5 Y 4/1 黄灰色シルトと2.5 Y 7/2 灰黄色シルトの互層堆積 互層堆積を乱すように明黄褐色シルトが混じる部分もあり しまり強い 粘性やや強い
- 6 2.5 Y 6/8 明黄褐色シルト 地山がブロックとして堆積した箇所と思われる しまり強い 粘性やや強い

## SD 06

- 1 2.5 Y 4/1 黄灰色シルト 炭化物微量含む 黄褐色シルト10%含む しまり強い 粘性やや弱い
- 2 2.5 Y 4/1 黄灰色シルト 明黄褐色シルト・暗灰黄色シルトをまだらに40%含む しまり強い 粘性弱い

## SD 07

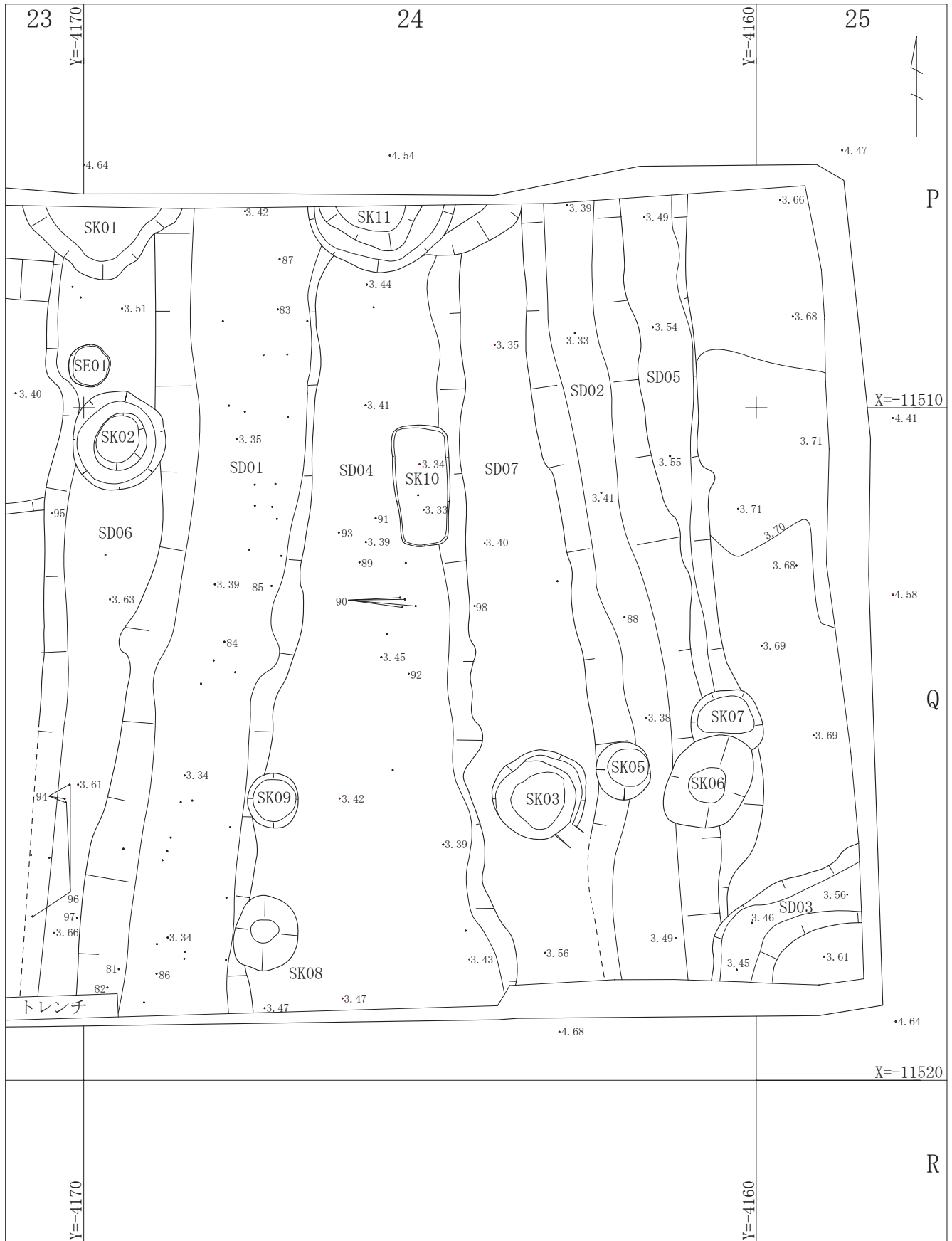
- 1 2.5 Y 4/1 黄灰色シルト 炭化物微量含む しまり強い 粘性強い
- 2 2.5 Y 3/1 黒褐色シルト 灰白色シルトや黄褐色シルトをまだらに含み汚い印象 しまり強い 粘性弱い
- 3 2.5 Y 5/2 暗灰黄色シルト 炭化物微量含む 褐色シルトを20%含む しまり強い 粘性強い

## SD 08

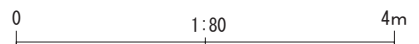
- 1 2.5 Y 6/2 灰黄色シルト 明黄褐色シルト微量含む h-h'では3層との境に黒色シルトが途切れながら堆積する しまり強い 粘性弱い
- 2 2.5 Y 6/1 黄灰色シルト 明黄褐色シルト微量含む 炭化物微量含む しまり強い 粘性弱い
- 3 2.5 Y 6/2 灰黄色シルト 明黄褐色シルト微量含む 炭化物微量含む 下層との境に0.5mm幅で黒色シルトが堆積 しまり強い 粘性弱い
- 4 2.5 Y 6/2 灰黄色シルト 3層と近似するが、やや明黄褐色シルトの割合が多い。※3層と4層は薄く堆積する黒色シルトで分けている
- 5 2.5 Y 6/1 黄灰色シルト 2層よりもやや明るい。鉄分のため所々が黄褐色に変色 しまり強い 粘性やや強い  
8層との境に0.5mm幅で黒色シルトが堆積
- 6 2.5 Y 5/2 暗灰黄色シルト 明黄褐色シルト微量含む 炭化物微量含む しまり強い 粘性やや強い
- 7 3層に近似 ただししまりがわずかに弱くぼそぼそする
- 8 2.5 Y 6/1 黄灰色シルト 5層に近似 5層よりも鉄分による変色の割合が広い しまり強い 粘性やや強い
- 9 2.5 Y 4/1 黄灰色シルト オリーブ褐色シルトを30%含む しまり強い 粘性弱い
- 10 2.5 Y 5/2 暗灰黄色シルト 6層に近似 6層より浅黄色シルトが混じる しまり強い 粘性やや強い
- 11 2.5 Y 4/1 黄灰色シルト 灰白色シルトを含む 地山との境に炭化物を含む 明黄褐色シルトを含む しまり強い 粘性強い
- 12 2.5 Y 6/2 灰黄色シルト 単一層 しまりやや弱い 粘性強い
- 13 10層に近似 炭化物微量含む
- 14 2.5 Y 5/1 黄灰色シルト 上層との境に炭化物多く含む 灰白色シルト微量含む しまりやや弱い 粘性強い

## SD 09

- 1 2.5 Y 6/2 灰黄色シルト 明黄褐色粒をやや多く含む 2層との境に黒色シルトが1mmほど堆積し、分層容易 しまりやや弱い 粘性弱い
- 2 2.5 Y 5/2 暗灰黄色シルト 明黄褐色粒を多く含む しまりやや弱い 粘性やや弱い
- 3 2.5 Y 5/1 黄灰色シルト 明黄褐色粒を少量含む しまり強い 粘性有
- 4 2.5 Y 4/1 黄灰色シルト 明黄褐色粒を含む 地山と接する部分に特に多く炭化物を含む しまり強い 粘性有
- 5 2.5 Y 4/1 黄灰色シルト 明黄褐色粒を多量含む 地山と接する部分に特に多く炭化物を含む しまり強い 粘性有



第14図 SD内遺物出土位置



第2表 遺構一覧表

番号	グリッド	長軸 (m)	短軸 (m)	深さ (m)	平面形	遺物	備考
SK01	P23・24	2.37	1.08	0.39	不整形	—	カクラン
SK02	P 23・24 Q 23・24	1.46	1.40	1.83	円形	近世陶磁器、土師器皿、 瓦質土器、土人形、埴、 砥石、漆器碗、木製品	SD01・06を切る
SK03	Q 24	1.45	1.29	1.44	不整形円形	板碑、焙烙片、木製品	SD07を切る
SK04	Q 23	2.04	1.39	0.22	隅丸長方形	近世陶磁器、土師器皿、 瓦、板碑	
SK05	Q 24	0.86	0.81	0.85	円形	なし	SD02を切る
SK06	Q 24	1.45	1.15	1.04	楕円形	土師器皿	SD02・05を切る
SK07	Q 24・25	1.03	0.67	0.83	円形?	瓦質土器	SD02・05を切る
SK08	Q 24	1.12	0.95	0.99	楕円形	焙烙、桶樽類底板	SD04を切る
SK09	Q 24	0.81	0.75	0.72	円形	土師器皿	SD04を切る
SK10	Q 24	1.80	0.84	0.11	隅丸長方形	なし	SD04との前後関係不明
SK11	P 24	3.19	0.99	1.05	不整形	土器、陶磁器、砥石、 木製品	SD01・02・04・07を 切る
SE01	Q 23	0.63	0.62	0.93	円形	土器片	SD06を切る
SD01	P 24 Q 23・24	12.1	2.13	0.46	直線	土師器皿、青磁、焙烙、 砥石、漆器碗	SK02・08・09・11に 切られる
SD02	P 24、Q 24	11.6	1.49	0.35	直線	櫛	SD05・06・07、SD03 に切られる
SD03	Q 24・25	2.65	0.83	0.14	曲線	なし	SD02・05を切る
SD04	P 24、Q 24	11.0	2.33	0.41	直線	瓦質土器、板碑片、土師 器皿、砥石、焙烙	SK08・09・11、SD01 に切られる
SD05	P 24 Q 24・25	10.8	0.78	0.18	直線	なし	SK06・07、SD02・03 に切られる
SD06	P 23・24 Q 23・24	10.8	1.20	0.26	直線	土師器皿、陶器、焙烙、 銭	SE01、SD01に切ら れる
SD07	P 24、Q 24	11.1	1.52	0.39	直線	土師器皿、土器	SD02・04、SK03・11 に切られる
SD08	Q 23	6.50	1.97	0.50	直線	なし	SD09に切られる
SD09	P 23 Q 22・23	9.94	4.35	0.54	直線	なし	SD06、P 01・02に切 られる
P 01	P 23	0.45	0.29	0.20	不整形円形	なし	SD09を切る
P 02	P 23	0.35	0.31	0.17	円形	なし	SD09を切る

## 4. 遺物

### (1) 土器・陶磁器等

#### S K 02 (第15～16図)

1～6は肥前系磁器である。1～5は碗、6は仏飯器である。1は筒形碗の矢羽文、2は窓枠内に植图文様、3は口縁部にコンニャク印判で植物の葉を施し、5は草花文が描かれる。7は唐津の青緑釉碗、8は土師器皿で底面は回転糸切りである。9は産地不明の皿。10は瀬戸美濃焼の皿で内面には重ね焼きの痕跡が見られ、口縁部には灯心油痕が認められる。高台はその両脇を深くケズリ込むことで作り出している。11は朝鮮唐津の瓶で、12は瀬戸美濃焼の鉄釉瓶の口縁部で受口状となる。13は扁平な形状のため、焙烙の底部と考えられる。胎土には金雲母を多く含む。14は甕底部で信楽焼か。底には焼成時の付着物があり、それによって底面にゆがみを生じている。胎土には長石を含む。15は瓦質の火鉢口縁部である。16は本来、土師器皿の底部と考えられるが、何らかの転用をしている。直径4.5mmの穿孔を施し、さらに穿孔を中心に直径3.5cmの工具で0.5mm程度に浅く削り込む。17～19も転用品で、播鉢を打ち欠き円形状に仕上げており、メンコとして転用したものと考えられる。20は型合わせで整形された土人形で、僧形の立像か。合わせた部分で剥離しており、背面部分のみ遺存している。内面には棒状工具で空洞をつくっている。色調は浅黄色を呈する。21～29は磚である。胎土から江戸在地系であると考えられる。完存するものは1点もなく、全体の大きさが不明であるが、28では一辺の長さが分かり、23.4cmを測る。砥石として利用されたと考えられる二次的な研磨(21・23・29)を除くと磚としての使用痕は認められず、どの面においても非常にきれいな状態である。30～32も本来は磚であるが、砥石として転用している。30は側面を利用し、利用面は緩やかにカーブする。31は表裏面共に利用している。出土した他の磚をみると本来の厚みは約2.0cmであるが、転用されたことで最も薄いところは4mmまで摩滅している。32は欠損部以外全面を利用している。33は砂岩製の砥石である。

#### S K 03 (第16～18図)

34は扁平な形状のため、焙烙の底部と考えられる。13と異なり金雲母を含まない。遺構の検出面から出土。42は完形の板碑である。種子はキリークで「元徳三年十一月日」と刻まれる。43は下半部が欠損した板碑である。種子はキリークで「長祿二二年(二が左右に並ぶ) 道明禪門 十二月六日」と刻まれ、その周囲には枠線が引かれている。なお、元徳三年は1331年、長祿四年は1461年である。

#### S K 04 (第16・18図)

35～38は肥前系磁器である。35は小碗で高台内は兜巾が残る。36は人物、37は草花文が描かれる。高台内は「太明成化年製」。38は色絵碗である。色絵部分はほとんどが剥落しており、光の加減で痕跡が確認できる程度であるため、本来の色は不明である。39は唐津焼の二彩唐津の鉢である。40は全面施釉の白磁碗で内外面に貫入が認められる。41は肥前系磁器の底部であり、高台内は露胎で兜巾が残る。44は産地不明の瓶で灰白色を呈し、肩部は降灰のため淡い緑色を呈する。48は板碑片である。サと考えられる種子が刻まれている。45～47は瓦である。45・46は平瓦で燻しのため黒色を呈し、凸面は縦位のナデ調整、凹面には粗めの布目圧痕が残る。47は丸瓦である。有段式で凸面はナデ、凹面には粗

い布目圧痕が残る。また主に凹面と側面に二次的な摩滅が認められる。色調は灰色である。

#### S K 06 (第19図)

49～62は土師器皿である。一括して出土したこともあり、胎土に違いは認められないが形状にバリエーションが認められる。例えば、底部から体部への立ち上がり部に段を有するもの(49～51、53～57)と有しないもの(58～62)、底部に糸切痕を残すもの(49・55・62)などがある。

また、器高：底径：口径の比率をみたときに、1：2：3となるものは49、54～56、1：2：4となるものは51、53、57、60、61、62、1：3：4もしくは5となるものは50、59である。

63・64は焙烙の口縁部と考えられる。外面の色調は63が灰白色、64は黒褐色を呈し、共に器壁の中心部は黒色を呈する。

#### S K 07 (第19図)

65は片口の鉢口縁部で須恵質を呈する。片口付近は内外面共にユビナデの跡が残る。

#### S K 08 (第19図)

66は陶器碗で内外面共に鉄釉が施される。67は内耳付の焙烙で、底部から直線的に立ち上がるが、体部中央から口縁部にかけて内湾する。16世紀後半から17世紀初めに比定される。

#### S K 09 (第19図)

68は土師器皿の口縁部である。

#### S K 11 (第19図)

69は焼成の極めて悪い白磁で、腰折れの稜花劃花文皿である。口縁は輪花をもち外反する。内面と見込みに模様が彫られているが、灰白色を呈する釉が厚く掛かっているため不明瞭である。豊付まで施釉されるが高台内は露胎で、露胎部の色調は赤みを帯びる。胎土は灰色を呈する。帰属時期は15～16世紀と考えられ、同時期の青磁に似た形状のものが存在することから、青磁との関連性が指摘できる。70は瀬戸美濃焼の天目茶碗である。口縁部がわずかにくぼむが、実際には鉄釉が厚く掛かっており端部に面を持つように見える。形状は体部から口縁部に向かって逆ハの字状に大きく開く。帰属時期は14世紀末から15世紀初めか。71は土器で蓋と考えられる。72は土鍋の底部。外面立ち上がり部はケズリにより面取りされている。73は土鍋の口縁部で、内外面黒色処理されている。85との同質個体であり、15世紀後半に比定される。74はすり鉢で内外面共に赤褐色を呈し、器壁の中心部は灰色を呈する。口縁部外面が欠損しているが、その部分も赤褐色を呈するため、焼成時に既に欠損していたと考えられる。外面には楕円形状に被熱痕が認められる。75は焙烙で底面が剥落している。76～79は凝灰岩製の砥石である。

#### S E 01 (第20図)

80は鉢で内外面共に黒色処理されている。



#### S D 01 (第20図)

81は龍泉窯系青磁で、片切彫による模様が内面屈曲部とその上部に描かれる。灰色を呈したざっくりとした胎土で、釉は緑色の半透明で貫入が入る。器種は腰折れ皿か。82は肥前系磁器の皿で流れ込みと考えられる。83は土師器皿で、体部から口縁部にかけて器壁が薄くなる。84はすり鉢で、使用痕のためか口唇部と口縁部内面が部分的に剥離している。15世紀後半頃に比定される。85は土鍋で、内外面黒色処理されている。73との同質個体である。15世紀後半に比定される。86は焙烙で、内面に緩い段を有する。色調は内外面共に浅黄色だが、器壁の中心部は黒色を呈する。16世紀後半から17世紀初めに比定される。87は凝灰岩製の砥石である。

#### S D 02 (第20図)

88はべっ甲製の櫛で、鬢搔き櫛と思われる。やや左右不对称の形状を呈し、歯の数は57本である。

#### S D 04 (第20図)

89は扁平な形状から焙烙の底部と考えられる。90は瓦質土器の香炉である。須恵器に似せた灰色を呈し、胴部最大径部分に八弁の菊花状のスタンプ文を一段施す。底部には一つ欠損しているが燃土の三足がつく。91・92は共に凝灰岩製の砥石である。93は板碑片で、種子や年号等の彫りは無い。

#### S D 06 (第20図)

94は土師器皿である。外面は底部から体部にかけて緩やかに立ち上がる。底面に糸切痕は認められない。95は天目茶碗の高台部分で、化粧掛けがみられる。高台内は僅かに窪ませるのみである。16世紀後半に比定される。96は器種不明の土器で、非常に緩く湾曲する。97は景祐元寶（北宋・篆書・1034年始鑄）で、損耗が激しい。

#### S D 07 (第20図)

98は鉢の口縁部で須恵質を呈する。

#### グリッド出土遺物 (第20図)

99は産地不明の鉢で、内面口唇部が突出するが使用痕のためか全周にわたって欠損している。100は粘板岩製の硯で欠損が著しい。

## (2) 木製品

### S D 01 (第21図)

101は漆器碗で、内外面とも黒漆塗りである。漆の遺存状態は悪く、内外面共に大部分が剥落している。

### S K 02 (第21・22図)

102～105は漆器碗である。102は内外面赤漆塗りである。103と104は外面と高台内を黒漆塗りとし、内面は赤漆塗りである。105は破片資料で内外面共に赤漆塗りである。106～109は櫛で全て横櫛である。いずれも遺存状態は良好でないが、106、107は黒漆を施し、模様の痕跡が認められる。108は黒漆を塗布後、赤漆の上に金彩する。110は不明木製品で、両面とも黒漆塗りである。111は正方形の板で中心部を穿孔する。木製刀形の鏢と考えられ、穿孔の大きさから刀身部は2.6cm×1.0cmに復元できる。112は板目の板状木製品。113は長軸方向の断面形状が頂点の片寄った三角形を呈する。114は棒状の木製品で断面が矩形。115は芯持材で一方に括れをつくり出す。116は板材で片方の側面にダボ穴を穿ち、平面部両端にも孔を穿つ。117・118は板状を呈する。119は両側面にダボ穴を穿つ。両端がカーブし、本来は円形を呈すると考えられる。120は桶側板と考えられる。121から124は板材で、122は一方の側面にダボ穴を穿つ。125は櫛板形杓子と考えられる。柄の先端は欠損している。126は芯持材で端部は平坦に加工されている。

127は平面形状・断面形状共に長方形。128は断面形状長方形と考えられるが、加工か割れによるものか不明であるが、中央部が年輪に沿って欠損し、えぐれているようになる。

### S K 03 (第23・24図)

129は包丁と考えられる。刃部は全体的に鑄で覆われている。厚みは0.55mmと薄く、切っ先は欠損しており、また刃部途中で欠損している。柄は直径約3cmの円形を呈し、断面矩形の茎が遺存している。

130は桶の底板で、3枚の板を連結している。側面の釘穴の位置が各々でやや異なるが出土状況から同一個体と思われる。131は棒材。132～142は桶の側板と考えられる。SK03にはこのほかにも竹製の桶のタガと考えられる木製品が出土していることから、130とともに組みまれていた桶が廃棄されたと考えられる。143～145もゆるくカーブする形状から桶の側板と考えられる。

### S K 05 (第24図)

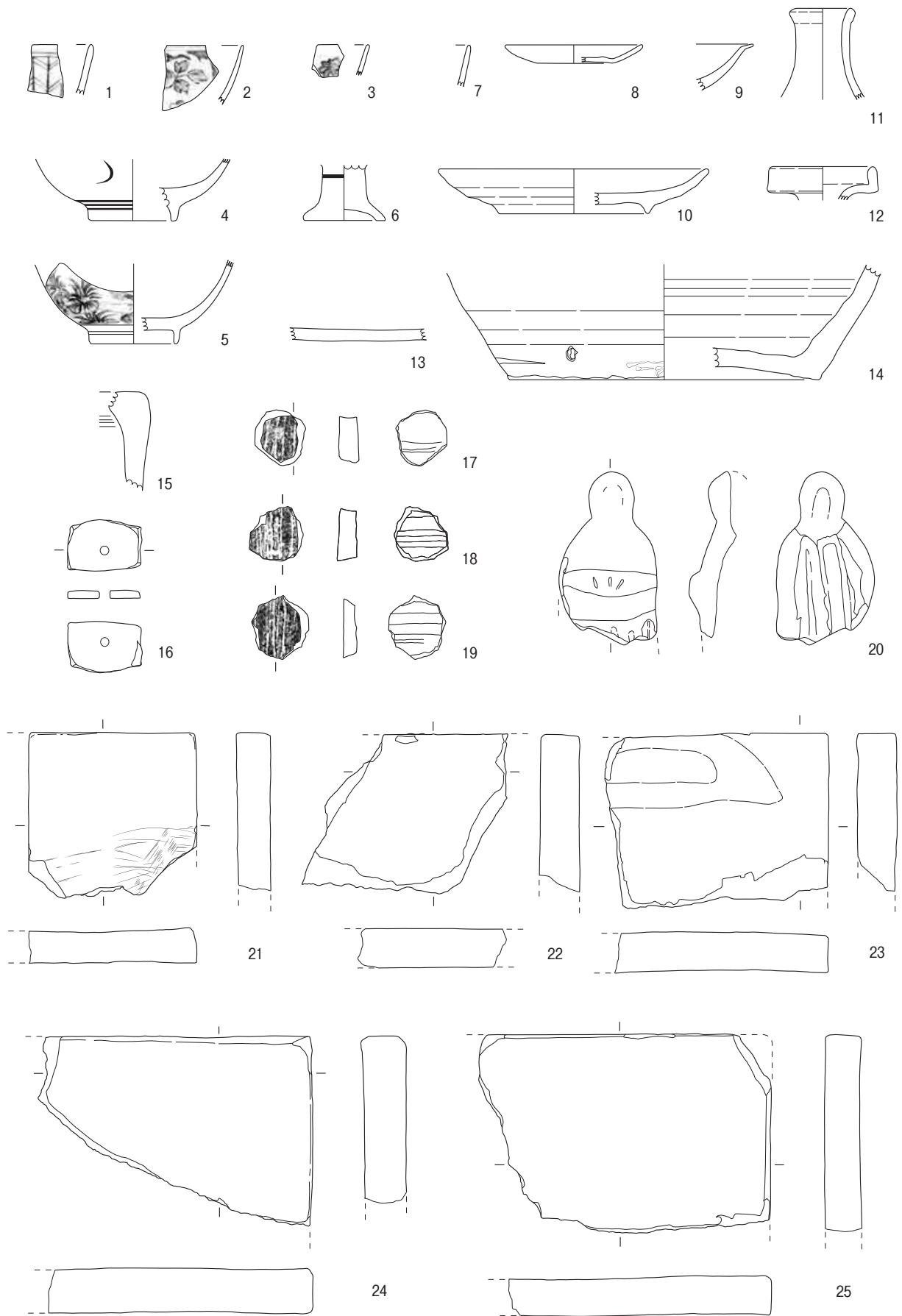
146は芯持材の棒材である。両端が折損し、節を多く持つ。全体的に虫喰いの穴が多数あいている。

### SK08 (第24図)

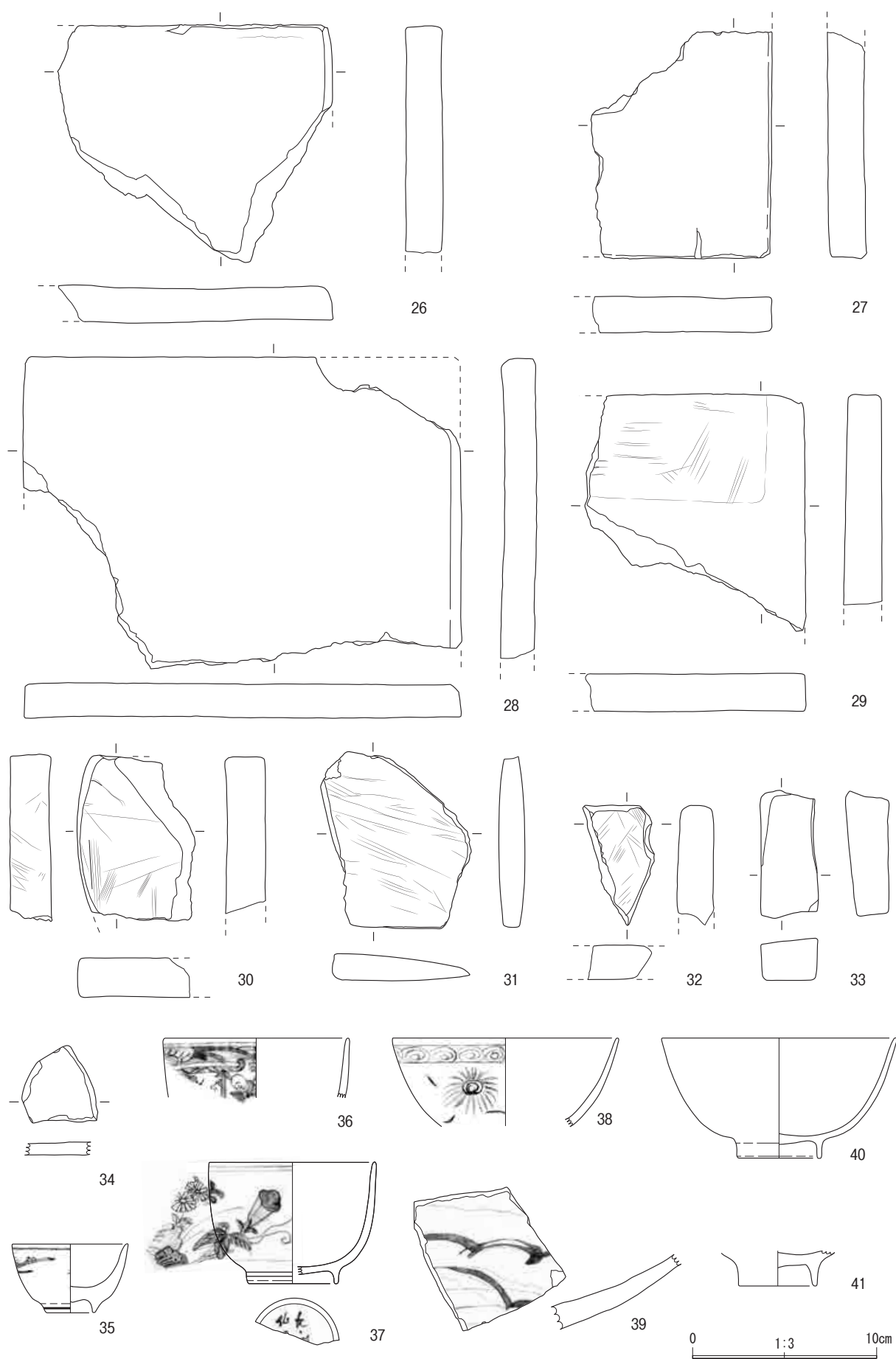
147は桶樽類の底板で、2枚の板を連結している。それぞれ柁目板と板目板である。

### S K 11 (第24図)

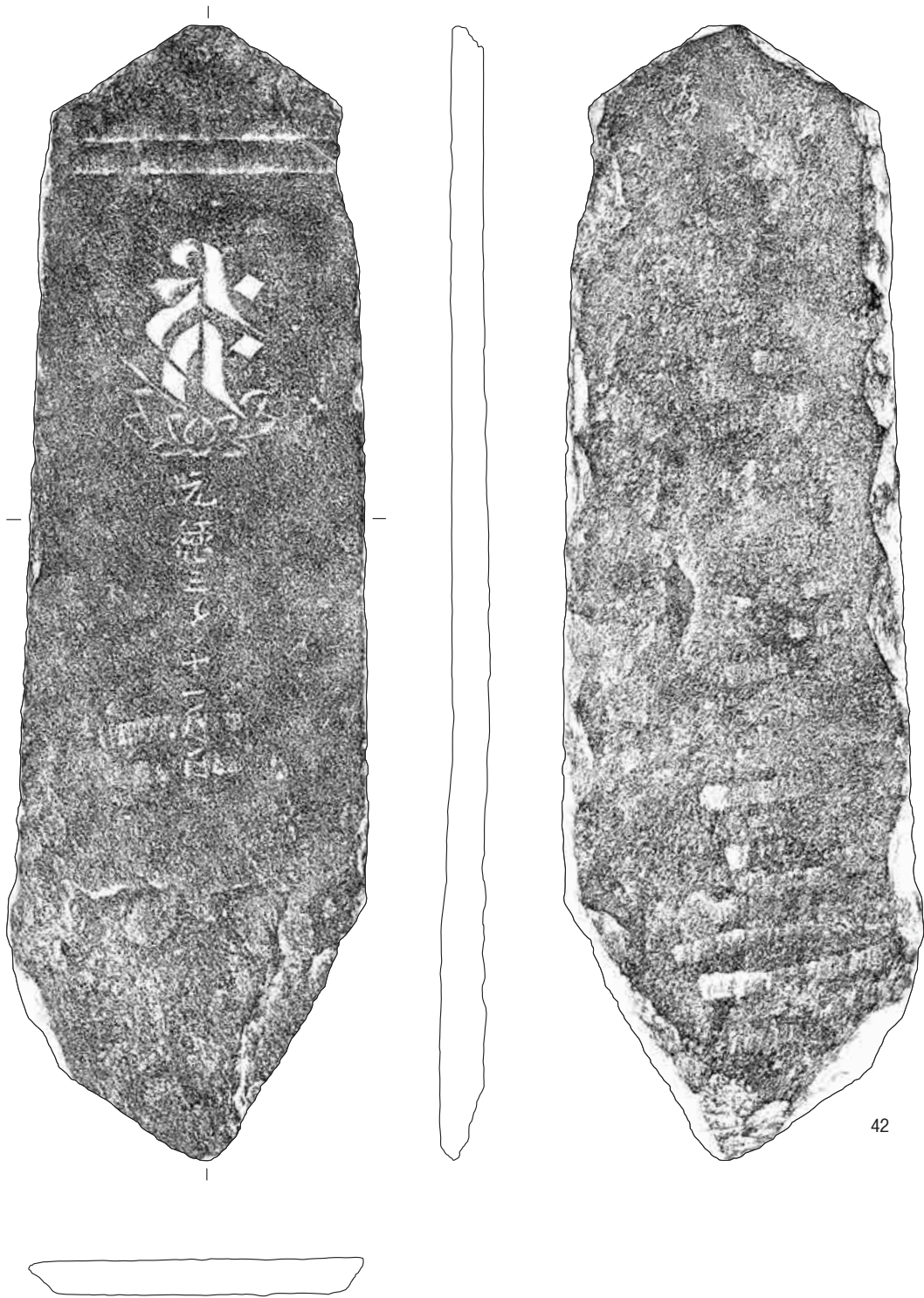
148は板材で、腐朽が進んでいる。刃物による調整痕が目立つ。



第15图 出土遺物1 (土器・陶磁器等)

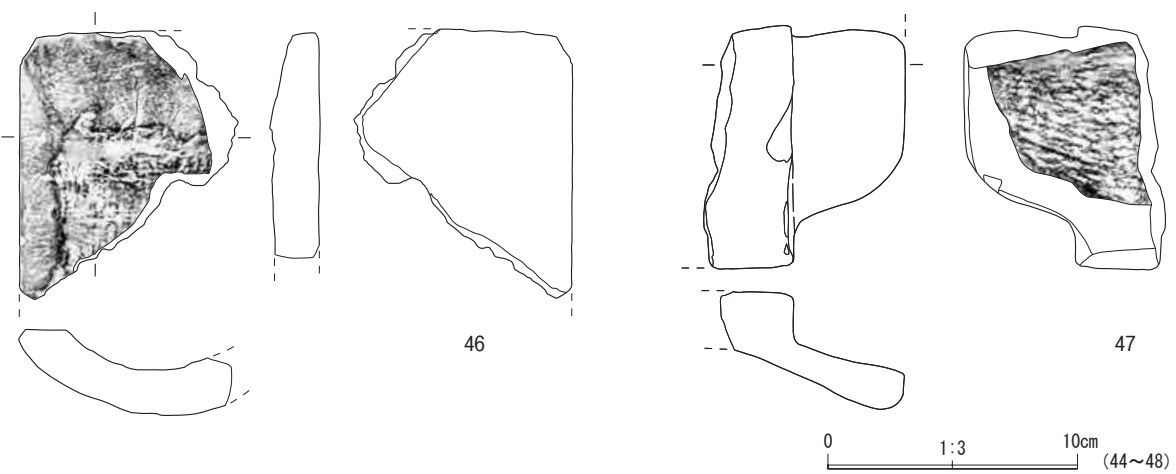
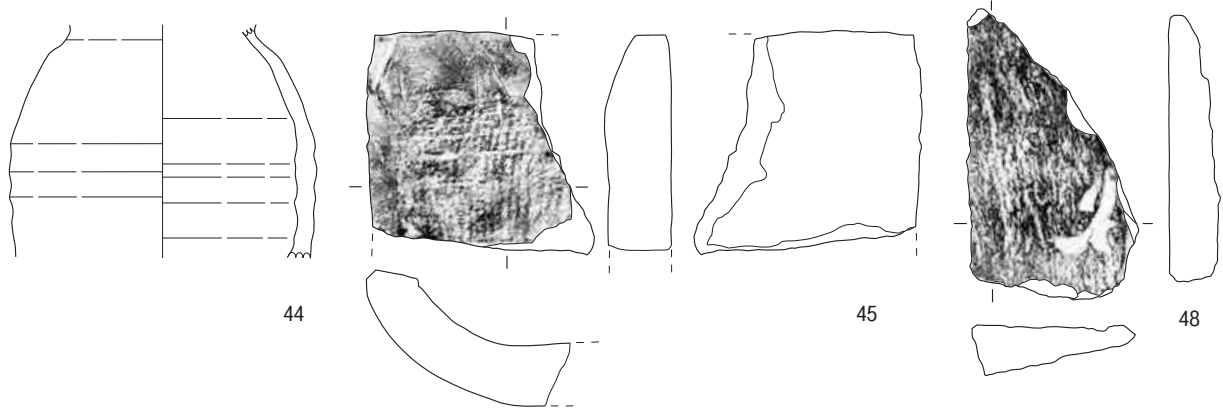
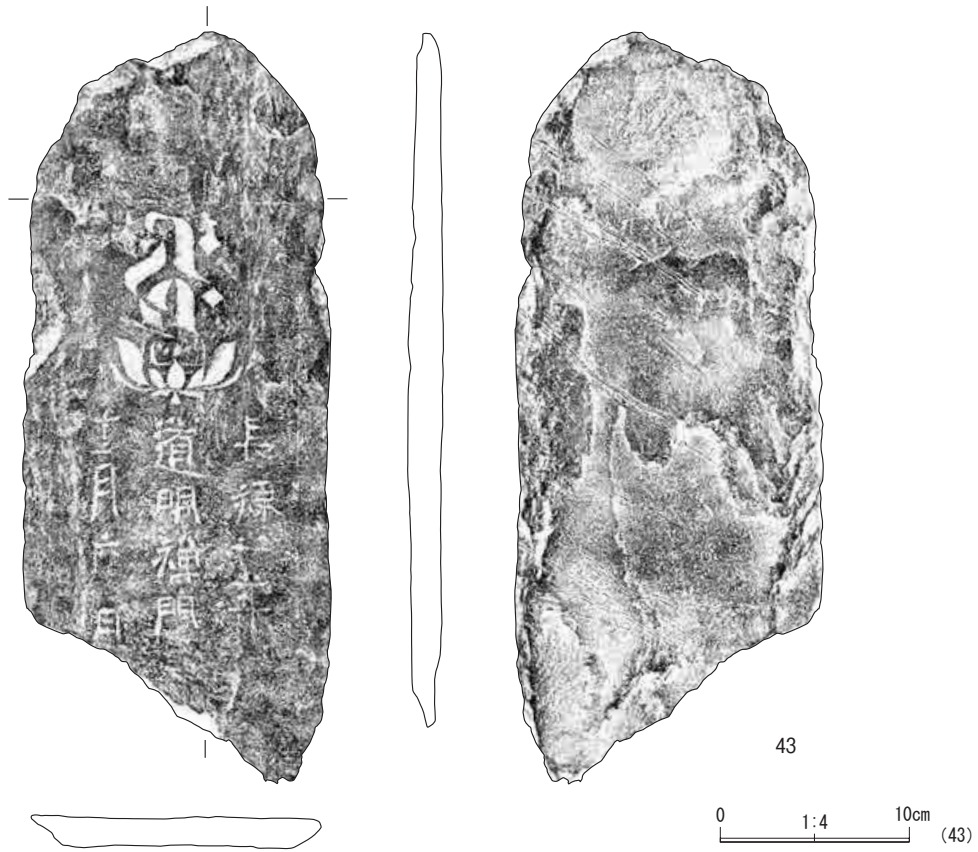


第16图 出土遺物2 (土器・陶磁器等)

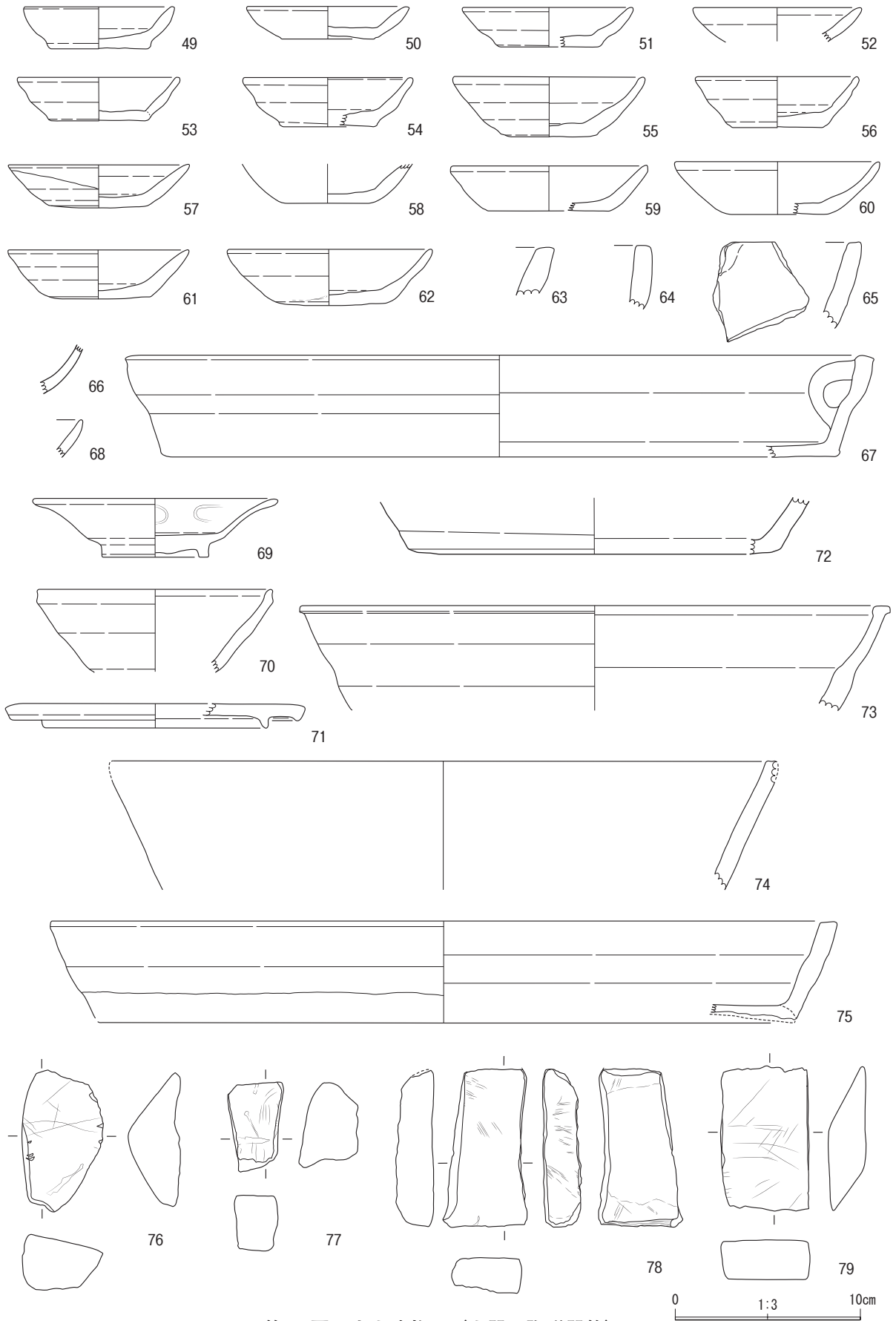


42

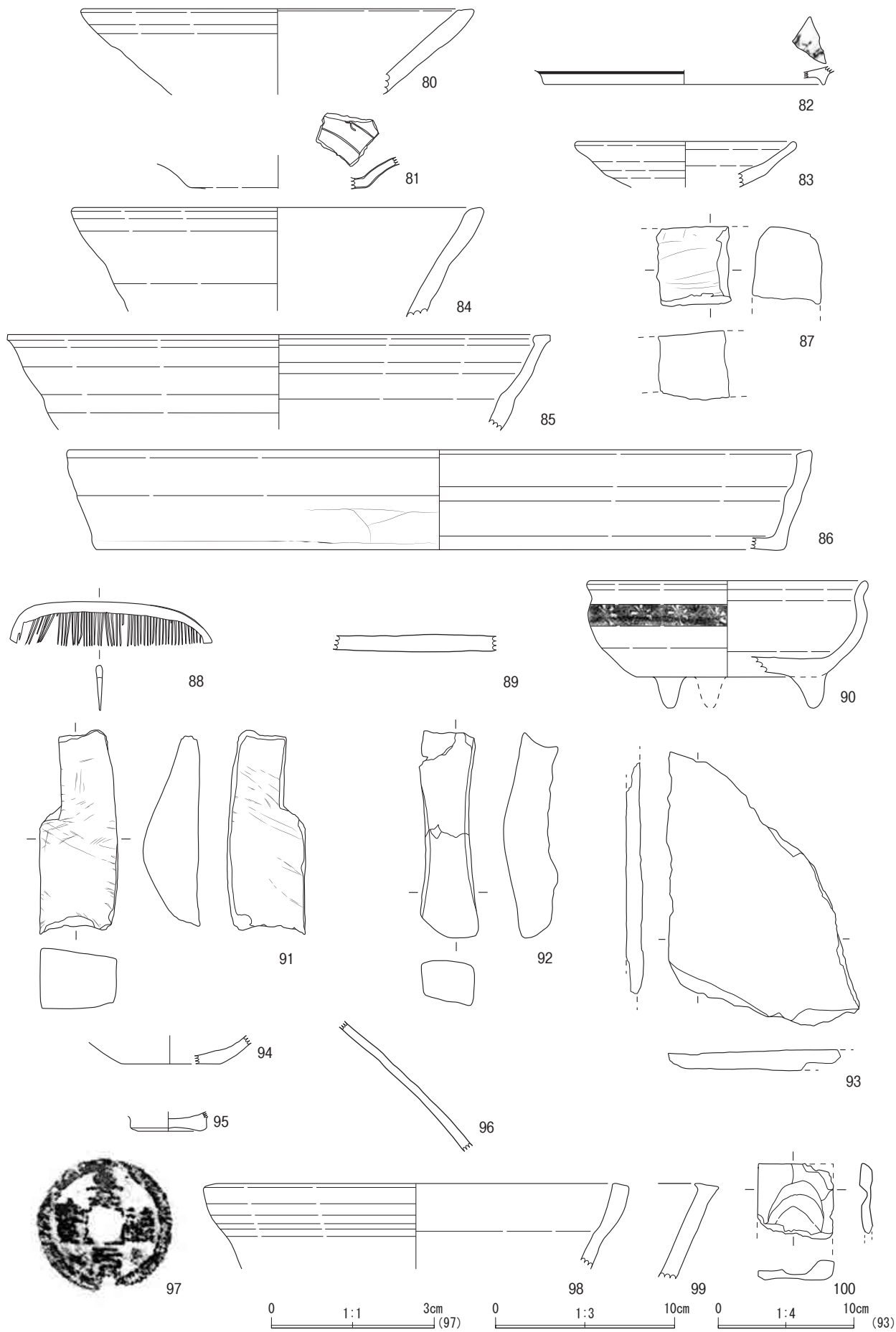
第17図 出土遺物3 (土器・陶磁器等)



第18図 出土遺物4 (土器・陶磁器等)

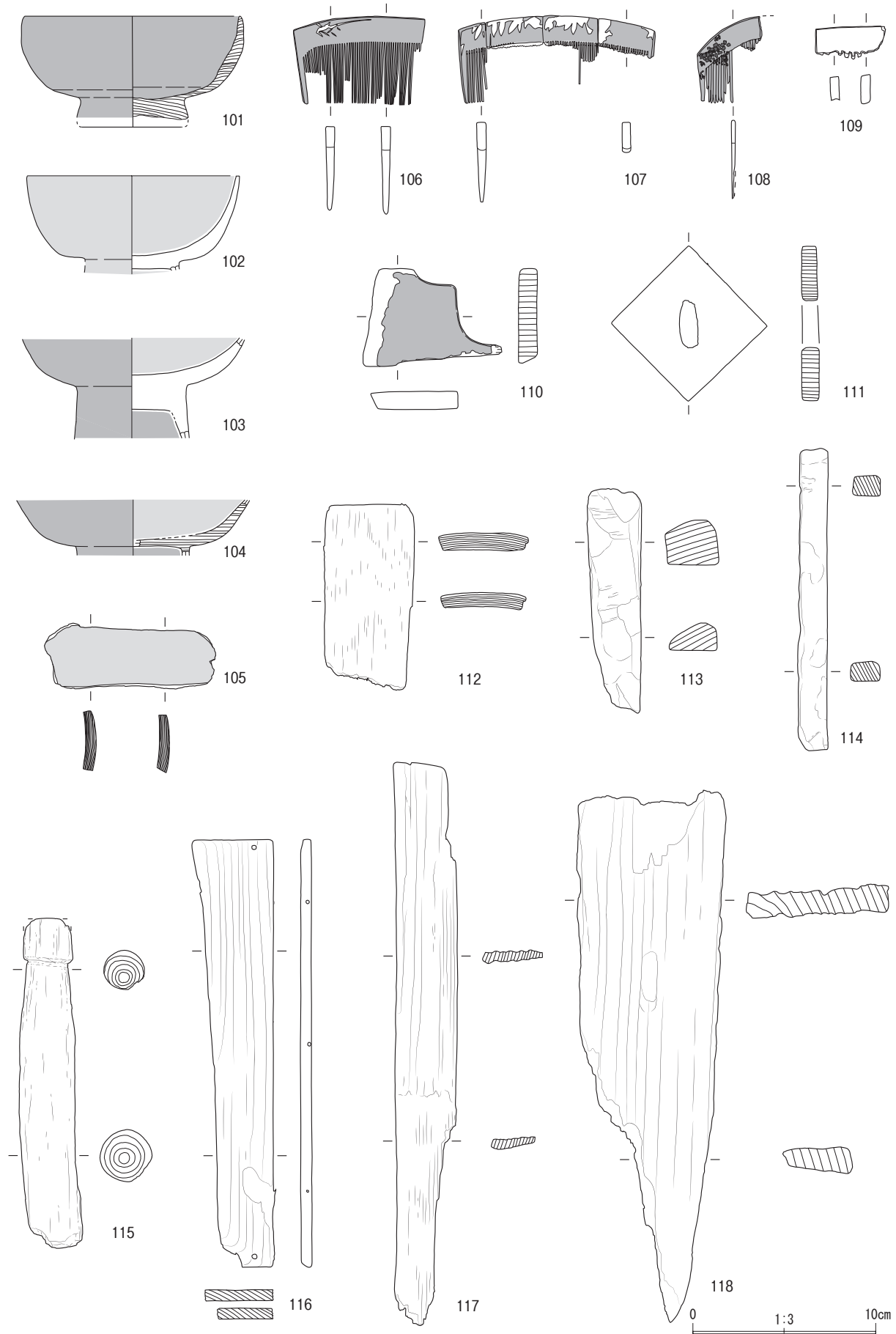


第19图 出土遺物5 (土器・陶磁器等)

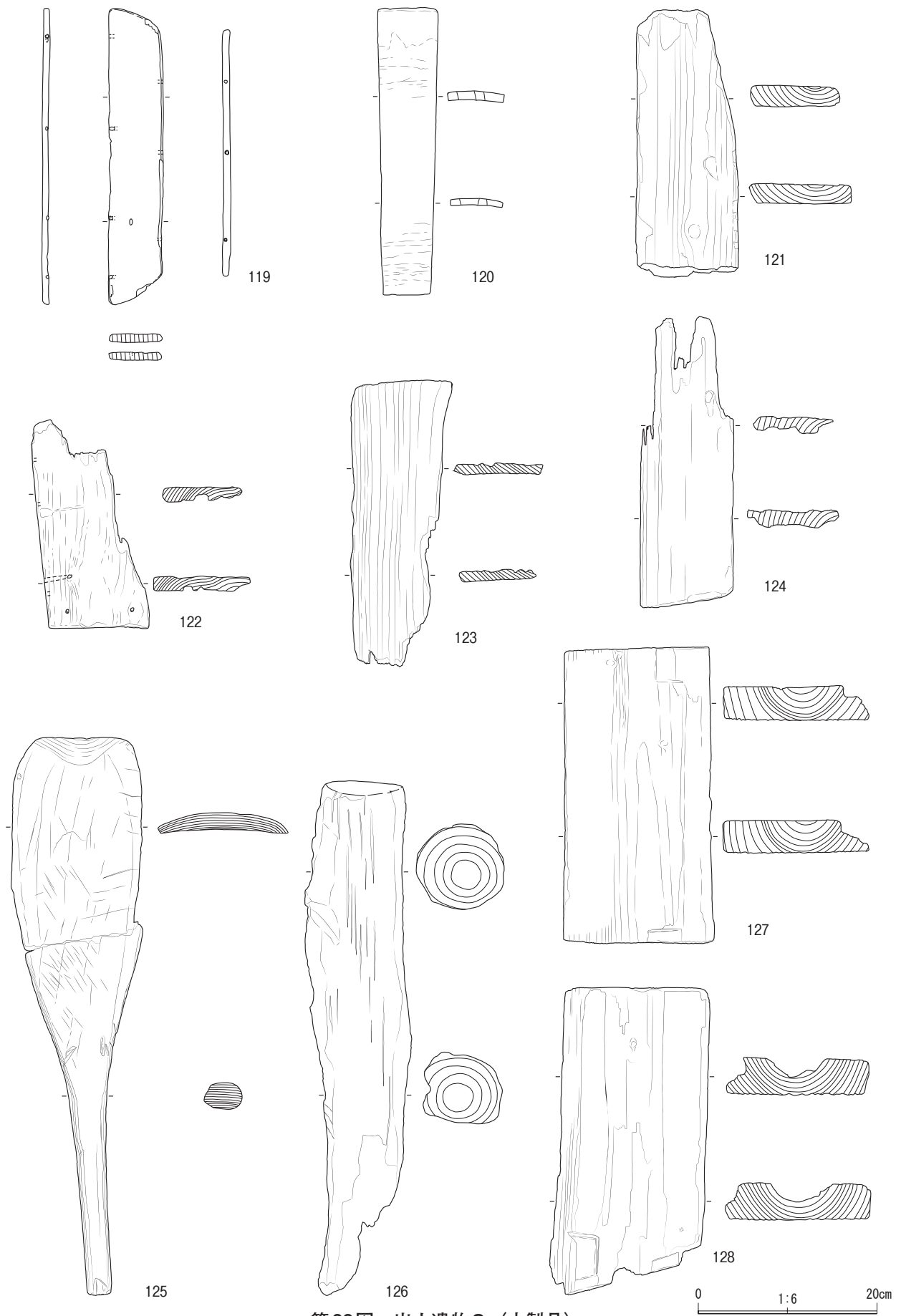


第20图 出土遺物6 (土器・陶磁器等)

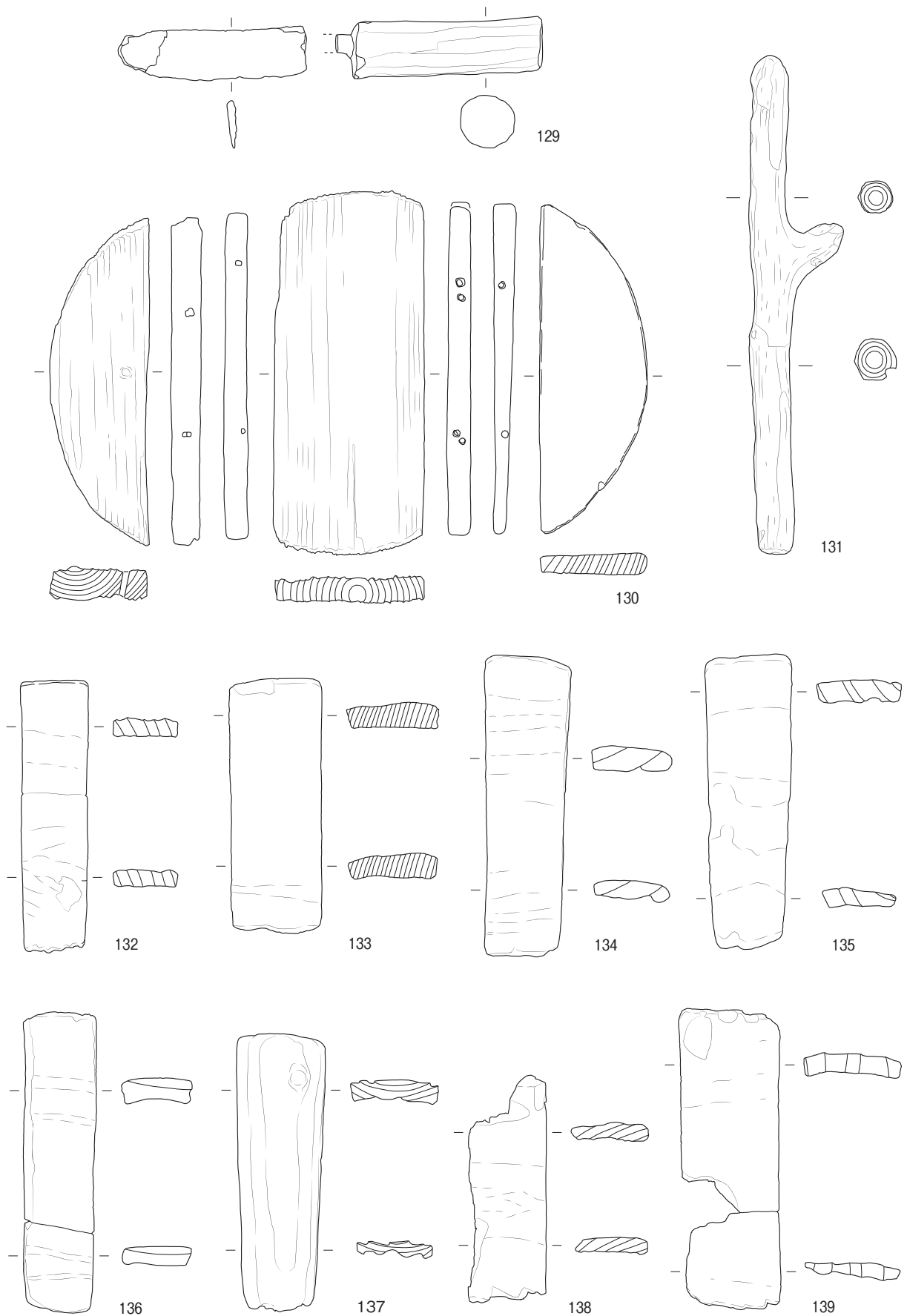




第21図 出土遺物7 (木製品)

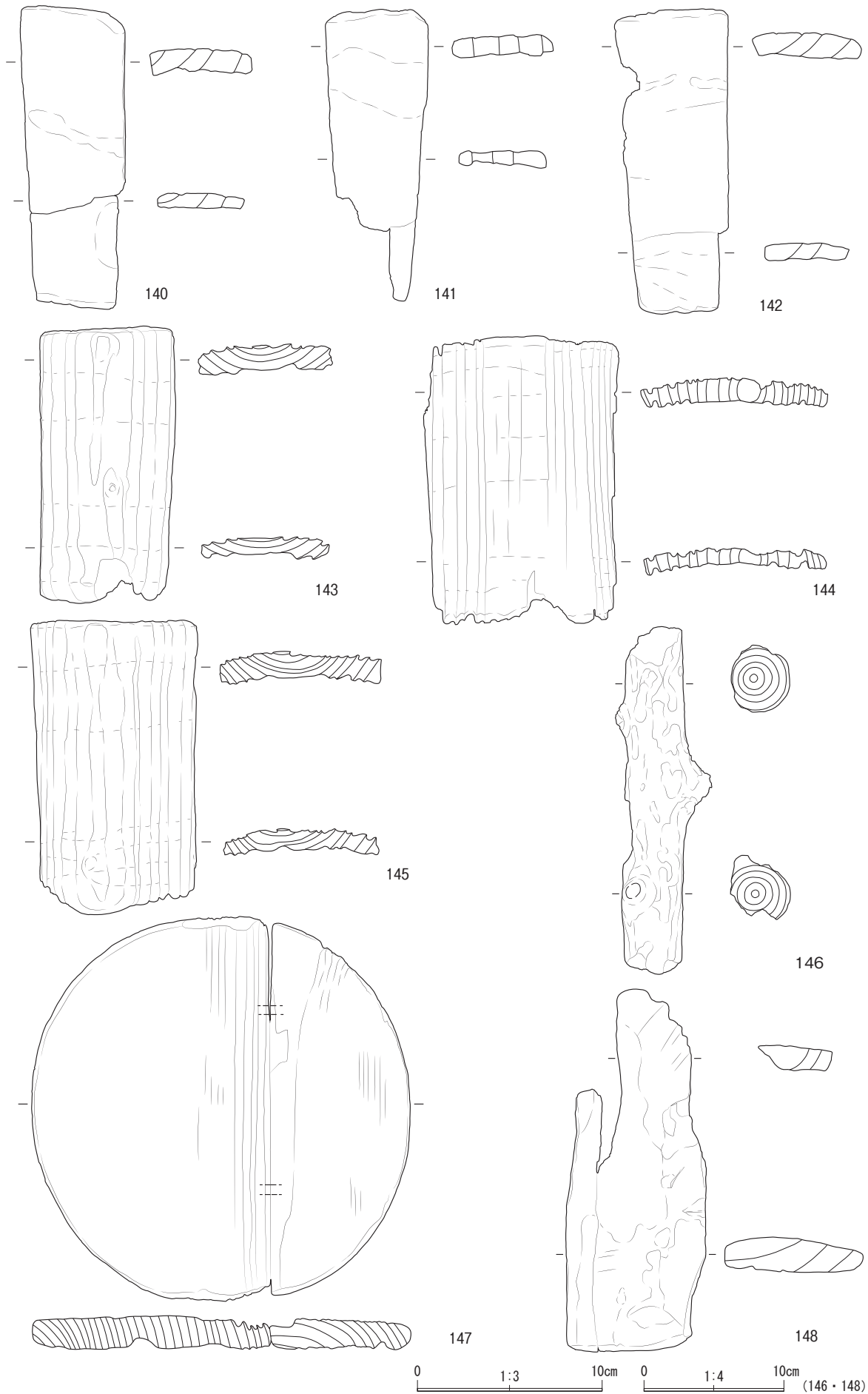


第22図 出土遺物8 (木製品)



第23図 出土遺物9 (木製品)

0 1:3 10cm



第24图 出土遺物10 (木製品)

第3表 遺物観察表 (土器・陶磁器等)

図版 番号	遺物 番号	遺構名	種別	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	胎土	色調	上外面 下内面	調整・施文 (外面)	調整・施文 (内面)	備考	実測 番号
15	1	SK02	磁器	碗	—	—	(2.7)	緻密 灰白	灰白	灰白	染付、透明釉	透明釉	肥前	4
15	2	SK02	磁器	碗	—	—	(3.2)	緻密 灰白	灰白	灰白	染付、透明釉	透明釉	肥前	5
15	3	SK02	磁器	碗	—	—	(1.7)	緻密 灰白	灰白	白	染付、透明釉	透明釉	肥前	3
15	4	SK02	磁器	碗	—	4.6	(3.3)	緻密 灰白	灰白	灰白	染付、透明釉	透明釉	肥前	6
15	5	SK02	磁器	碗	—	4.6	(3.1)	緻密 灰白	灰白	灰白	染付、透明釉	透明釉	肥前	7
15	6	SK02	磁器	仏飯器	—	4.3	(3.0)	緻密 灰白	灰白	灰白	染付、透明釉	透明釉	肥前	8
15	7	SK02	陶器	碗	—	—	(2.2)	緻密 灰白	暗緑灰 暗オリーブ灰 暗オリーブ灰		緑釉	緑釉	唐津	9
15	8	SK02	土師器	皿	7.4	4.0	1.0	黒色粒・赤色粒・ 白色粒・角閃石	にぶい橙 赤・にぶい橙		回転ナデ、底部回転 糸切り	回転ナデ、指頭圧痕 あり	内面及び底面に朱色の 粒子付着あり	1
15	9	SK02	陶器	皿	—	—	(2.5)	緻密 灰白	灰黄 灰黄、緑灰		透明釉	透明釉		10
15	10	SK02	陶器	皿	14.2	8.0	2.4	灰白	浅黄、灰白 浅黄		回転ナデ、灰釉、体 下部ヘラケズリ。指 頭圧痕あり	回転ナデ、灰釉	瀬戸美濃。灯芯油痕、 内面重ね焼き痕跡あり	11
15	11	SK02	陶器	瓶	3.0	—	(4.9)	灰白	灰白、灰オリーブ オリーブ黄 灰オリーブ		鉄釉施釉、灰釉流し 掛け	鉄釉、灰釉	朝鮮唐津	13
15	12	SK02	陶器	瓶	5.4	—	(1.8)	灰白	にぶい赤褐、黒 にぶい赤褐、黒		鉄釉	鉄釉	瀬戸美濃	12
15	13	SK02	土器	焙烙	—	—	(0.64)	白色粒・金雲母 (ごく少量)	褐灰 にぶい褐		ナデ、指頭圧痕あり	ナデ	笠間周辺のものか	14
15	14	SK02	陶器	甕	—	16.6	(5.7)	灰白・長石	赤灰 灰赤		ナデ、ヘラナデ、鉄 釉	ナデ、鉄釉、底部に 指頭圧痕	設楽か	19
15	15	SK02	瓦質 土器	火鉢	—	—	(2.2)	橙色粒・白色粒 (ごく少量)・ 黒色粒・角閃石	にぶい黄橙 にぶい黄橙		回転ナデ、口唇部面 取り	回転ナデ	縁部分欠損	15
16	34	SK03	土器	焙烙	—	—	(0.7)	黒色粒・白色粒・ 橙色粒・角閃石	にぶい橙、灰白 にぶい橙、灰白		ナデ	ナデ		34
16	35	SK04	磁器	小碗	6.2	2.6	3.7	緻密 灰白	灰白 灰白		染絵付、透明釉	透明釉	肥前	38
16	36	SK04	磁器	碗	9.8	—	(3.2)	緻密 灰白	明青灰 灰白		染絵付、透明釉	透明釉	肥前	35
16	37	SK04	磁器	碗	8.8	4.8	6.5	緻密 灰白	灰白 灰白		染絵付、透明釉	透明釉	肥前。高台内「太明 成化年製」	36
16	38	SK04	磁器	碗	12	—	(4.7)	緻密 灰白	明青灰 明青灰		透明釉、絵付(剥落)	透明釉	肥前。外面絵付剥落 痕あり(赤・緑・黒 色を確認)	39
16	39	SK04	陶器	鉢	—	—	(3.5)	白色粒・小礫(微 量)	黄褐、褐灰 灰白、にぶい黄 緑灰		回転ナデ、釉かけ流 し	透明釉、緑泥釉、鉄 釉	二彩唐津	42
16	40	SK04	磁器	碗	12.6	4.4	6.4	緻密 灰白	灰白 灰白		透明釉、貫入あり	透明釉、貫入あり	白磁	40
16	41	SK04	磁器	碗	—	4.2	(1.8)	緻密 白・高台 部黒色粒	灰白、浅黄橙 灰白		乳白釉、高台部一部 露胎	乳白釉、高台内は露 胎	肥前。高台内に兜巾 あり	37
18	44	SK04	陶器	瓶	—	—	(9.2)	黒色粒・白色粒	灰白 灰白		回転ナデ、自然釉	回転ナデ、自然釉		43
19	49	SK06	土師器	皿	8.0	5.0	2.3	白色粒・雲母・ 赤色粒(少量)	浅黄橙 浅黄橙		回転ナデ、底部回転 糸切り	回転ナデ		59
19	50	SK06	土師器	皿	8.6	5.0	1.7	白色粒・黒色粒・ 赤色粒	にぶい橙 にぶい橙		回転ナデ、底部回転 ヘラケズリ	回転ナデ		54
19	51	SK06	土師器	皿	9.1	5.1	2.1	白色粒(少量)・ 赤色粒・雲母	にぶい黄橙 にぶい黄橙		回転ナデ	回転ナデ		57
19	52	SK06	土師器	皿	9.0	—	(1.8)	白色粒・角閃石	にぶい橙 にぶい橙		回転ナデ、一部工具 痕あり	回転ナデ		49
19	53	SK06	土師器	皿	8.6	5.0	2.3	白色粒・黒色粒	にぶい黄橙 浅黄橙		回転ナデ、底部ヘラ 削り	回転ナデ		55
19	54	SK06	土師器	皿	9.0	4.9	2.6	白色粒・赤色粒	にぶい黄橙 にぶい黄橙		回転ナデ	回転ナデ		56
19	55	SK06	土師器	皿	10.2	5.0	3.2	白色粒・赤色粒・ 雲母	にぶい橙 にぶい橙		回転ナデ、底部回転 糸切り	回転ナデ		61
19	56	SK06	土師器	皿	8.6	5.0	2.7	白色粒・赤色粒	浅黄橙 浅黄橙		回転ナデ	回転ナデ		58
19	57	SK06	土師器	皿	9.6	5.0	2.3	白色粒・赤色粒・ 角閃石(少量)・ 雲母(少量)	にぶい橙 にぶい橙		回転ナデ、底部回転 糸切り	回転ナデ	外面に工具痕あり	60

図版 番号	遺物 番号	遺構名	種別	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	胎土	色調 上外面 下内面	調整・施文 (外面)	調整・施文 (内面)	備考	実測 番号
19	58	SK06	土師器	皿	—	4.4	(2.1)	白色粒(少量)・赤色粒・雲母	にぶい黄橙 にぶい黄橙	回転ナデ、全体的に 摩耗のため不明療	回転ナデ、全体的に 摩耗のため不明療		52
19	59	SK06	土師器	皿	10.4	6.4	2.4	白色粒・赤色粒・角閃石(少量)	にぶい橙 にぶい橙	回転ナデ、体下～底 部に一部工具痕	回転ナデ		51
19	60	SK06	土師器	皿	10.9	5.3	2.8	白色粒・赤色粒・角閃石	にぶい橙 にぶい橙	回転ナデ	回転ナデ		53
19	61	SK06	土師器	皿	9.6	5.4	2.6	白色粒・赤色粒	にぶい橙 にぶい橙	回転ナデ	回転ナデ		62
19	62	SK06	土師器	皿	10.9	6.0	3.0	白色粒(少量)・赤色粒	にぶい橙 にぶい橙	回転ナデ、底部回転 糸切り	回転ナデ	体下部外面に工具痕 あり	63
19	63	SK06	土器	焙烙	—	—	(2.4)	黒色粒・白色粒・ 橙色粒・角閃石	灰白 灰白	回転ナデ	回転ナデ		64
19	64	SK06	土器	焙烙	—	—	(3.4)	黒色粒・白色粒・ 橙色粒・角閃石	黒褐 灰褐	回転ナデ	回転ナデ		65
19	65	SK07	土器	鉢	—	—	4.5	白色粒	灰白 灰	横ナデ、ナデ	横ナデ、ナデ	片口鉢	66
19	66	SK08	陶器	碗	—	—	(2.3)	緻密 黒色粒・ 白色粒	極暗褐、暗褐 褐灰、暗褐	鉄釉	鉄釉		67
19	67	SK08	土器	焙烙	40.0	36.0	5.4	白色粒・黒色粒・ 橙色粒・角閃石	灰褐、にぶい橙 褐灰、にぶい黄橙	回転ナデ	回転ナデ	内耳土器	68
19	68	SK09	土師器	皿	—	—	(2.0)	白色粒・黒色粒・ 角閃石(多量)	にぶい黄橙 にぶい黄橙	横ナデ	横ナデ		69
19	69	SK11	白磁	皿	13.0	5.6	3.1	緻密 灰 橙色 粒・白色粒(ごく 少量)	灰白 灰白	回転ナデ、施釉。貫 入あり	回転ナデ、施釉、線 刻の模様あり。貫入 あり	高台内露胎	71
19	70	SK11	陶器	天目 茶碗	12.4	—	(4.4)	緻密 灰白	鉄釉 鉄釉	鉄釉	鉄釉	瀬戸美濃	70
19	71	SK11	土器	蓋	12.0	16.0	1.3	白色粒・黒色粒・ 橙色粒・角閃石	灰黄 褐灰	ナデ	回転ナデ		75
19	72	SK11	土器	土鍋	—	20.0	(2.8)	白色粒・角閃石	黒、褐灰 黒	ナデ、胴部立上りへ ラケズリによる面取 り、底部外周へラ削 り	ナデ		74
19	73	SK11	土器	土鍋	31.4	—	(5.6)	白色粒・黒色粒・ 橙色粒(ごく少 量)	黒褐 褐灰	回転ナデ	回転ナデ	黒色処理	73
19	74	SK11	土器	すり鉢	35.6	—	(6.8)	砂粒・白色粒・ 角閃石	橙 橙	回転ナデ	回転ナデ、一部縦位 の工具痕あり	外面に被熱痕、煤の 付着あり	72
19	75	SK11	土器	焙烙	42.0	(37.2)	(5.2)	白色粒・黒色粒 (多量)・砂粒	黒褐 灰、灰黄	横ナデ、ナデ、指頭 圧痕	回転ナデ、ナデ		76
20	80	SE01	土器	鉢	21.4	—	(4.7)	白色粒・橙色粒・ 角閃石	赤黒、黒褐 赤黒、黒褐	回転ナデ、指頭圧痕 あり	回転ナデ		81
20	81	SD01	青磁	皿	—	—	(1.3)	緻密 灰白 白 色粒(ごく微量)	オリーブ灰 オリーブ灰	青磁釉施釉	青磁釉施釉。片切彫 りによる模様あり	龍泉窯系青磁	97
20	82	SD01	磁器	皿	—	15.4	(0.8)	緻密 灰白	灰白、藍 灰白、藍	染付、透明釉	染付、透明釉	肥前	83
20	83	SD01	土師器	皿	12.0	—	(2.5)	白色粒・橙色粒・ 雲母	灰白 灰白	回転ナデ	回転ナデ		82
20	84	SD01	土器	すり鉢	22.4	—	(5.7)	白色粒・黒色粒・ 橙色粒・角閃石	にぶい褐、褐灰 明褐灰、褐灰	回転ナデ	回転ナデ	内面アバタ状剥離	85
20	85	SD01	土器	土鍋	30.0	—	(5.2)	白色粒・黒色粒・ 角閃石	黄灰、黒褐 黄灰	回転ナデ	回転ナデ	黒色処理	84
20	86	SD01	土器	焙烙	41.0	38.0	5.5	白色粒・砂粒	黒褐、にぶい褐 にぶい橙	回転ナデ、下部横位 へラナデ、ナデ	回転ナデ、一部ナデ		86
20	89	SD04	土器	焙烙	—	—	(0.8)	白色粒・黒色粒・ 橙色粒・角閃石	にぶい橙 灰白、にぶい橙	ナデ、指頭圧痕あり	回転ナデ、ナデ		89
20	90	SD04	瓦質 土器	香炉	15.2	10.4	7.0	白色粒・黒色粒・ 角閃石(ごく少 量)・橙色粒	灰白、にぶい黄橙 灰黄、黄灰	回転ナデ、体下部へ ラケズリ後ナデ。八 弁の菊花状スタンプ 文を1段連続施文。 底部へラケズリ、搦 土の足を貼付け後ナ デ	回転ナデ、ナデ	三足香炉	88
20	94	SD06	土師器	皿	—	5.6	(1.2)	白色粒・黒色粒	にぶい橙 にぶい橙	回転ナデ	回転ナデ		50
20	95	SD06	陶器	天目 茶碗	—	3.4	(0.8)	白色粒・黒色粒	褐灰 黒褐	ナデ、ユビナデ	鉄釉	化粧掛け 底部完存	93
20	96	SD06	土器	不明	—	—	(6.8)	にぶい橙 白色 粒(少量)	にぶい褐 にぶい橙	回転ナデ後へラナ デ、ナデ	回転ナデ、ナデ		94
20	98	SD07	土器	鉢	22.0	—	(4.7)	白色粒・黒色粒・ 角閃石	灰、灰白 灰	回転ナデ	回転ナデ	外面アバタ状剥離あ り	96
20	99	Q24-3	陶器	鉢	—	—	(5.1)	黒色粒・白色粒・ 角閃石	にぶい赤褐 にぶい赤褐	回転ナデ、自然釉	回転ナデ、自然釉	内面二次的な摩滅あ り	41

第4表 遺物観察表 (土製品等)

図版 番号	遺物 番号	遺構名	種類	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	胎土	色調	上外面 下内面	備考	実測 番号
15	16	SK02	土師器皿 転用品	3.9	2.7	0.4	5.3	赤色粒・白色粒 角閃石	にぶい橙 にぶい橙		中心部に径4.5mmの穿孔。底部回転糸 切痕の痕跡あり	2
15	17	SK02	陶器片	3.0	2.7	2.6	9.6	白色粒・黒色粒 石英	褐、にぶい橙 にぶい褐		播鉢。メンコとして転用か	17
15	18	SK02	陶器片	3.0	2.8	2.8	9.9	白色粒・黒色粒 石英	にぶい褐、にぶい 黄橙 にぶい赤褐		播鉢。メンコとして転用か	18
15	19	SK02	陶器片	3.5	3.1	3.0	8.8	白色粒・黒色粒 石英	にぶい黄橙 にぶい橙		播鉢。メンコとして転用か	16
15	20	SK02	土人形	(9.2)	5.3	(1.5)	55.2	白色粒・黒色粒・橙 色粒・金雲母(多量)	浅黄 浅黄		背面部残存	20
15	21	SK02	埴	(8.9)	(9.0)	1.9	184.6	白色粒・角閃石 石英	灰、黒 灰、黒		上面、下面一部に工具による擦痕あり	24
15	22	SK02	埴	(8.5)	(9.6)	2.1	208.3	白色粒・角閃石 石英	灰、暗灰 灰、暗灰		二次的な摩滅あり	25
15	23	SK02	埴	(9.2)	(12.0)	2.1	301.8	白色粒・橙色粒 石英	暗灰、灰 暗灰、灰		二次的な摩滅あり	26
15	24	SK02	埴	(10.2)	(14.2)	2.4	367.0	白色粒・石英	暗灰、灰 暗灰、灰		上側面に二次的な摩滅、裏面に縦に工 具痕あり	29
15	25	SK02	埴	(10.7)	(15.6)	2.0	426.8	白色粒・石英	灰 灰		二次的な摩滅あり	30
16	26	SK02	埴	(12.7)	(14.7)	1.9	381.6	白色粒・石英	暗灰、灰 暗灰、灰			31
16	27	SK02	埴	(12.1)	(9.6)	2.0	279.7	白色粒・石英	黒、灰 黒、灰		片面と長辺側面に二次的な摩滅あり	27
16	28	SK02	埴	(16.6)	23.4	1.8	834.0	白色粒・石英	暗灰、灰、黒 暗灰、灰、黒		2側面二次的な摩滅あり	32
16	29	SK02	埴	(12.2)	(11.7)	2.0	312.4	白色粒・橙色粒 石英	灰 灰		二次的な摩滅あり	28
16	30	SK02	埴	8.5	6.3	2.1	136.7	白色粒・石英	灰、暗灰 灰、暗灰		砥石として転用	23
16	31	SK02	埴	9.2	7.2	1.4	88.6	白色粒・石英	灰 灰		砥石として転用	22
16	32	SK02	埴	6.4	3.5	1.9	36.3	白色粒・石英	灰 灰		砥石として転用	21
18	45	SK04	平瓦	(8.5)	(8.6)	2.5	206.8	白色粒・角閃石 石英	灰、暗灰 灰、暗灰		凸面縦位のナデ。凹面粗い布目圧痕、 一部工具痕あり。広縁部・側縁部・側 面ヘラケズリ。凸面・側面・凹面広端 部・側端部二次的な摩滅あり	47
18	46	SK04	平瓦	(10.6)	(8.6)	2.0	162.6	白色粒・角閃石 石英	灰、暗灰 灰、暗灰		凸面縦位のナデ。凹面粗い布目圧痕。 広縁部・側縁部・側面ヘラケズリ。凸 面・広端部・側端部に二次的な摩滅あ り	48
18	47	SK04	丸瓦	(7.6)	(9.5)	(3.0)	186.2	白色粒・橙色粒 角閃石・石英	灰 灰		有段式。凸面ナデ、玉縁端面・側面ヘ ラケズリ。凹面粗い布目圧痕、玉縁面 部・側縁ヘラケズリ。全体的に摩滅、 特に凹面玉縁面に顕著な摩滅あり	46

第5表 遺物観察表 (石製品等)

図版 番号	遺物 番号	遺構名	種類	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	備考	実測 番号
16	33	SK02	砥石	6.8	3.1	2.2	81.3	4面に使用痕あり。砂岩	33
17	42	SK03	板碑	69.0	20.5	2.8	-	種子はキリーク。銘：元徳三年十一月日。完形	98
18	43	SK03	板碑	(36.7)	16.2	1.8	-	種子はキリーク。銘：長祿二二(四)年 道明禪門 十二月六日	99
18	48	SK04	板碑	(11.5)	(6.6)	2.0	172.8	種子あり。「サ」か?	45
19	76	SK11	砥石	7.5	4.3	2.7	81.6	全面使用痕あり。特に3面使用痕が顕著。凝灰岩	78
19	77	SK11	砥石	4.6	2.3	2.9	54.2	全面使用痕あり。特に3面使用痕が顕著。凝灰岩	77
19	78	SK11	砥石	8.4	4.5	2.0	107.3	全面使用痕あり。特に上面・両側面使用痕が顕著。凝灰岩	79
19	79	SK11	砥石	7.6	4.7	2.1	106.8	全面顕著な使用痕あり。凝灰岩	80
20	87	SD01	砥石	4.3	4.0	3.8	106.3	上面と側面2面擦痕あり。凝灰岩	87
20	88	SD02	櫛	11.3	2.5	0.4	4.0	べっ甲製の櫛。櫛歯57本	100
20	91	SD04	砥石	11.2	4.3	3.1	185.0	割れ口以外全面顕著な使用痕あり。上下面に刀状工具による擦傷痕あり。 凝灰岩	92
20	92	SD04	砥石	11.4	3.1	2.2	114.4	全面に使用痕有。特に3面に使用痕が顕著。凝灰岩	91
20	93	SD04	板碑	(13.0)	(17.1)	1.5	565.0		90
20	100	Q24-3	硯	(3.8)	4.2	(1.1)	22.2	方形硯。粘板岩	44

第6表 遺物観察表 (金属製品)

図版番号	遺物番号	遺構名	種類	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	備考	実測番号
20	97	SD06	銭	2.4	2.4	0.09	2.2	景祐元寶	95
23	129	SK03	包丁刃	(10.0)	2.7	0.55	12.9	柄部は第7表参照	W13

第7表 遺物観察表 (木製品)

図版番号	遺物番号	遺構名	種類	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	備考	実測番号
21	101	SD01	漆器椀	11.8	(6.0)	(6.0)	内外面黒漆塗り	—
21	102	SK02	漆器椀	11.4	(5.0)	(5.1)	内外面赤漆塗り	W31
21	103	SK02	漆器椀	—	(6.0)	(5.4)	外面・高台内黒漆、内面赤漆塗り	W12
21	104	SK02	漆器椀	—	(6.0)	(3.0)	外面・高台内黒漆、内面赤漆塗り	W7

図版番号	遺物番号	遺構名	種類	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	備考	実測番号
21	105	SK02	漆器椀	(9.2)	(3.4)	0.6	内外面赤漆塗り。破片資料	W35
21	106	SK02	櫛	4.8	(7.1)	0.5	横櫛。黒漆塗り。模様痕跡あり	P190
21	107	SK02	櫛	4.7	(10.6)	0.6	横櫛。黒漆塗り。模様痕跡あり	P184
21	108	SK02	櫛	3.6	(4.7)	0.35	横櫛。黒漆塗り。模様は赤漆を塗布後金彩	—
21	109	SK02	櫛	(1.8)	(3.8)	0.5	横櫛	W60
21	110	SK02	部材	(5.3)	(7.5)	1.0	両面黒漆塗り	W12
21	111	SK02	木製鏝	8.4	8.4	0.9	刀身部2.6cm×1.0cmに復元	W34
21	112	SK02	板材	(10.0)	4.9	1.0		P8
21	113	SK02	棒材	(12.1)	2.9	2.4		W19
21	114	SK02	棒材	(16.3)	1.7	1.0		W27
21	115	SK02	棒材	(17.8)	3.0	2.8	先端部に括れをつくる	W14
21	116	SK02	板材	23.0	(4.5)	0.6	平面2カ所、1側面3カ所釘穴あり	W8
21	117	SK02	板材	(30.4)	(3.3)	0.6		W11
21	118	SK02	板材	(28.2)	(7.9)	1.4		W43
22	119	SK02	板材	33.3	6.0	1.0	桶椽類底板か蓋類。長辺側面4カ所、短辺側面3カ所の釘穴あり	W15
22	120	SK02	桶側板	(32.3)	(6.7)	1.0	外面にタガ痕、内面底板痕あり	W56
22	121	SK02	板材	(30.0)	11.4	2.4		—
22	122	SK02	板材	(23.3)	10.4	1.6	平面下部並列して2カ所、片側面4カ所の釘穴あり	W41
22	123	SK02	板材	(32.0)	(10.0)	1.2		W3
22	124	SK02	板材	(32.4)	10.4	2.0		W40
22	125	SK02	椀形板杓子	(62.1)	14.3	椀先1.9 柄2.9	柄の先端部欠損	W59
22	126	SK02	柱材	(57.3)	(11.0)	9.5		W47
22	127	SK02	板材	(33.3)	(16.9)	3.9		W39
22	128	SK02	板材	(34.5)	(16.8)	4.1		W2
23	129	SK03	包丁柄	10.2	3.0	3.0	長さ0.98cmの茎残存。刃部は第6表参照	W13
23	130	SK03	桶底板	19.2	18.9	1.8	3つの板材を連結。左側板材の平面に裏まで抜ける小穴穿孔と側面2カ所釘穴、中央板材の左側面2カ所と右側面4カ所釘穴、右側板材の側面2カ所釘穴あり	W16
23	131	SK03	棒材	26.7	5.0	2.2		W12
23	132	SK03	桶側板	(14.5)	3.6	0.9		W9
23	133	SK03	桶側板	(13.6)	4.9	1.3		W3
23	134	SK03	桶側板	(16.0)	4.6	1.3		W10
23	135	SK03	桶側板	(15.6)	4.6	1.2		W17
23	136	SK03	桶側板	(16.0)	3.8	1.2		W11
23	137	SK03	桶側板	(14.8)	4.7	1.1		W21
23	138	SK03	桶側板	(11.7)	4.1	0.9		W22
23	139	SK03	桶側板	(15.9)	5.2	1.0		W5
24	140	SK03	桶側板	(15.8)	5.6	1.3		W4
24	141	SK03	桶側板	(15.5)	5.4	1.1		W18
24	142	SK03	桶側板	(16.1)	6.0	1.3		W14
24	143	SK03	桶側板	(14.6)	7.2	1.5		W2
24	144	SK03	桶側板	(15.0)	10.1	1.2		W20
24	145	SK03	桶側板	(15.7)	8.9	1.4		W21
24	146	SK05	棒材	24.8	6.2	4.8	全体的に虫喰い穴が多数有り	—
24	147	SK08	桶椽類底板	20.4	20.2	1.7	2枚の板材を2カ所のだけ継ぎで連結	—
24	148	SK11	板材	(25.8)	10.0	2.4	刀物による調整痕が目立つ	P179



## IV 総括

### 調査の成果

越谷市大字御殿町一帯には、かつて会田出羽屋敷が設置され、その場所に慶長9年（1604）越ヶ谷御殿が設置された。その後、明暦の大火（1657）で江戸城が焼失した際に御殿を江戸城二の丸に移すため解体されたといわれている。会田出羽は信濃出身で、天正17年（1589）に没した会田出羽資清が越ヶ谷に移り住んだと伝えられていることから、16世紀後半までには会田出羽屋敷が設置されていたと考えられる。

今回の調査では府中御殿などの調査例で検出されているような掘立柱建物跡や堀跡などは検出されておらず、御殿の中核が設置されていた場所とはいえない。調査区の大半を占めていた溝の埋没年代は16世紀頃と考えられ、溝は会田出羽屋敷に関連するものとも考えられるが、調査区が狭く、堀や区画溝のような性格をもつものなのかどうかについて、今回の調査では判断ができない。

### 越ヶ谷瓜の蔓から推測する越ヶ谷御殿の位置

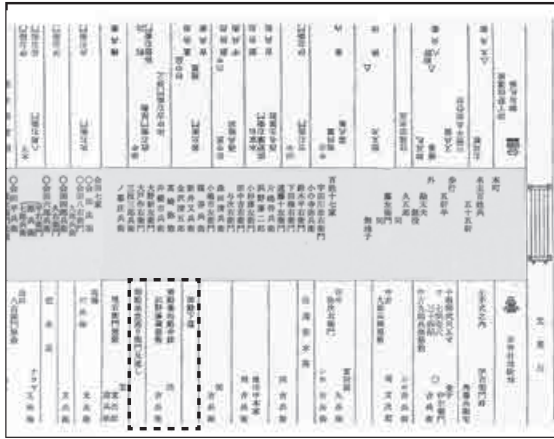
越ヶ谷御殿は御殿町地内のどこに存在していたのだろうか。越ヶ谷御殿跡が御殿町のどの場所に立地していたかを直接的に示す資料は無いため、本調査区が御殿跡に対してのどのあたりに位置しているかは不明といわざるを得ない。

御殿跡の場所を間接的に示すと考えられる資料としては「越ヶ谷瓜の蔓」が挙げられる。越ヶ谷瓜の蔓は越ヶ谷宿のうち大沢町の旧家、福井家七代権右衛門によって書かれた越ヶ谷町の地誌である。成立は、文化九年（1812）の記事があることと、著者の没年代から勘案して、文化末か文政初年の頃と推定されている。その中に、越ヶ谷宿の町割図が描かれており「御殿下道」「御殿番相勤申候 浜野藤蔵屋敷」「御殿地表通り御門見通し」の記載が確認できる（第25図）。なお、浜野藤蔵とは、慶長9年に越ヶ谷御殿の勤番を仰せ付けられた濱野藤右衛門某の家系に連なる者と推定される（P4参照）。

この町割図と、現在の当該地図（第26図）を対比させ、上記の3つの記述がどの位置に比定されるのかを示したのが第27図である。町割図の測量的な精度と、町割図と現在の地図を合成する際の基点の位置をどこに設定するかによって誤差はあるものの、おおむね第27図点線部分を北東方向にスライドさせた位置周辺に対応すると考えられる。（本来は両図の日光街道を重ね合わせれば位置関係は一目瞭然となるが、図が煩雑になるためにずらして配置している）

第28図は越ヶ谷御殿跡の位置推定図である。越谷市史では「Ⅱ 2. 歴史的環境」でも触れたように、大正13年、元荒川の改修に際し、逆川と元荒川の合流地点から元荒川の右折部にかけて、御殿の礎石ともみられる6個の大きな角石が発掘されたといわれていることから、第28図斜線部地点を越ヶ谷御殿跡推定地としている。一方、町割図と現在の地図の合成から、「御殿下道」や「御殿地表通り御門見通し」が日光街道に対して垂直延長線に通じ、かつそれらがかつて御殿に通じていた（見通せていた）と考えられるならば、御殿は実線方向に存在することとなる。又は、現在も残されている南西―北東方向の道路（網掛け部）が「御殿下道」や「御殿地表通り御門見通し」など、越ヶ谷宿の区割りの痕跡を今も残していると考えられるのであれば、御殿は一点破線方向に延長していると推定される。これらの推定は、昭和に開削された葛西用水よりも西側に御殿が存在していた可能性を示すとともに、今回の発

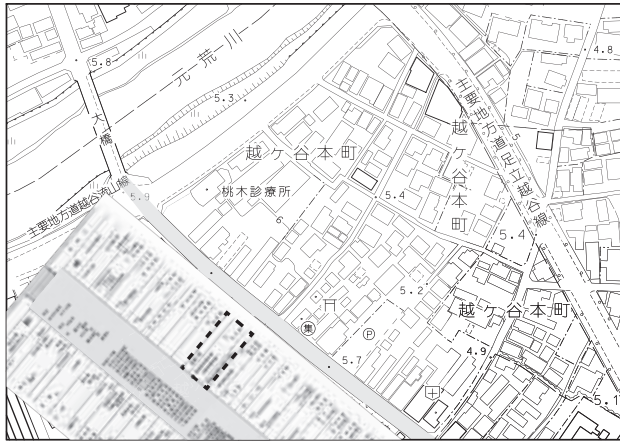
掘調査区は越ヶ谷御殿の中核が設置された場所とは位置が異なる可能性を示している。いずれにせよ、今後の調査により越ヶ谷御殿跡の発見が期待される。



図の右が北西、破線は執筆者追加  
第25図 越ヶ谷宿町割図



図の上が北  
第26図 越ヶ谷本町周辺白図

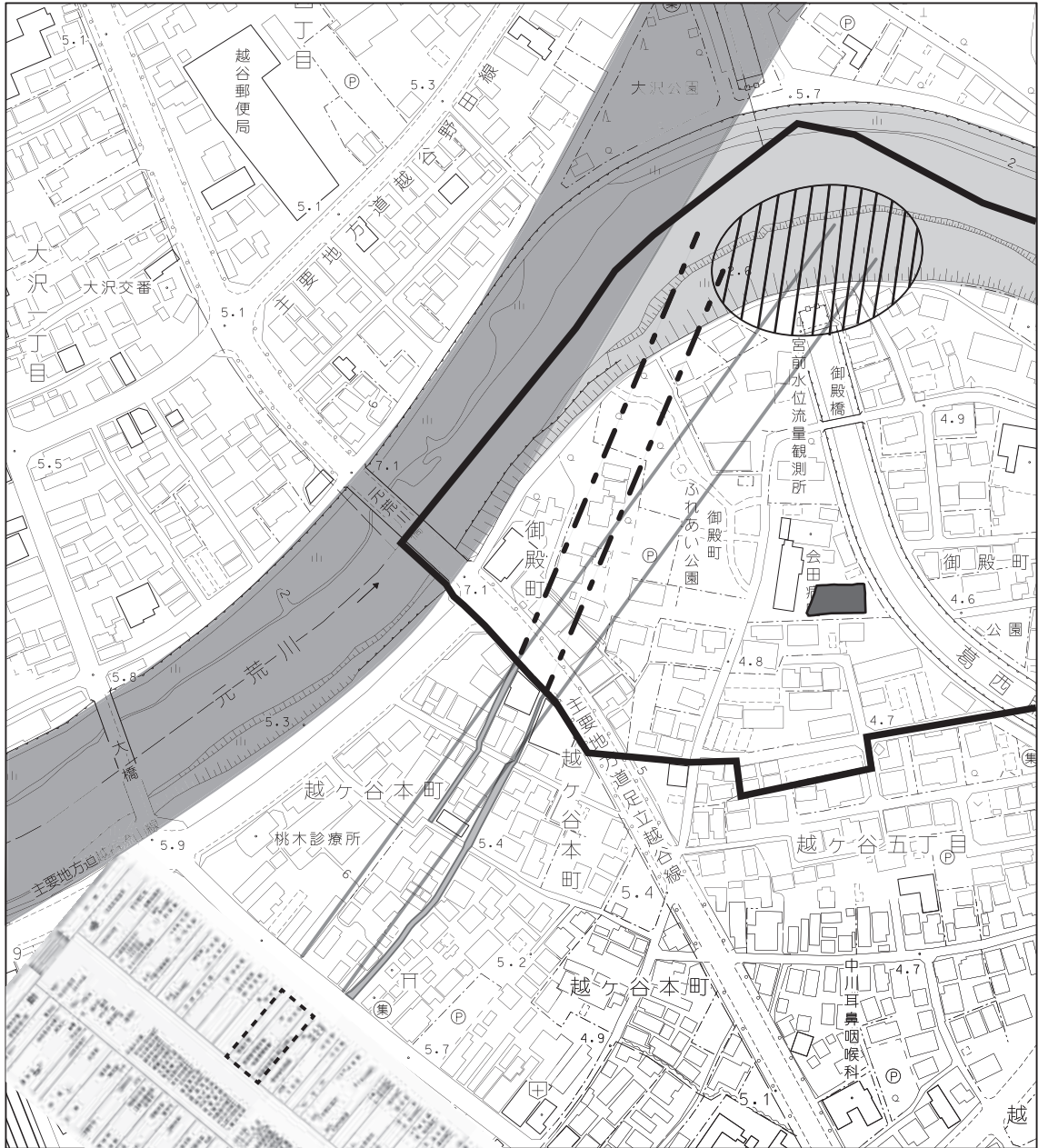


第27図 町割図と白図の合成図

■ 日光街道  
（※第25図と第26図の対応部分）  
- - - 「御殿下道」  
「御殿番相勤申候 浜野藤蔵屋敷」  
「御殿地表通り御門見通し」  
の記載部分  
（※第25図破線部と対応）

#### 引用・参考文献

- 浅野晴樹 1991「東国における中世在地系土器について—主に関東を中心にして—」『国立歴史民俗博物館研究報告第31集』国立歴史民俗博物館
- 江口 桂 2014「府中御殿」『月刊考古学ジャーナル651』ニューサイエンス社
- 大橋康二 1989『考古学ライブラリー55 肥前陶磁』ニューサイエンス社
- 九州近世陶磁学会 2000『九州陶磁の編年 九州近世陶磁学会10周年記念』
- 越谷市編 1975『越谷市史 第1巻』
- 越谷市編 1973『越谷市史 第3巻』
- 越谷市編 1972『越谷市史 第4巻』
- 太宰府市教育委員会 2000『大宰府条坊跡X V—陶磁器分類編—』
- 宮瀧交二 1992「板碑の廃棄に関する基礎的検討（1）—埼玉県内における井戸跡出土の板碑をめぐって—」『研究紀要 第9号』埼玉県埋蔵文化財調査事業団



- 発掘調査区
  - 旧流路
  - 現流路（慶長年間の直線化後）
  - 越ヶ谷市史一における越ヶ谷御殿跡推定地
  - 「御殿下道」「御殿番相勤申候 浜野藤蔵屋敷」「御殿地表通り御門見通し」の記載部分（※第27図と対応）
  - 日光街道に対して垂直に点線部分を延ばしたライン
  - 道路
  - 道路の延長ライン
  - 御殿町の区域
- 0                      1:3000                      100m

第28図 越ヶ谷御殿跡推定地



写真1 SD01・SD02 完掘状況（南東から）



写真2 SD04・SD05 完掘状況（南東から）

写真図版2



写真3 SD07 完掘状況（南東から）



写真4 SD08・SD09 完掘状況（南西から）



写真5 SK02 土層断面 (南西から)



写真6 SK02 遺物出土状況 (南西から)



写真7 SK02 完掘状況 (南西から)



写真8 SK03 土層断面 (南西から)



写真9 SK03 板碑 (42) 出土状況 (北から)



写真10 SK03 板碑 (42) 出土状況 (北から)



写真11 SK03 木製品出土状況 (北から)



写真12 SK03 板碑 (43) 出土状況 (南西から)

写真図版4



写真13 SK03 板碑 (43) 出土状況 (南西から)



写真14 SK04 土層断面 (南から)



写真15 SK04 遺物出土状況 (西から)



写真16 SK05 土層断面 (南から)



写真17 SK06・SK07 土層断面 (南西から)



写真18 SK08 遺物 (68) 出土状況 (南西から)



写真19 SK08 木製品 (147) 出土状況 (南から)



写真20 SK09 土層断面 (南から)



写真21 SK10 土層断面 (南から)



写真22 SK11 土層断面 (南東から)



写真23 SK11 土層断面 (南西から)



写真24 SE01 土層断面 (南から)



写真25 SD01 土層断面 (南から)



写真26 SD02 土層断面 (南から)



写真27 SD04 土層断面 (南から)



写真28 SD09 土層断面 (東から)



写真図版6



写真29 SD01～SD05 a-a'土層断面 (南西から)



写真30 SD01・SD02 切り合い (南から)



写真31 SD01・SD04・SD07 切り合い (南から)



写真32 SD04・SD07・SD02 切り合い (南から)

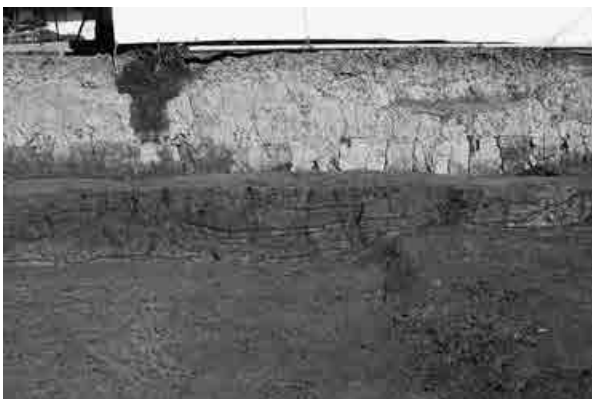


写真33 SD07・SD02・SD05 切り合い (南から)



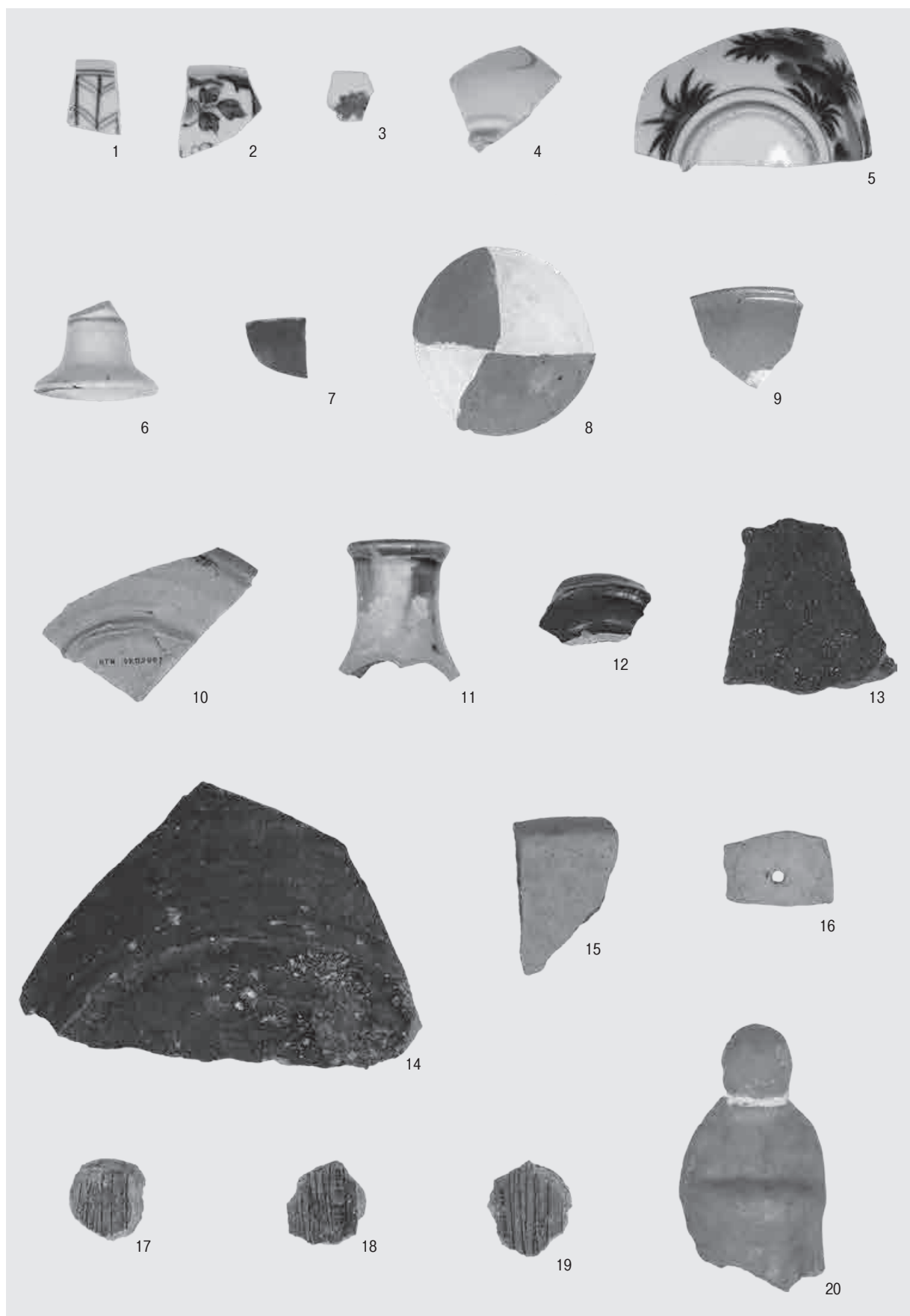
写真34 SD02・SD05 切り合い (南から)



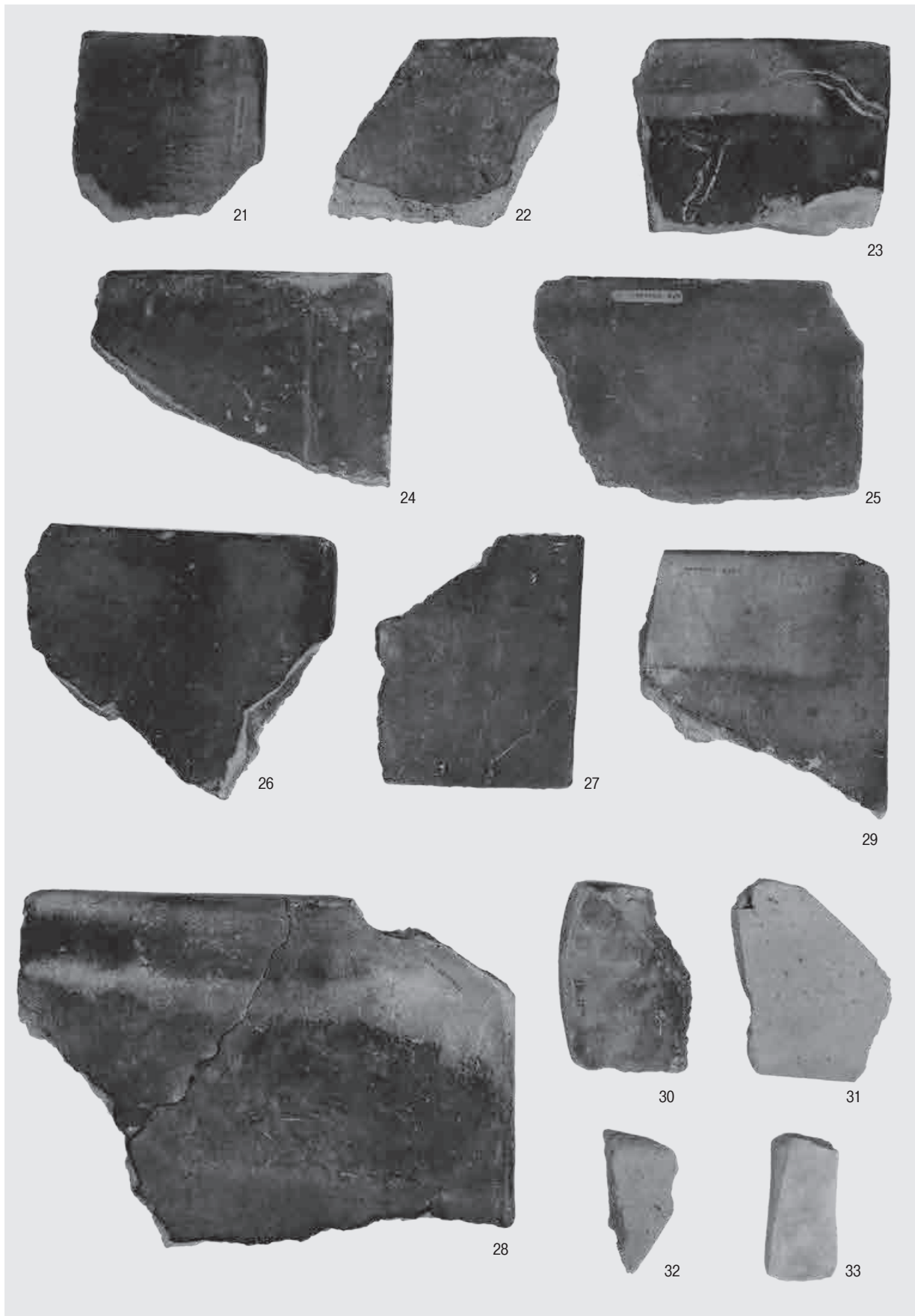
写真35 SD08 h-h'土層断面 (北から)



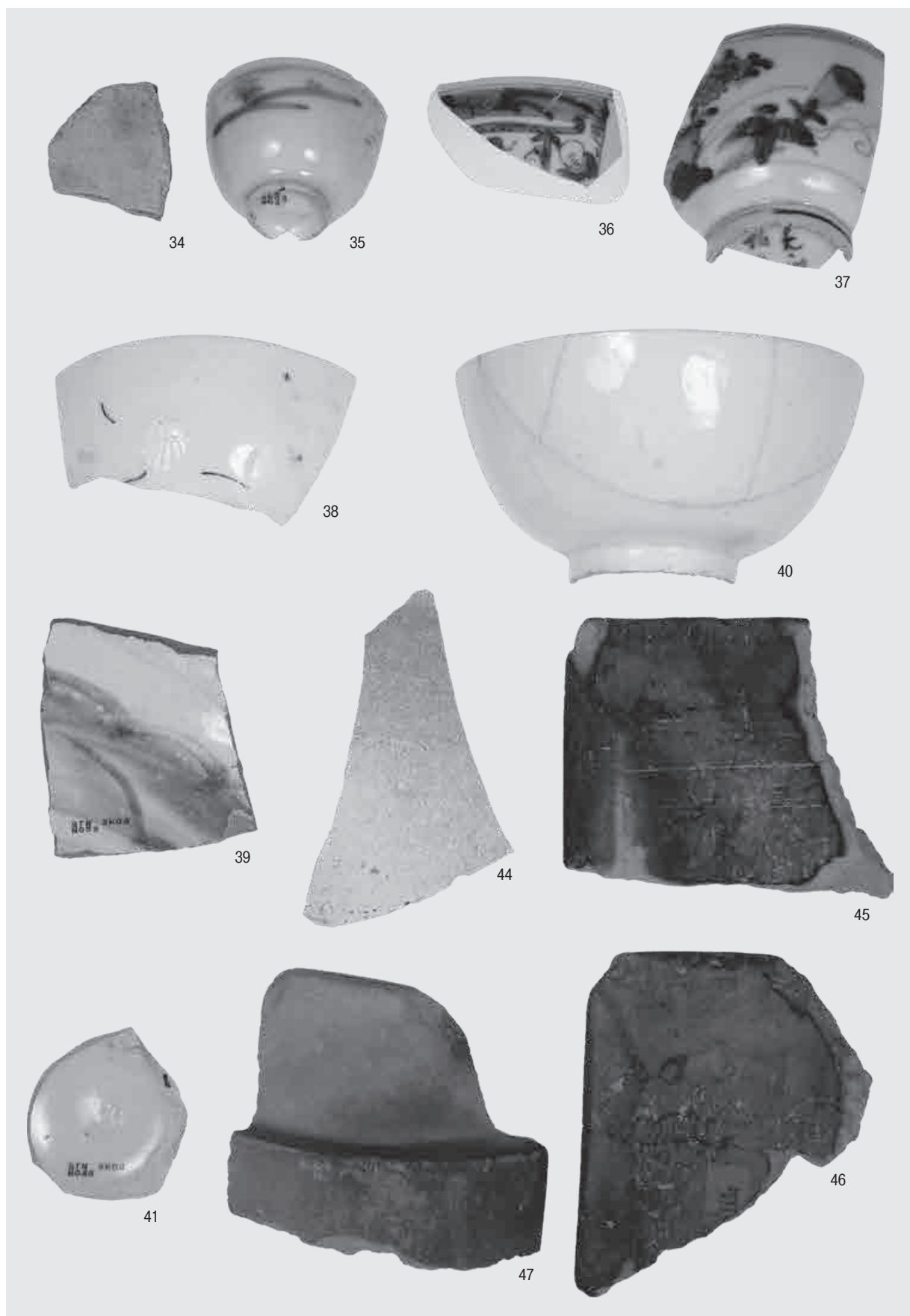
写真36 SD08 g-g'土層断面 (南から)



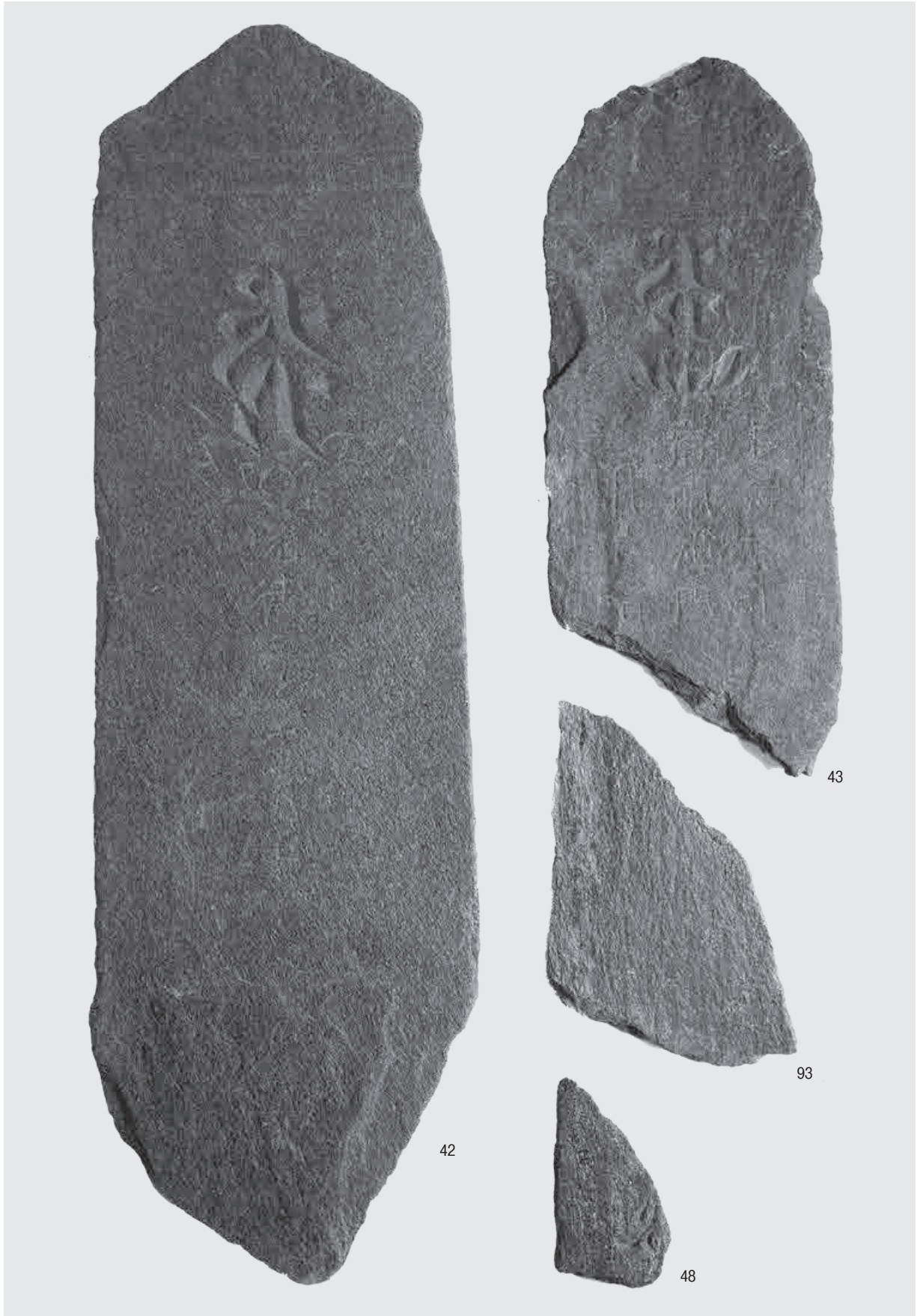
SK02出土遺物 (1)



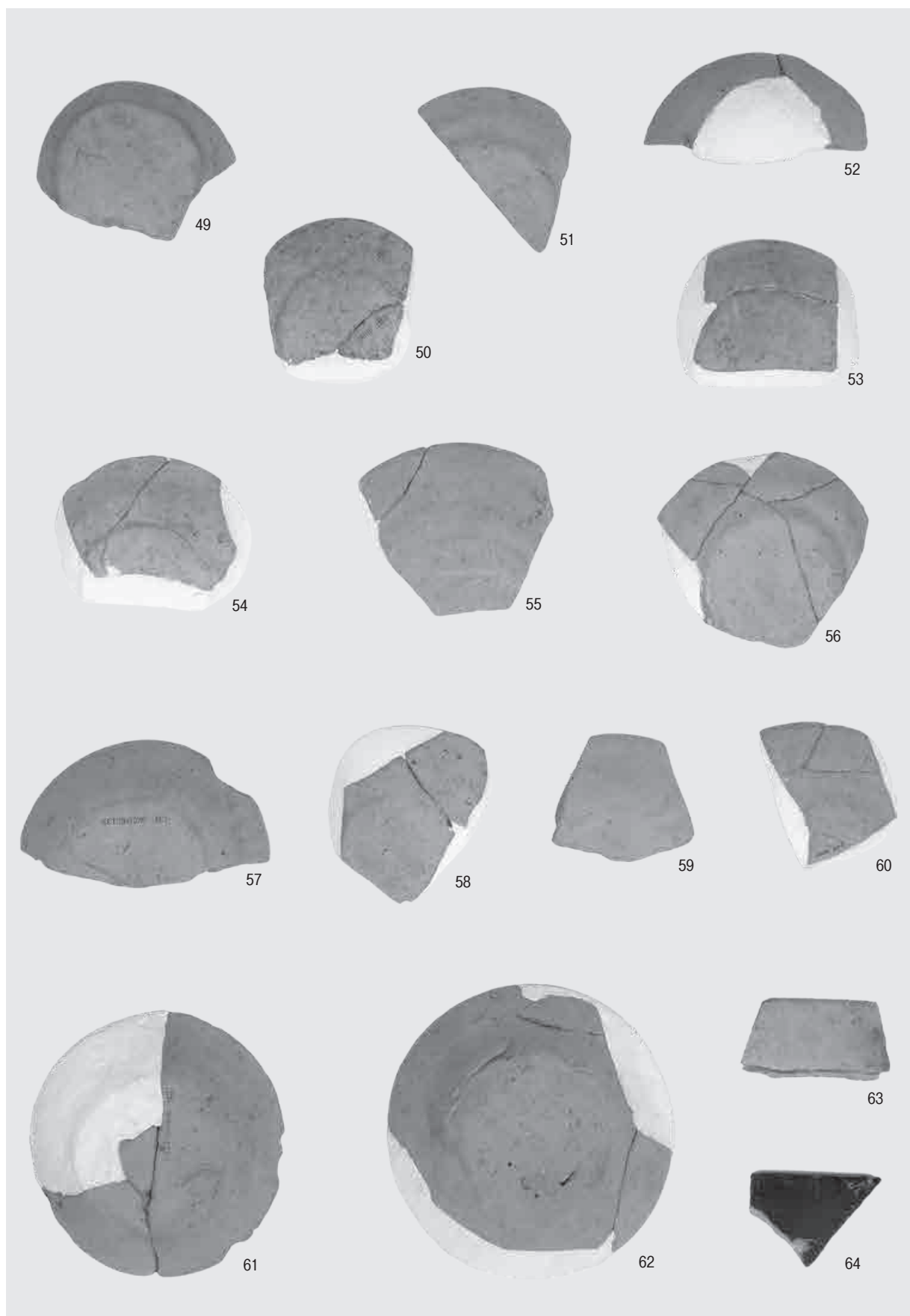
SK02出土遺物 (2)



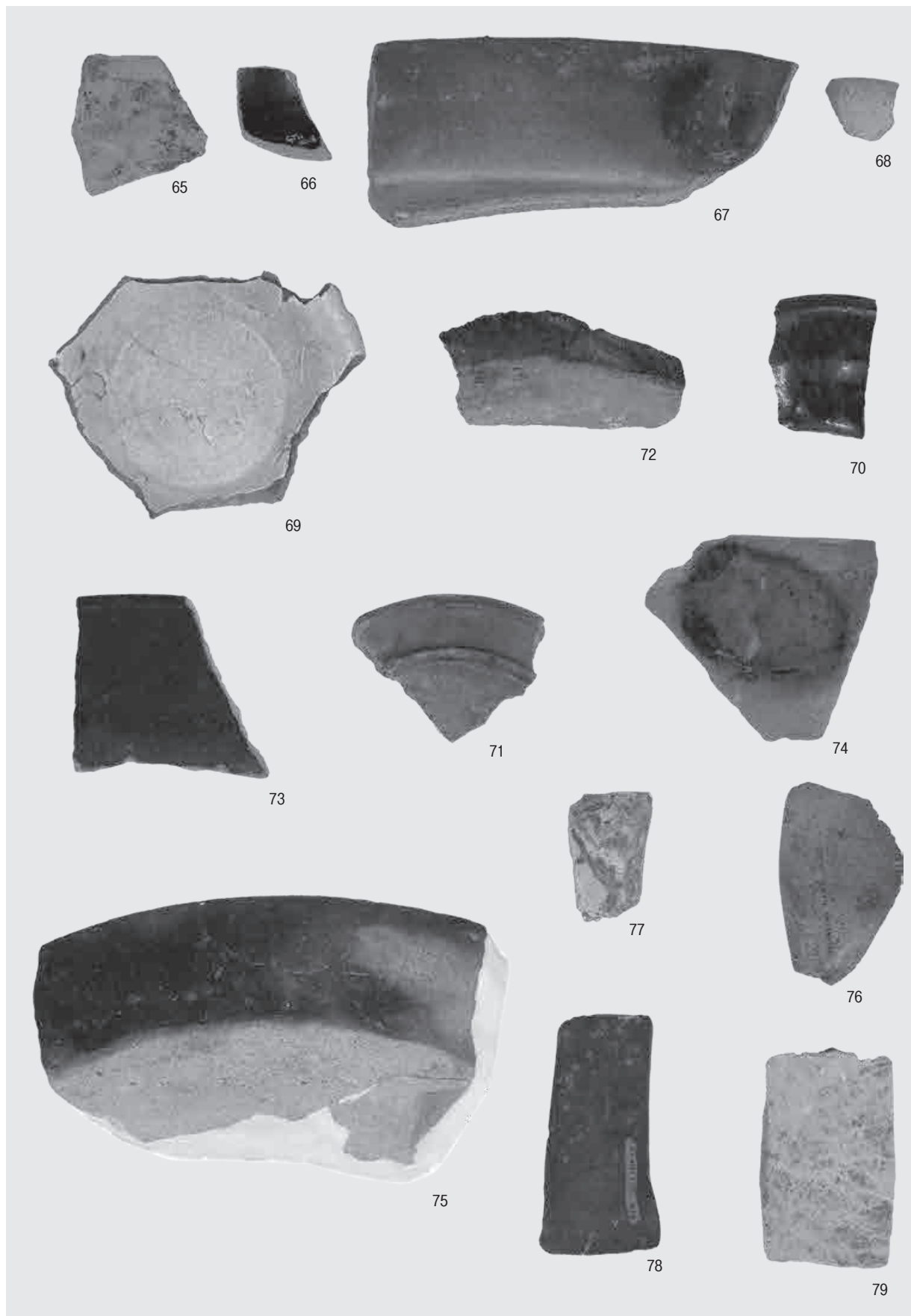
SK03 · SK04 出土遺物



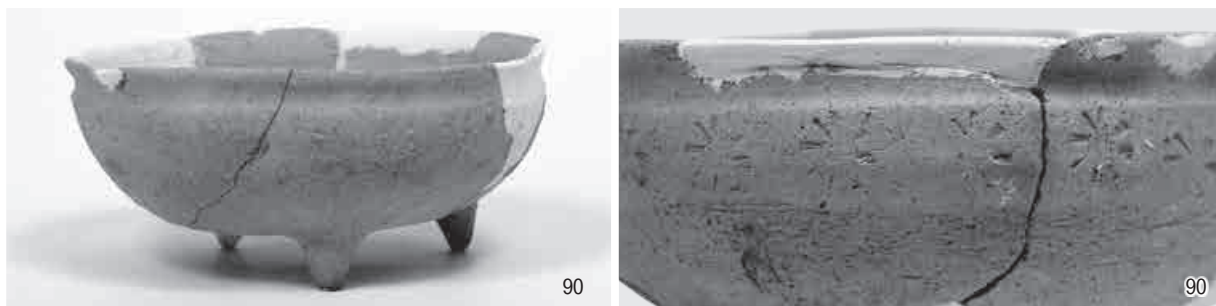
SK03 · SK04 · SD04 出土板碑



SK05・SK06 出土遺物

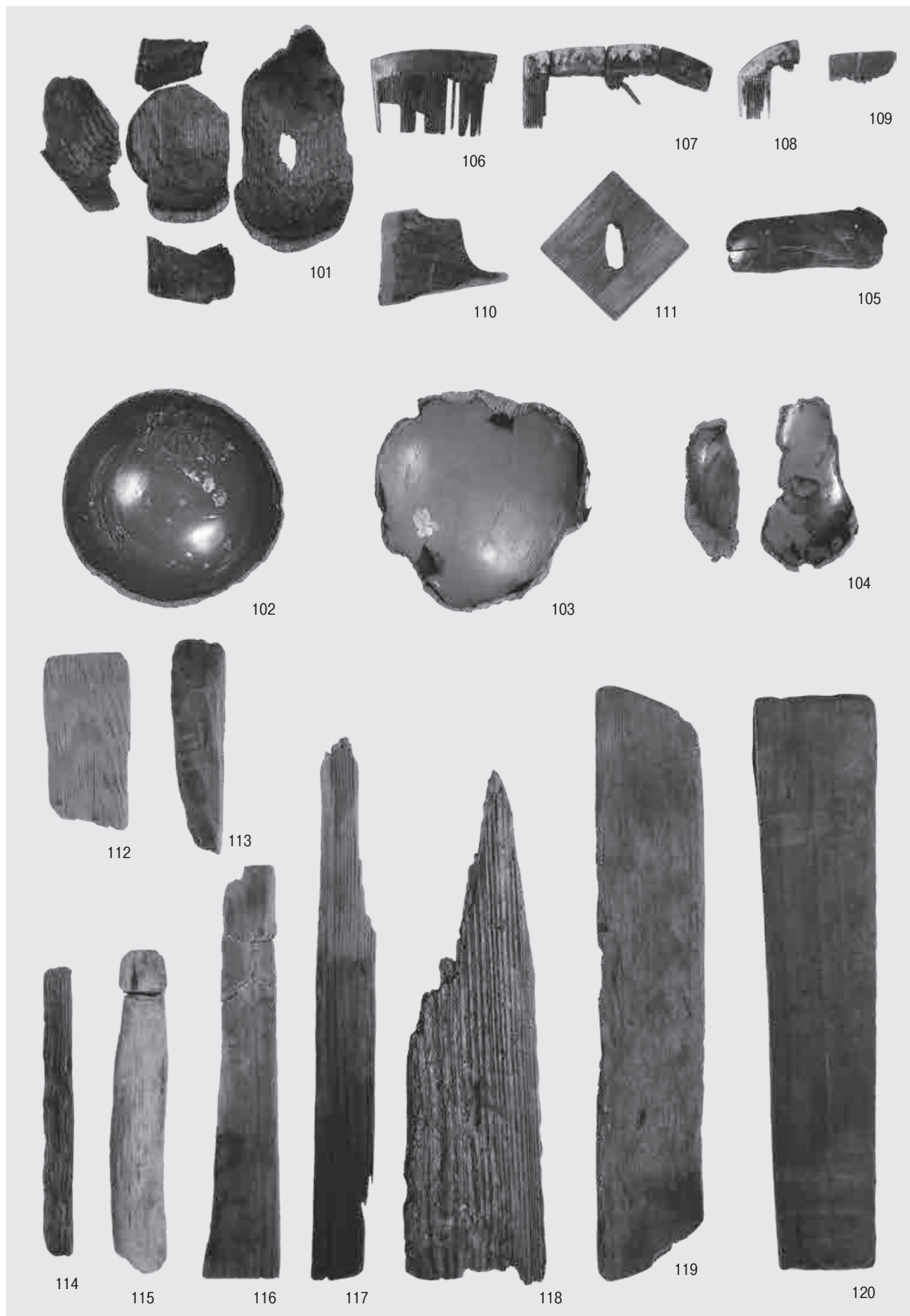


SK07・SK08・SK09・SK11出土遺物



SE01・SD01・SD02・SD04・SD06・SD07・グリッド出土遺物

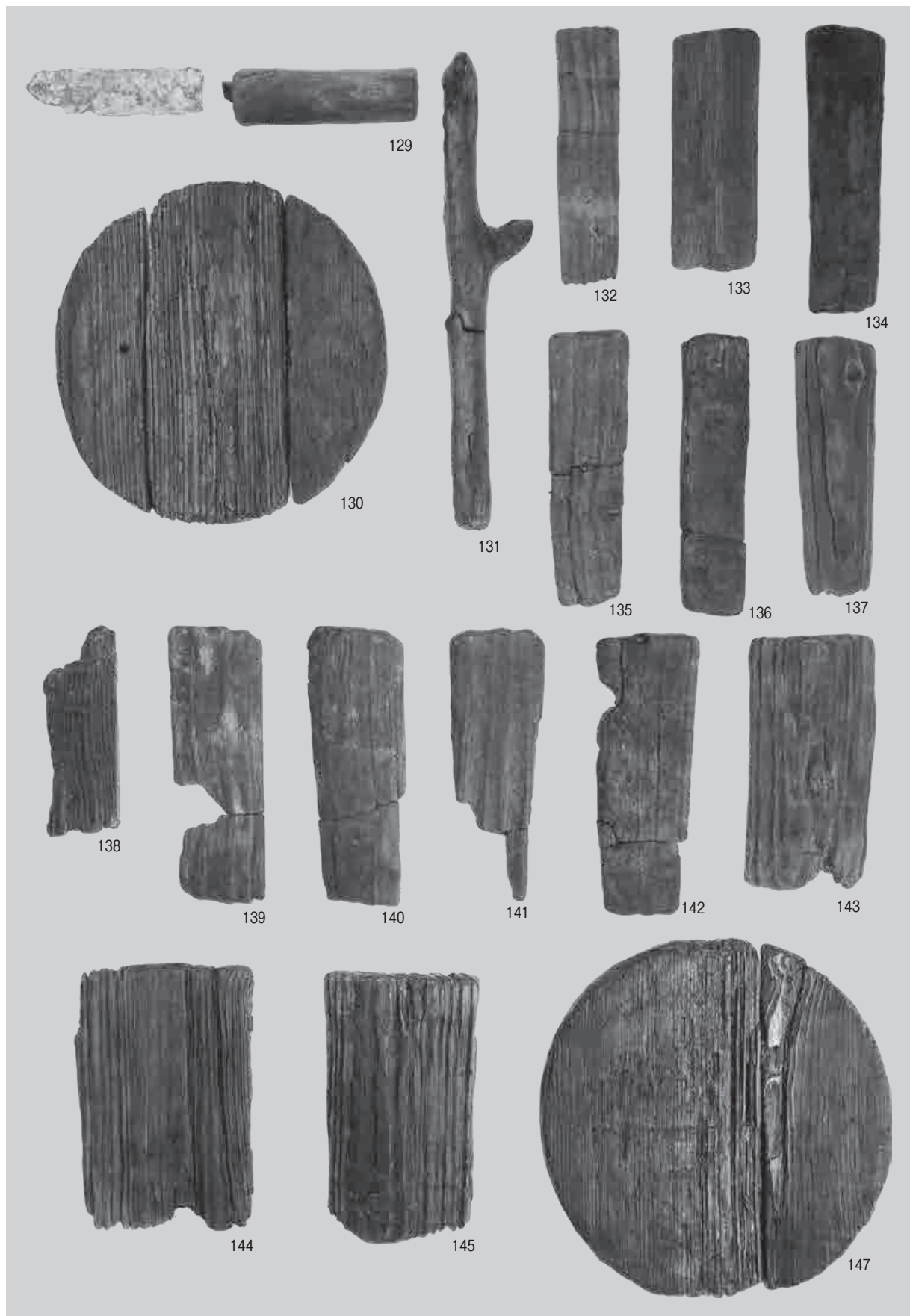




SD01・SK02出土木製品



SK02・SK05・SK11 出土木製品



SK03・SK08出土木製品

## 報告書抄録

ふりがな	こしがやごてんあとはくつちょうさほうこくしょ I
書名	越ヶ谷御殿跡発掘調査報告書 I
副書名	サンリットタウン越谷 A・サンリットタウン越谷 B 新築工事に係る埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	一
シリーズ名	越谷市埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ番号	第 2 集
編著者名	菟原雄大
編集機関	越谷市教育委員会
所在地	〒 343-8501 埼玉県越谷市越ヶ谷四丁目 2 番 1 号 TEL 048 (964) 2111
発行年月日	西暦 2017 (平成 29) 年 2 月 28 日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号		北緯 〃〃	東経 〃〃	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
こしがやごてんあ 越ヶ谷御殿跡	さいたまけんこしがや おおあざ 埼玉県越谷市大字 ごてんちよう 御殿町 4414 - 1、 4414 - 2 の各一部	11222	78-008	35° 53' 46"	139° 47' 13"	20160114 ～ 20160226	290	記録保存 調査 (集 合住宅新 築工事)

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項
こしがやごてんあ 越ヶ谷御殿跡	集落跡 屋敷跡	鎌倉時代 室町時代 江戸時代	溝 土坑・井戸 ピット	9 条 11 基 2 基	瓦質土器、青磁、板碑、 土師器皿、近世陶磁器、 瓦、木製品	御殿町地内における発掘 調査で初めて中世遺物が 出土した。

要約	<p>越ヶ谷御殿跡は元荒川の右岸に立地している。越ヶ谷御殿は慶長 9 年 (1604) に会田出羽屋敷跡に設置され、その後、明暦の大火 (1657) で江戸城が焼失した際に御殿を江戸城二の丸に移すため解体されたといわれている。なお、会田出羽屋敷の成立については、天正 17 年 (1589) に没した会田出羽資清が信濃から越ヶ谷に住まいしたと伝えられていることから、16 世紀後半までには会田出羽屋敷が成立したと考えられる。</p> <p>今回の調査では掘立柱建物跡や塀跡などは検出されおらず、越ヶ谷御殿の中核が設置された場所と本調査区は位置が異なる可能性がある。中世の遺構・遺物については 15 世紀後半から 16 世紀後半までに帰属するものがあり、会田出羽屋敷成立前後の状況を示す可能性がある。</p>
----	-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

越谷市埋蔵文化財発掘調査報告書 第2集

## 越ヶ谷御殿跡発掘調査報告書 I

－サンリットタウン越谷A・サンリットタウン越谷B  
新築工事に係る埋蔵文化財発掘調査報告書－

発行 越谷市教育委員会  
埼玉県越谷市越ヶ谷四丁目2番1号  
電話 048(964)2111

発行日 平成29年2月28日

印刷 株式会社 秀飯舎